



鳥取市
横枕古墳群 I

浄水施設整備事業に係る
横枕41～44、52～58号墳の発掘調査



2002年

財団法人 鳥取市文化財団

鳥取市

横枕古墳群 I

浄水施設整備事業に係る
横枕41～44、52～58号墳の発掘調査



2002年

財団法人 鳥取市文化財団

鳥取市文化財団氏寄贈

序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査の必要性が高まっています。埋蔵文化財はその地域の先人たちの生活を語る歴史的資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めているところです。

さて、ここに報告いたします横枕古墳群の発掘調査事業は、浄水施設整備事業に伴って鳥取市教育委員会の指導のもとに平成11(1999)年度を(財)鳥取市教育福祉振興会が、同12(2000)・13(2001)年度を当文化財団が実施したものです。この古墳群は千代川左岸の丘陵部に展開しておりますが、これまで本格的な発掘調査は行われておりませんでした。今回の調査の結果、これまでその存在が知られていたものと新たに見つかったものとを合わせて、11基の古墳等が検出され、この地域の古代文化の一端を明らかにする貴重な資料を提供してくれました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様をはじめとして関係の皆様幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりにりましたが、本調査に際しまして地権者および地元の皆様ならびに工事関係者の方々には埋蔵文化財保護につきまして深いご理解とご協力を賜りましたことを深く御礼申し上げます。

さらに調査にあたりご指導とご助言を賜りました諸先生ならびに関係各機関の皆様に対し感謝申し上げます。今後とも、なお一層のご指導とご協力のほどお願い申し上げます。

平成14年3月

財団法人 鳥取市文化財団
理事長 西尾 迢 富

例 言

1. 本書は、浄水施設整備事業に伴って平成11(1999)、12(2000)、13(2001)年度に実施した横枕古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鳥取市水道局の委託を受けて、平成11年度を(財)鳥取市教育福祉振興会 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、同12、13年度を(財)鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが鳥取市教育委員会の指導のもとに実施した。
3. 発掘調査を実施した遺跡の所在地は鳥取市横枕字天王谷、上味野字小屋場である。
4. 各年度ごとの現地調査期間と調査総面積は次のとおりである。
 - [平成11(1999)年度]
 - ・期間 平成11年7月15日～12月29日
 - [平成12(2000)年度]
 - ・期間 平成12年4月18日～10月19日
 - [平成13(2001)年度]
 - ・期間 平成13年4月23日～5月30日
 - (調査総面積 5,051㎡)
5. 本書に掲載した実測図、各種表類は調査に参加した全員の協力を得て調査員・調査補助員・室内作業員で作成し、主に山田・神谷が確認を行ったが、その際、杉谷美恵子の協力を得た。
6. 写真撮影は、各担当調査員、調査補助員が行い、航空写真については株式会社ワールドに委託した。
7. 本書の執筆・編集は山田、神谷が担当した。
8. 発掘調査によって作成された記録書類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。

凡 例

1. 本書における方位は、座標北の第1～3図を除き磁北を示す。また、レベルは海抜標高である。
2. 本書に掲載した遺構の略号は次のとおりである。
古墳=M 土坑(土壙)=SK ビット=P
3. 今回の調査によって出土した遺物には、遺跡名、遺構名、取上げ年月日、遺物番号(遺物台帳登録番号)を記した。(例/99横枕、44M、991028、No45) なお、遺物台帳には基本的に各古墳(遺構)ごとの取り上げ順による通しの遺物番号で登録されている。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の経過	1
3. 調査の組織・体制	2
II 古墳群の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III 調査の結果	7
1. 横枕古墳群の概要	7
2. 平成11(1999)年度の調査	7
1) 横枕43号墳	7
2) 横枕44号墳	21
3) 横枕52号墳	35
4) 土坑(土壌)	39
5) ピット	46
3. 平成12(2000)年度の調査	47
1) 横枕42号墳	47
2) 横枕53号墳	57
3) 横枕54号墳	61
4) 横枕55号墳	64
5) 横枕56号墳	69
6) 横枕57号墳	76
7) 横枕58号墳	80
8) 土坑	83
9) 古墳築造以前	86
4. 平成13(2001)年度の調査	91
1) 横枕41号墳	91
2) B区	92
5. その他	95
IV おわりに	96
出土遺物観察表	101
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 横枕古墳群の位置	3	第41図 横枕42・58・55・54・57・53・41号墳墳丘遺存図	51・52
第2図 横枕古墳群周辺遺跡分布図	5	第42図 横枕42号墳墳丘遺存図	53・54
第3図 横枕古墳群分布図	6	第43図 横枕42号墳墳丘断面図	55・56
第4図 横枕43号墳出土遺物実測図	8	第44図 横枕53号墳墳丘断面図	55・56
第5図 平成11(1999)年度調査区地形図	9・10	第45図 横枕53号墳出土遺物実測図	57
第6図 横枕52・44・43号墳墳丘遺存図	9・10	第46図 横枕53号墳墳丘遺存図	58
第7図 横枕43号墳墳丘断面図	11・12	第47図 横枕53号墳第1主体部実測図	59・60
第8図 横枕44号墳墳丘断面図	11・12	第48図 横枕54号墳出土遺物実測図	61
第9図 横枕52号墳墳丘断面図	11・12	第49図 横枕54号墳墳丘遺存図	62
第10図 横枕43号墳墳丘遺存図	13・14	第50図 横枕54号墳墳丘盛土除去後地形図	63
第11図 横枕43号墳第1主体部実測図	15・16	第51図 横枕54号墳墳丘断面図	65・66
第12図 横枕44号墳墳丘遺存図	17・18	第52図 横枕55号墳墳丘断面図	65・66
第13図 横枕44号墳石室実測図(1)	19・20	第53図 横枕55号墳墳丘遺存図	67・68
第14図 横枕44号墳石室実測図(2)	21	第54図 横枕55号墳出土遺物実測図	69
第15図 横枕44号墳石室石材(腰石以上)抜取り後実測図	21	第55図 横枕55号墳周溝内出土遺物実測図	69
第16図 横枕44号墳出土遺物実測図	22	第56図 横枕56号墳地形図	70
第17図 横枕44号墳石室内遺物出土状況実測図	23・24	第57図 横枕56号墳墳丘検出状況図・墳丘断面図	71・72
第18図 横枕44号墳石室内出土遺物実測図(1)	26	第58図 横枕56号墳石室実測図	73・74
第19図 横枕44号墳石室内出土遺物実測図(2)	27	第59図 横枕56号墳墳丘盛土除去後地形図	75
第20図 横枕44号墳石室内出土遺物実測図(3)	28	第60図 横枕57号墳墳丘断面図	77・78
第21図 横枕44号墳石室内出土遺物実測図(4)	29	第61図 横枕58号墳墳丘断面図	77・78
第22図 横枕44号墳石室内出土遺物実測図(5)	30	第62図 横枕57号墳墳丘遺存図	79
第23図 横枕44号墳石室内出土遺物実測図(6)	31	第63図 横枕58号墳墳丘遺存図	80
第24図 横枕44号墳石室内出土遺物実測図(7)	32	第64図 横枕58号墳第1主体部実測図	81・82
第25図 横枕44号墳第2主体部(石棺)実測図	33・34	第65図 S K - 07実測図	84
第26図 横枕52号墳出土遺物実測図	35	第66図 S K - 08実測図	85
第27図 横枕52号墳墳丘遺存図	36	第67図 S K - 09実測図	86
第28図 S K - 01実測図	37・38	第68図 各古墳築造以前(盛土除去後)地形図及び遺物出土位置図	87・88
第29図 S K - 02実測図	39	第69図 各古墳築造以前出土遺物実測図(1)	89
第30図 S K - 03出土遺物実測図	40	第70図 各古墳築造以前出土遺物実測図(2)	90
第31図 S K - 03実測図	40	第71図 横枕41号墳墳丘遺存図	92
第32図 S K - 04遺存図	41	第72図 B区及び横枕41号墳墳丘断面図	93・94
第33図 S K - 04出土遺物実測図	42	第73図 遺構外出土遺物実測図	95
第34図 S K - 05実測図	42	第74図 遺構外五輪塔出土状況図	96
第35図 S K - 04実測図	43・44		
第36図 S K - 06実測図	45		
第37図 P - 01 ~ 05実測図	46		
第38図 横枕42号墳出土遺物実測図	47		
第39図 横枕42号墳周溝内出土遺物実測図	48		
第40図 平成12(2000)・13(2001)年度調査区地形図	49・50		

挿表目次

第1表 横枕43号墳第1主体部出土土類一覧…… 8	第3表 その他の遺構調査一覧 ……………100
第2表 横枕古墳群調査古墳一覧 …………… 99	

写真図版目次

PL. 1 1.調査地遠景(東南東上空から) 2.調査地遠景(西北西上空から)	2.横枕44号墳石室内出土遺物(1)
PL. 2 1.平成11年度調査地全景(東から)	PL.13 1.横枕44号墳石室内出土遺物(2)
PL. 3 1.横枕43号墳調査前(西から) 2.横枕43号墳調査後(西から)	PL.14 1.横枕44号墳石室内出土遺物(3)
PL. 4 1.横枕43号墳墳丘断面(1)(東南東から) 2.横枕43号墳墳丘断面(2)(南東から) 3.横枕43号墳第1主体部断面(南南東から)	PL.15 1.横枕44号墳石室内出土遺物(4)
PL. 5 1.横枕43号墳第1主体部(北北西から) 2.横枕43号墳第1主体部内遺物出土状況(北北西から) 3.横枕43号墳第1主体部直上出土遺物 4.横枕43号墳第1主体部内出土遺物	PL.16 1.横枕44号墳石室内出土遺物(5)
PL. 6 1.横枕44号墳調査前(南から) 2.横枕44号墳石室検出状況(西南西から)	PL.17 1.横枕44号墳石室内出土遺物(6)
PL. 7 1.横枕44号墳墳丘断面(1)(西から) 2.横枕44号墳墳丘断面(2)(南南西から) 3.横枕44号墳石室内石材転落状況(南西から)	PL.18 1.横枕44号墳石室内出土遺物(7)
PL. 8 1.横枕44号墳石室内遺物出土状況(南西から)	PL.19 1.横枕52号墳調査前(北東から) 2.横枕52号墳墳丘検出状況(北東から)
PL. 9 1.横枕44号墳石室閉塞部(南西から) 2.同左(北東から) 3.横枕44号墳石室羨道部(南西から) 4.同左(北東から) 5.横枕44号墳石室右側壁(1)(北西から) 6.横枕44号墳石室玄門部(1)(北西から) 7.横枕44号墳石室奥壁(南西から) 8.横枕44号墳石室右側壁(2)(北西から)	PL.20 1.横枕52号墳墳丘断面(北東から;東北東から;南東から;北東から) 2.横枕52号墳調査後(北から) 3.横枕52号墳出土遺物 4.S K-01(北西から;南西から)
PL.10 1.横枕44号墳石室左側壁(1)(南東から) 2.同左(2)(南東から) 3.横枕44号墳石室玄門部(2)(南東から) 4.同左(3)(南東から) 5.横枕44号墳石室石材除去後(南西から)	PL.21 1.S K-02(南西から;南西から) 2.S K-03(南東から;出土遺物;北西から) 3.S K-04(西から;北西から)
PL.11 1.横枕44号墳石棺検出状況(南西から) 2.横枕44号墳石棺蓋石除去状況(南東から) 3.横枕44号墳石棺墓壇完掘状況(南東から)	PL.22 1.S K-04出土遺物 2.S K-05(北から;北北東から) 3.S K-06(西南西から;南南東から)
PL.12 1.横枕44号墳出土遺物	PL.23 1.P-01断面(南から) 2.P-02断面(北から) 3.P-03断面(北から) 4.P-05-04断面(北西から) 5.P-01~05完掘状況(南東から)
	PL.24 1.平成12,13年度調査地全景(航空写真)(横枕56号墳を除く)
	PL.25 1.横枕42号墳調査前(北西から) 2.横枕42号墳墳丘検出状況(南から)
	PL.26 1.横枕42号墳墳丘断面(1)(南西から) 2.横枕42号墳墳丘断面(2)(南東から) 3.横枕42号墳周溝断面(東南東から)
	PL.27 1.横枕42号墳遺物出土状況(南東から) 2.横枕42号墳調査後(北西から)
	PL.28 1.横枕42号墳出土遺物 2.横枕42号墳周溝内出土遺物(1)
	PL.29 1.横枕42号墳周溝内出土遺物(2)

- PL.30 1.横枕53号墳調査前(南東から)
2.横枕53号墳墳丘検出状況(航空写真)
- PL.31 1.横枕53号墳墳丘断面(1)(西から)
2.横枕53号墳墳丘断面(2)(南西から)
3.横枕53号墳周溝断面(南から)
- PL.32 1.横枕53号墳第1主体部検出状況(南東から)
2.横枕53号墳第1主体部断面(南西から)
3.横枕53号墳第1主体部完掘状況(北西から)
- PL.33 1.横枕53号墳第1主体部石組み状況(北東から;南西から)
2.横枕53号墳第1主体部内遺物出土状況(南東から)
3.横枕53号墳第1主体部内出土遺物
4.横枕54号墳調査前(南東から)
- PL.34 1.横枕54号墳墳丘検出状況(北西から)
2.横枕54号墳調査後(北西から)
- PL.35 1.横枕54号墳墳丘断面(1)(東南東から;東北東から)
2.横枕54号墳墳丘断面(2)(東から;南東から)
3.横枕54号墳墳丘盛土下洋状遺構断面(北東から)
4.横枕54号墳出土遺物
- PL.36 1.横枕55号墳調査前(北から)
2.横枕55号墳墳丘検出状況(航空写真)
- PL.37 1.横枕55号墳墳丘断面(1)(北から;北北東から)
2.横枕55号墳墳丘断面(2)(南南東から;南南東から)
3.横枕55号墳墳丘断面(3)(南南東から;南南東から)
4.横枕55号墳墳丘断面(4)(南から;南南東から)
- PL.38 1.横枕55号墳墳丘検出状況(北から)
2.横枕55号墳調査後(北北西から)
3.横枕55号墳遺物出土状況(西南西から)
- PL.39 1.横枕55号墳出土遺物
2.横枕55号墳周溝内遺物出土状況(南東から)
3.横枕55号墳周溝内出土遺物
- PL.40 1.横枕56号墳調査前(北北東から)
2.横枕56号墳調査後(北東上空から)
- PL.41 1.横枕56号墳墳丘断面(1)(南から)
2.横枕56号墳墳丘断面(2)(南南西から)
- 3.横枕56号墳石室内埋土断面(北北東から)
- PL.42 1.横枕56号墳墳丘検出状況(南南西から)
2.横枕56号墳墳丘盛土;裏込土除去後(東南東から)
3.横枕56号墳石室南西壁(北北東から)
4.横枕56号墳石室北西壁(東南東から)
5.横枕56号墳石室北西壁石材設置状況(南南西から)
6.横枕56号墳出土遺物
- PL.43 1.横枕57号墳調査前(南東から)
2.横枕57号墳調査後(南東から)
- PL.44 1.横枕57号墳墳丘断面(北東から;北から;西から;北北西から)
2.横枕58号墳調査前(南西から)
- PL.45 1.横枕58号墳調査後(南から)
2.横枕58号墳墳丘断面(東南東から)
3.横枕58号墳石棺検出状況(東から)
4.横枕58号墳石棺断面(1)(東から)
5.横枕58号墳石棺断面(2)(北から)
- PL.46 1.横枕58号墳石棺掘下状況(1)(東から)
2.横枕58号墳石棺掘下状況(2)(北から)
3.横枕58号墳石棺墓室完掘状況(東から)
- PL.47 1. S K-07(北東から;南西から)
2. S K-08(南西から;南西から)
3. S K-09(南東から;北東から)
4. A区調査前(北西から)
5. A区遺物出土状況(東南東から)
- PL.48 1. 古墳築造以前出土遺物(1)
- PL.49 1. 古墳築造以前出土遺物(2)
2. 横枕41号墳調査前(北西から)
- PL.50 1. 横枕41号墳調査範囲調査後(北西から)
2. 横枕41号墳周溝断面(南西から)
3. B区調査前(南東から)
- PL.51 1. B区調査後(南東から)
2. B区断面(西から)
3. 遺構外出土遺物
- PL.52 1. 五輪塔出土状況(西から)及び出土五輪塔

I はじめに

1. 調査に至る経緯

横穴古墳群は鳥取市横穴、上味野、竹生地内の標高30～150m程度の丘陵上およびその裾部に形成されている古墳群である。古くから山裾部に露出した多くの横穴式石室が知られていたが、その後の県の分布調査等によって大小様々な古墳が50基余り確認されるとともに周辺平野部にも遺物散布地が認められている。しかしながら散布地も含めて本格的な発掘調査が行われたことはなくその詳細はあまり知られていない古墳群である。

今回の発掘調査は鳥取市が計画した浄水施設整備事業に起因する。上述のとおり事業計画地周辺では古くから古墳等の遺跡の存在が知られていたが、この事業計画を受けて鳥取市教育委員会では平成10年度から計画地周辺の分布調査を再度実施した。その結果、事業計画地内には複数の古墳が分布することや山裾の小平野部にも遺物散布地が認められることが判明した。その後、事業計画地内における埋蔵文化財の取り扱いについて市教育委員会と関係機関の間で種々の協議・検討が重ねられ、計画地の一部については変更がなされたものそれ以外については現状での保護、保存は難しく記録保存で対応することとなった。

2. 発掘調査の経過

横穴古墳群の発掘調査は、鳥取市水道局の委託を受け、平成11(1999)年度は財団法人鳥取市教育福祉振興会 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、また平成12(2000)・13(2001)年度は埋蔵文化財調査部門が移管になった財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが調査を実施した。

平成11年度の調査は、調査対象地である丘陵上の最も高い部分の調査を実施することとなり、6月末に立ち木の伐倒・整理、7月に現地までの進入路整備、資材整備・搬入を行って調査に着手した。調査にあたっては、43号墳と44号墳のほぼ中心を結ぶラインに基準杭ライン(C1～C10)を、また52号墳についてはC10杭から尾根に沿ってこのラインと40°角度を振った基準杭ライン(C10～C16)を設定し、各古墳ごとにそれぞれのラインに直交する測量杭を設定した。その後現地形の測量を行い、先に測量の終了した43号墳から44号墳、52号墳の順番に順次表土除去・墳丘検出へ移行していった。墳丘遺存図測量の後埋葬施設の検出に取りかかったが、43号墳および52号墳では墳丘上面での検出が困難であったため墳頂部にグリッドを設定して少しずつ掘り下げるとともにサブレンチ掘削を行なって埋葬施設の検出に努めた。その結果、43号墳は1基、44号墳は2基の埋葬施設を持つ古墳時代後期のものであることが判明した。しかしながら52号墳では最終的に埋葬施設等を検出することができず、現地形の状況等から既に流失したものと判断された。また他に、43号墳の北側墳裾部および北東側の緩やかな傾斜地から土坑やピットが検出され、44号墳の北側墳裾まわりや52号墳の南西側丘陵根上からの傾斜地から土坑が検出されている。こうして主体部等の状況が明らかになった状態で航空写真撮影、各種実測、盛土除去等を行なって現地調査を平成11年12月に終了した。

平成12年度の調査は、まず対象地内で1基だけ離れて山裾に造営されている横穴式石室である56号墳の調査を4～5月に実施した。次いで6月の立ち木の伐倒・整理後に丘陵上の古墳の調査に取りかかり、前年度同様に尾根筋ラインで各古墳のほぼ中央部をとるラインに必要に応じて測量杭を設定して地形測量を行なった。表土除去作業は尾根の上位側から開始し、順次墳丘検出・埋葬施設検出へと移行していったが、地形の変化が著しく、僅かに53号墳および58号墳から各1基ずつの埋葬施設が検出されたのみである。その後航空写真撮影、各種実測、盛土除去等を行なったが、墳丘築造前の旧表土付近から弥生土器が検出されたため当該期の遺構の存する可能性を考慮してさらに精査を実施した。その間、10月6日にはマグニチュード7.3の「鳥取県西部地震」が発生したが、10月中で無事現地調査を終了した。

平成13年度の調査は、12年度調査地の南東側隣接地で地形測量までは既に終了していたものの、工事のためになくなった現地までの進入路整備に4月から着手した。今回の調査はちょうど41号墳上に調査対象地の境界がくるため、41号墳墳丘の北西側から53号墳までの尾根上緩斜面の表土除去、墳丘・周溝検出を行ない各種記録類を作成して5月に現地調査を終了した。

なお今回の調査では各年度ごとにおいて一部現地調査と並行しながら記録類の整理、出土遺物の整理

を可能な限り行ったが、最終的に13年度の現地調査終了後に残りをまとめて行うとともに報告書作成作業を行なって平成14年3月に終了した。

3. 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成11(1999)年度

調査主体 財団法人 鳥取市教育福祉振興会

理事長	西尾 迢 富(鳥取市長)
副理事長	藤原 繁 義 岸 本 晟
常務理事	田村 章 三
事務局長	田中 和 夫

調査指導 鳥取市教育委員会事務局 文化課

調査担当事務局 財団法人 鳥取市教育福祉振興会 鳥取市埋蔵文化財調査センター

所 長	平 木 一 義(鳥取市教育委員会文化課長)
副 所 長	加 藤 卓 美
事務担当者	秋 田 澄 世
調査担当者	調査員 前 田 均 山 田 真 宏 谷 口 恭 子
	調査補助員 神 谷 伊 鈴 杉 本 利 子 小 杉 雄 貴

平成12(2000)年度

調査主体 財団法人 鳥取市文化財団

理事長	西尾 迢 富(鳥取市長)
副理事長	本 田 達 郎 米 澤 秀 介
常務理事	田 中 哲 夫
事務局長	小 杉 宗 雄

調査指導 鳥取市教育委員会事務局 文化課

調査担当事務局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター

所 長	藤 井 博
副 所 長	加 藤 卓 美 前 田 均
事務担当者	秋 田 澄 世 水 戸 口 直 美
調査担当者	調査員 山 田 真 宏 前 田 均 谷 口 恭 子
	調査補助員 藤 本 隆 之 杉 本 利 子 小 杉 雄 貴
	下 多 みゆき

平成13(2001)年度

調査主体 財団法人 鳥取市文化財団

理事長	西尾 迢 富(鳥取市長)
副理事長	伊 藤 憲 男 米 澤 秀 介
常務理事	田 中 哲 夫
事務局長	小 谷 莊 太郎

調査指導 鳥取市教育委員会事務局 文化課

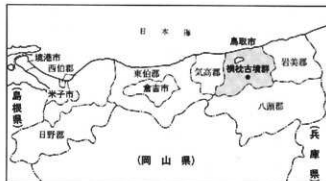
調査担当事務局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター

所 長	藤 井 博
副 所 長	加 藤 卓 美 前 田 均
事務担当者	秋 田 澄 世 水 戸 口 直 美
調査担当者	調査員 谷 口 恭 子 山 田 真 宏
	調査補助員 小 杉 雄 貴 神 谷 伊 鈴 木 原 美 和
	下 多 みゆき

Ⅱ 古墳群の位置と環境

1. 地理的環境

鳥取県は中国地方の北東部に位置し、北は日本海、南は中国山地に面し、西から南、東へと鳥根・広島・岡山・兵庫の各県に隣接する。県の面積は3,492.34km²で、そのうちの約75%が林野に占められている。林野の多くが形成される県南部の中国山地からは県域に向かって3本の一級河川(千代川、天神川、日野川)が北流し、それぞれその下流域に沖積平野(鳥取平野、倉吉平野、米子平野)を形成している。



第1図 横枕古墳群の位置

この中で県東部に位置する鳥取平野を市域の中心として発展してきた鳥取市は、その面積237.25km²、人口15万人余りを有する県庁所在地である。市域のほぼ中央部を北流する千代川によって鳥取平野は東西に二分されるが、かつてこの周辺は洪積世から沖積世初期頃には鳥取湾(鳥取潟)ともいえる入海(潟湖)で、その後の縄文海退や膨大な量の土砂堆積によって形成されたものと考えられている。そして現在では千代川河口には西岸に湖山砂丘、東岸に鳥取砂丘が形成され、さらに沖積作用によって形成された潟湖である湖山池が湖山砂丘の南部に形成されている。この湖山池は「池」の名称を持つものとしては日本一の広さを誇るといわれているが、その周辺の表土あるいは耕作土下には砂丘の発達による砂や、未分解のガマやヨシが堆積した泥炭層が多く認められ、これらの中には土器や木製品といった遺物が良好な状態で遺存していることが多く市内でも有数の遺跡の宝庫となっている。

今回調査した横枕古墳群は、JR鳥取駅から主要地方道鳥取鹿野倉吉線を約1.3km西進して千代川を渡った所を左折し、そのまま千代川に沿って主要地方道鳥取河原線を5km南進した所の右手、即ち西側1km前後に形成された標高約30~150m程度の丘陵上およびその裾部に立地する。所在地名は鳥取市横枕、上味野、竹生である。この丘陵は上述のとおり東に千代川を望みながら中国山地から鳥取平野へ延びるもので、標高294mの八町山を頂としてさらに北東へ延びる丘陵の一部である。これまでこの周辺ではあまり大きな開発は行われていなかったが、近年になって高速道路[姫路鳥取線]の予定路線となったことからのどかだった田園風景も一変していくのかもしれない。

2. 歴史的環境

鳥取市域で人々の最初の足跡が認められるのは現在のところ浜坂地内の砂丘から採集された黒曜石製有舌尖頭器においてで、旧石器時代にまで遡る遺物の可能性もあるが詳細は不明である。

縄文時代になると、鳥取平野南部丘陵上に造営された美和32-33号墳の盛土中や湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡から前期の土器が僅かながら検出されている。中期になると、桂見遺跡や東桂見遺跡、布勢第1遺跡などから断片的な土器の出土が認められるが、これらの湖山池南東岸の低湿地遺跡群は主に後期を中心とした遺跡群として知られてきたものである。このうち桂見遺跡ではこれまでの数次にわたる調査の中で多くの土器とともに、それぞれ外洋用・内水域用とも考えられる二種類の大型丸木舟が検出されたほか、槍を細いヒゴ状に加工したものをういて編み込んだ籠状木製品等が検出されている。また布勢第1遺跡では櫂を転用した杭で板を固定して護岸とした水路や鉢形・腕輪形とみられる漆塗り木製品等が検出され、この地域に高度な各種の技術が存在したことを窺わせている。横枕古墳群周辺では、2kmほど北の本高段木遺跡から二次堆積遺物とみられるものの晩期の突帯文土器が出土しており、その1kmほど北の山ヶ鼻遺跡からは後期後葉から晩期前葉と考えられる土器群が出土している。またさらにその1kmほど北の自然堤防上に立地する古海遺跡からは晩期の突帯文土器が出土している。これらの遺跡の位置や時期を考えると、時代の移り変わりとともに遺跡が丘陵部から自然堤防上へ、さ

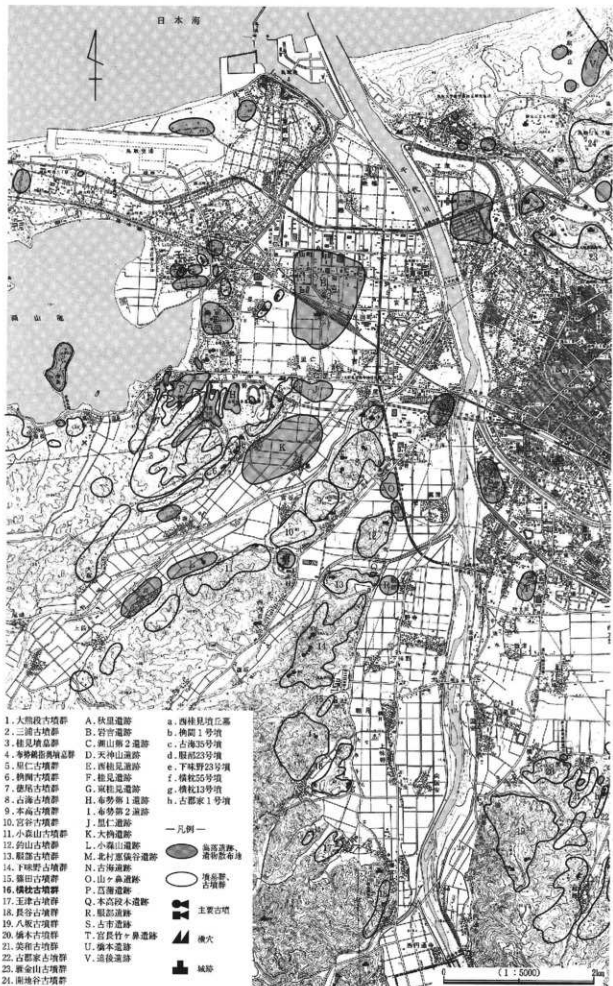
らに平野部の微高地上へ進出していったものと推察される。

弥生時代に入ると縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれ、湖山池南東岸の遺跡群や鳥取平野中央部の岩吉遺跡、千代川東岸の西大路土居遺跡等から前期の遺物が検出されているが、現時点ではそれらの遺物は断片的で不明な点が多い。中期・後期になると前述の遺跡の他に大杓遺跡、古海遺跡、天神山遺跡、山ヶ鼻遺跡、高瀬遺跡、服部遺跡、久末・古郡家遺跡、生山大池遺跡等が加わる。このうち桂見遺跡、東桂見遺跡、岩吉遺跡では、畦畔やプラントオバールのピークが確認されており、水田耕作が行われていたことが判明している。また岩吉遺跡や布勢第2遺跡、湖山第2遺跡等では竪穴住居跡や掘立柱建物跡、玉作り関連の遺構・遺物が検出されている。さらに西桂見遺跡、桂見墳墓群、布勢鶴指奥墳墓群、服部墳墓群等には墳丘墓や土壇墓が築かれており、平地に水田が、そしてその周辺の丘陵裾や微高地上に集落が、さらにその周辺の低丘陵上に墳墓が営まれたものと思われる。

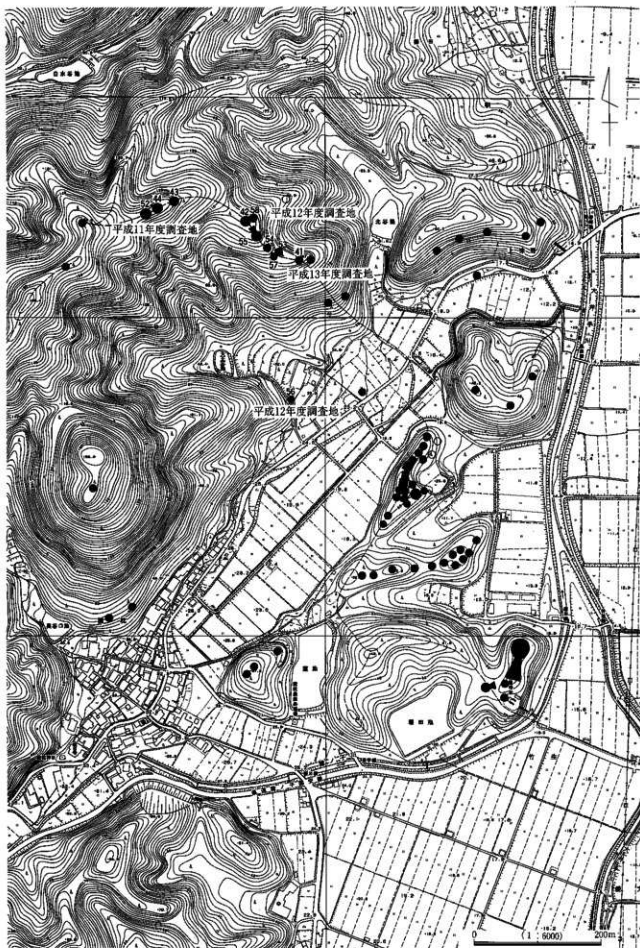
古墳時代に入っても集落遺跡は弥生時代のものとはほぼ重なって形成されているものと考えられているが、先述の遺跡等ではいずれも住居跡が点在あるいは同一場所で建て替えられているようで、大集落を形成したのとはいい難い。ただ千代川旧西岸の自然堤防上に形成された秋里遺跡や壱ノ谷遺跡はこの時期の特徴的な遺跡として挙げることができる。即ち前者は、多量の赤彩土器や土製・石製模造品が出土した土器群、土器溜りがあり、後者は湧水を中心として分銅形土製品や舟形・刀形等の木製模造品が出土しており、いずれも祭祀遺跡として評価の高い遺跡である。また鳥取平野南部丘陵の七谷窟跡からは古式須恵器が採集されており、この時期の生産遺跡として知られている。

この時期を特徴づける古墳に目を向けると、弥生時代の墳墓に引き続き平野周辺の低丘陵上に規模・形態ともに大小様々な古墳が造営される。このうち千代川西岸では湖山池南東岸の桂見古墳群、倉見古墳群、釣山古墳群、服部古墳群等に弥生時代の系譜を引くのではと考えさせる方墳が展開される。中でも桂見2号墳(長辺28m×高さ4.5m)の長大な木棺からは舶載鏡の斜縁帯鏡や内行花文鏡が出土し、それに先行する桂見1号墳(長辺22m×高さ2.5m)とともに周辺の古墳より主体部・副葬品とも卓越する。またこれらにやや遅れて前期後半から中期初頭に丘陵上に造営される桂見や倉見の小規模古墳の中には土器転用枕や平面形が湾曲する小口穴を有する木棺や舟形木棺が認められ、但馬地方等との交流を窺わせる。中期になると、前方後円墳の里仁29号墳(全長85m)や因幡地方最大規模の橢圓1号墳(全長92m)、前方後方墳の古海36号墳(全長67m)などが点在し、その他に畿内の影響を受けたと思われる膳付円筒埴輪等が出土した里仁古墳群や鉄鉾の出土した下味古墳群等がある。中期末から後期になると、前方後円墳としては布勢1号墳(全長59m)、大熊段1号墳(全長46.5m)、三浦1号墳(全長36m)、桂見6号墳(全長24.5m)、釣山2号墳(全長26.4m)や本報告の横枕55号墳などが知られているほか、主に小規模な円墳や方墳で構成される吉岡古墳群、高住古墳群、北村古墳群などがある。なおこの時期の千代川西岸ではこれまで東岸よりその調査事例が少なく、横穴式石室を持つ古墳については吉岡1号墳(葦岡長者古墳)や、巨石をくり抜いた石棺型石室をもつ古海13号墳(山ヶ鼻古墳)、高住12号墳等が知られる程度であったが、横枕古墳群には最近の分布調査で新規発見の横穴式石室を持つ古墳複数が存在しており、今後の調査が待たれるところである。

歴史時代になると湖山池南東部周辺には古代山陰道、駅衝、郡衙が推定されている。現在塔心礎の残る高瀬院寺が7世紀後半に創建されたと考えられており、山ヶ鼻遺跡から同時期の掘立柱建物群や漆等が検出されている。また千代川対岸の古市遺跡では、7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物や墨書土器、奈良三彩小壺等が検出されている。律令体制下では湖山池南東部周辺は因幡国高草郡に組み込まれ、すでにこの周辺には条里制が施行されるとともに東大寺領「高庭庄」として開発されたことが『東南院文書』の記載から知られている。この時期の遺跡としては、先述の山ヶ鼻遺跡や高瀬遺跡から墨書土器が出土しており、岩吉遺跡からは多量の墨書土器や木簡類、緑釉陶器、人形や鳥形・馬形といった祭祀具等が出土している。その後は、15世紀には湖山池東岸の天神山に因幡守護山名氏が城を構え因幡支配の拠点としたことが『因幡民談記』等から知られるが、この拠点を久松山鳥取城に移り、それからしばらくはこの周辺はどかな田園地帯に復することとなる。



第2図 横枕古墳群周辺遺跡分布図



第3圖 横枕古墳群分布圖

Ⅲ 調査の結果

1. 横枕古墳群の概要

横枕古墳群は、鳥取市横枕、上味野、竹生に所在し、標高30～150m程度の丘陵上およびその裾部に展開する古墳群である。この丘陵は、中国山地から鳥取平野へ延びるもののうち標高294mの「八町山」を頂として北東へ延びるもので、東に千代川を望みながら標高105mの「釣山」まで続く。丘陵上および裾付近には玉津所在城跡1(鶴尾城跡)や倭文城跡(比丘尼城跡)等の中世城館のほか、幾つかの墳墓群が形成されており、横枕古墳群の南側には玉津古墳群(8基)、倭文1号墳、長谷古墳群(8基)が、北側には、篠田古墳群(4基)、下味野古墳群(51基)、服部墳墓群(古墳・墳墓あわせて47基)、釣山古墳群(42基)がそれぞれ立地している。現在これらの丘陵は部分的に檜等の植林が成されているほかは松林あるいは雑木林で、その裾部分は椎茸栽培や果樹栽培、畑作地あるいはゴルフ練習場等に利用されている。

横枕古墳群は、横枕集落の北側後背地にあたる標高約160mの頂部から南東あるいは時計回りに周り込みながら東に下る各尾根筋、それらの裾部分、さらにこれらの丘陵から最大200m幅の小平野を挟んで東に形成された標高30～60m程度の複数の独立丘陵上に分かれて分布する。その数は、これまで51基が数えられていたが、今回の調査で新たに7基が見つかり、さらにその後の別の調査でも複数の新規古墳が見つかっており平成13年11月現在で79基を数える。(戦後に近藤時太郎氏によって著された「横枕記」には大正期の県道建設で多数の土器・鉄器が出土したことや昭和初期に近隣の村民によって古墳の発掘が行われたことが記載されている。また最近の簡単な踏査ながら新たに見つかる古墳が出てきており、今回の調査以降の分布図と対照表は改めて別に報告したい。)このうち東側の独立丘陵上にはこの古墳群中で最大の前方後円墳である13号墳(全長70m)が玉屋神社の北に立地し、そのほかの独立丘陵上には10～15m程度の小規模な円墳・方墳が密集して造営される。また横枕集落の北側の丘陵上には横穴式石室や木棺を主な埋葬主体とする小規模な円墳・方墳・前方後円墳がある程度のまとまりをもって、立地し、丘陵裾には横穴式石室を主な埋葬主体とする小規模な円墳が点在する。時間的には、本報告とその後調査から古墳時代前期～中期前半と後期の古墳が確認されているが、丘陵上からは弥生土器等も検出されている。

2. 平成11(1999)年度の調査

平成11年度の調査は、調査対象地最西部、最高所で標高130m付近の尾根上に位置して一支群を形成する横枕43、44号墳と、事前の踏査で見つかった52号墳の計3基の古墳が対象となったが、調査中に検出された土坑6基(SK-01～06)、ピット5基(P-01～05)についても同時に調査を実施した。位置関係について見ると、尾根の頂部に52号墳が、その東に隣接して44号墳が位置し、さらにその東に数m下って43号墳が立地する。また土坑等については、SK-01～03が44号墳の北側裾付近、SK-04が52号墳の西に数m下った傾斜地に、SK-06が43号墳北裾に、さらにSK-05と各ピットが43号墳北東側の緩傾斜地に位置する。

調査の結果、3基の古墳から計3基の埋葬施設と上述の土坑およびピットが検出され、主に埋葬施設や墳丘から壺杯、高杯、壺、甕、埴瓶、鉄刀、刀子、鉄鏃、鉄斧、白玉、砥石等が出土した。

1) 横枕43号墳(第1表;第4～7、10、11図;PL3～5)

位置と現状 横枕43号墳は調査区東側に位置し、標高130m程度の尾根上に立地する円墳で、周辺水田面からの比高差は110m程度である。調査前の墳丘遺存状況は比較的良好で、尾根の上位(西側)には尾根を横断する弧状のカットが認められるとともに、東側では2m以上を測る高まりが認められた。

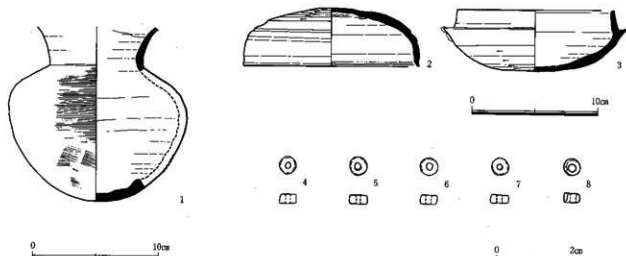
墳丘 墳丘は地山整形と盛土によって築造されている。このうち地山整形は、尾根上位(西側)をカットするとともに深さ80cm、幅5m程度の弧状の溝を掘り込んで墳丘部分を尾根から切り離す。また墳丘裾部を地山カットして基底部を造り出すとともに墳丘の北から時計回りに東、南にかけて最大深15cm程度

の浅い溝あるいは墳裾テラスを形成する。厚さ15cm程度の表土下に認められる盛土は、旧表土と考えられる暗黄褐色粘質土(第18層)上に、尾根の傾斜に沿って高位に薄く低位に厚く行われており、最大で60~80cm強を測る。墳丘規模は、東西墳裾間で14.8m、南側墳裾からの高さ3.1mを測る。

埋葬施設 埋葬施設は墳頂部ほぼ中央から1基(第1主体部)が検出された。当初墳頂部の精査で検出を試み、表土直下の第4層(暗黄褐色粘質土)で供献土器と見られる壺(第4図-1)を検出したが、墓塚検出は不可能で、墳頂部に検出用グリッドを設定した。掘り下げの結果、表土下20~50cm付近で旧表土・地山を掘り込む墓塚を検出したが、このような墳丘埋土状況から、墳丘は盛土途中で墓塚の掘り込みと遺体の埋置を行い、その後さらに盛土を行って成形したものと考えられる。

第1主体部墓塚の平面形は隅丸長方形で、一部二段掘りが成される。主軸はN-8.5°-Wにとり、やや軸を振るものの尾根の軸に直交方向を取る。規模は、墓塚上面で長さ4.50m、最大幅1.97m、検出面からの最大深0.98m、二段目で長さ4.10m、最大幅1.30m、最大深0.77mを測る。この二段目の平坦部は、西側長辺から時計回りに北側小口部、東側長辺の途中まで続くが、南東側で途切れ南側小口部では検出されなかった。床面は長さ3.4m、最大幅0.9m程度で、全体的には南から北へ緩やかに傾斜し、南側墓塚下場から約60cm北側付近から中央に向けて北以外の三方がやや凹む傾向を呈する。墓塚埋土状況から墓塚内には木棺が設置されていたものと見られ、北側は明確でないが、その他の第8~13、24、25層が棺材の裏込め土と考えられる。断面観察から、この木棺の規模は、長さ2.95m、幅0.6m、高さ45~70cm程度が推定され、墓塚床面のほぼ中央に床面より一回り小さな棺が設定されたものと考えられる。なお墓塚北側小口付近の地山岩盤を掘り込んだ壁面には、幅10cm程度の工具痕跡が認められる。

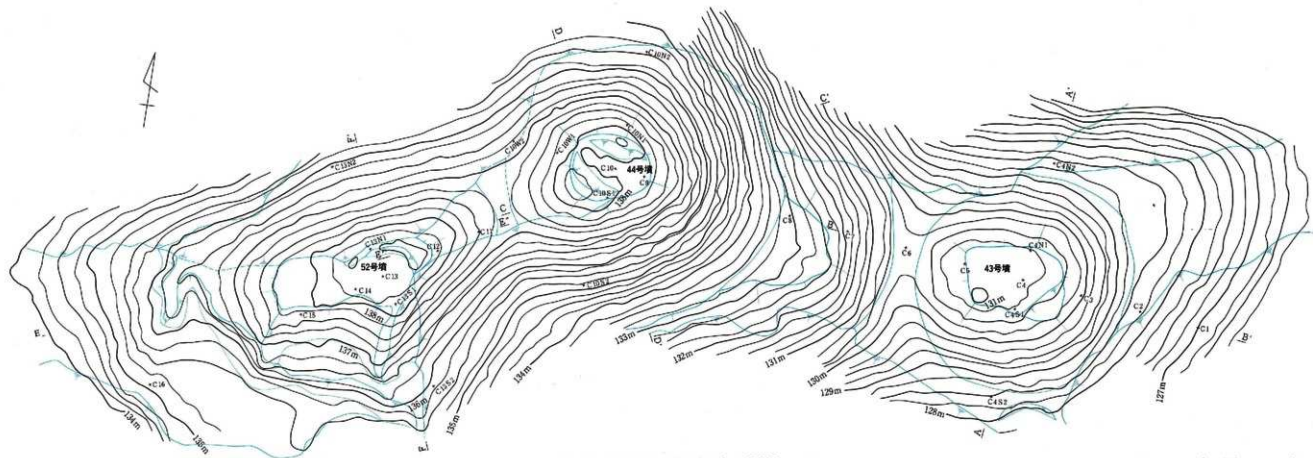
遺物は墳頂部等の表土中から須恵器片が出土したほか、上述の壺をほぼ第1主体部真上の盛土中からやや傾いた状態で検出した。主体部内からはその出土状況から転用枕と見られる蓋杯杯蓋・杯身(第4図-2、3)を墓塚の南側1/4付近の床面直上から伏せた状態で、また装身具と見られる白玉(同-4~8)を枕の杯蓋・杯身の間から床よりやや浮いた状態で検出した。このうち壺(1)は口縁端部は欠失しているもののその他の遺存状態は良好で、体部中上位に最大胴径をもつ。セット関係とみられる蓋杯のうち(2)は内湾して下る口縁部の端部に内傾する凹面をもつ。(3)の立上りは内傾して端部に面をもち、受部は外上方に短く納める。滑石製と見られる白玉は遺存状況が良好で、大きさもほぼそろっている。



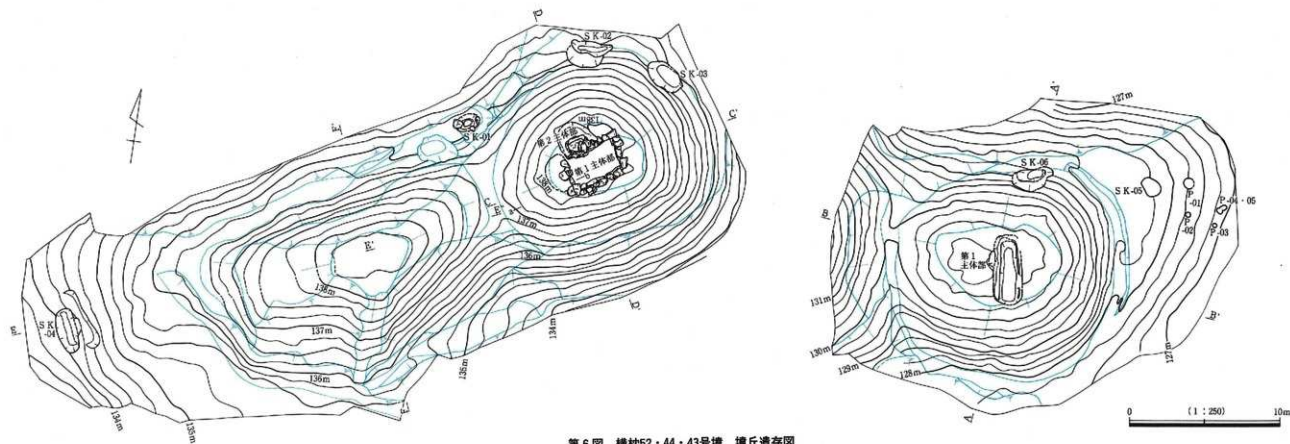
第4図 横枕43号墳 出土遺物実測図

洋図番号	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	色調	重量 (g)	材質	残存状況	備考	遺物番号
4	白玉	2.4	4.4	1.4	淡灰色	0.0935	滑石	完形		6
5	白玉	2.3	5.0	1.2	淡灰色	0.1120	滑石	完形		5
6	白玉	2.3	4.8	1.5	淡灰色	0.0975	滑石	完形		4
7	白玉	2.2	4.6	1.5	淡灰色	0.0845	滑石	欠形		4
8	白玉	2.6	4.5	1.9	淡灰色	0.0840	滑石	一筋欠		4

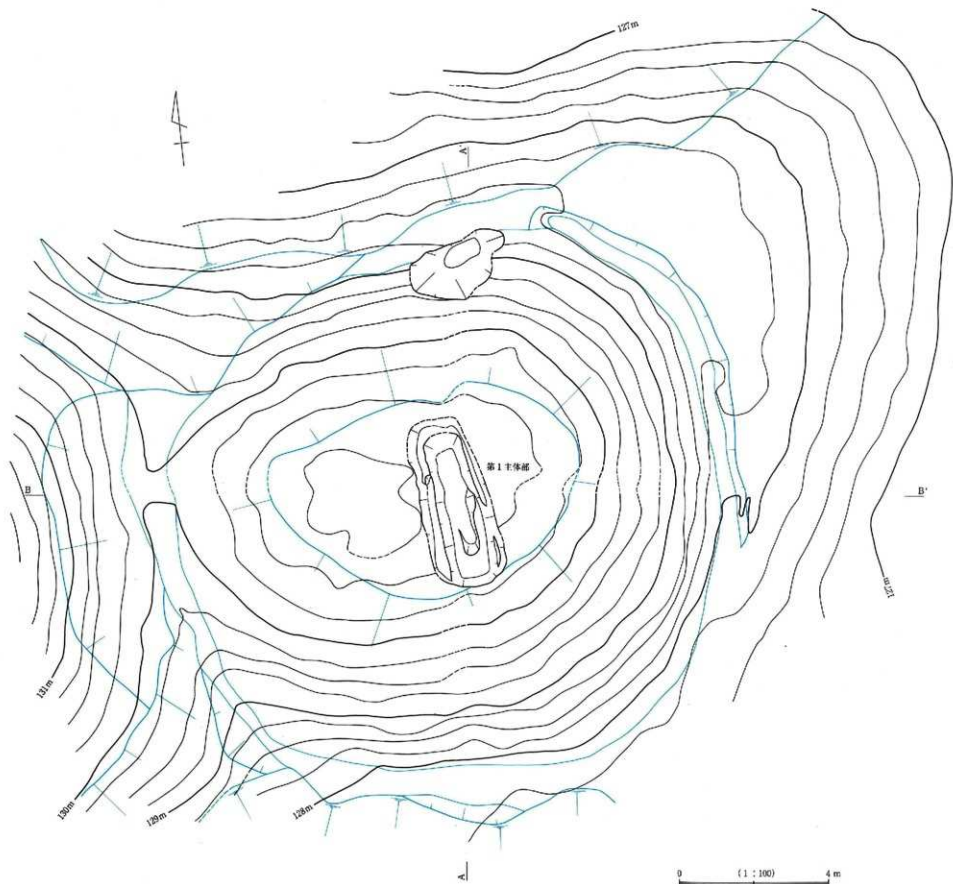
第1表 横枕43号墳 第1主体部出土玉頸一覽



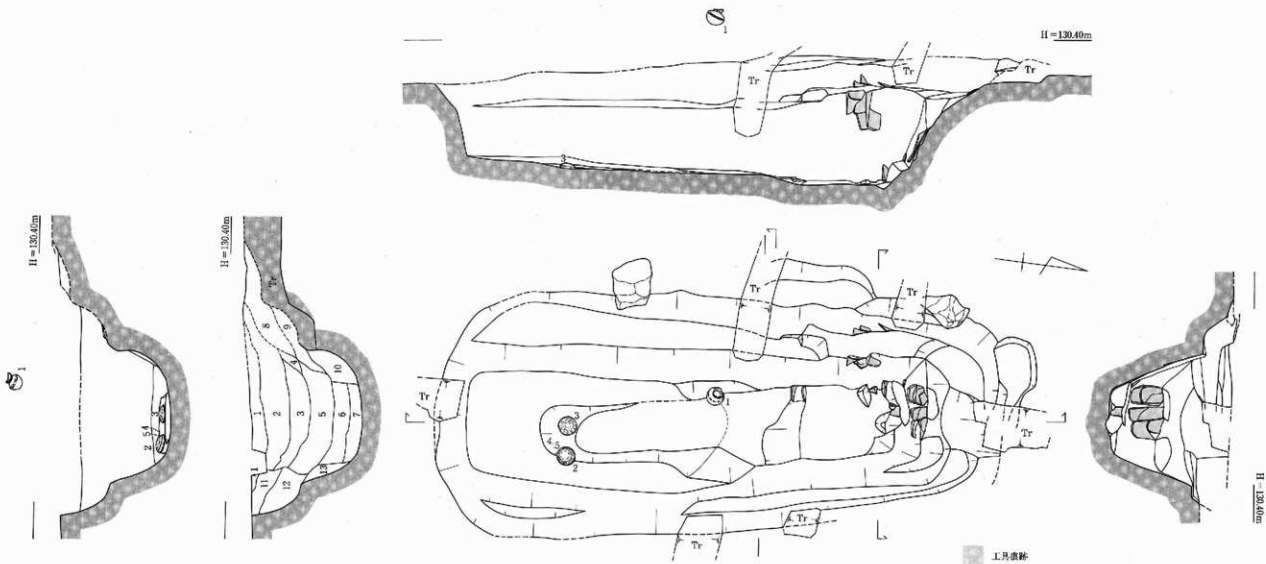
第5图 平成11(1999)年度調査区地形图



第6图 横枕52・44・43号墳 墳丘遺存图

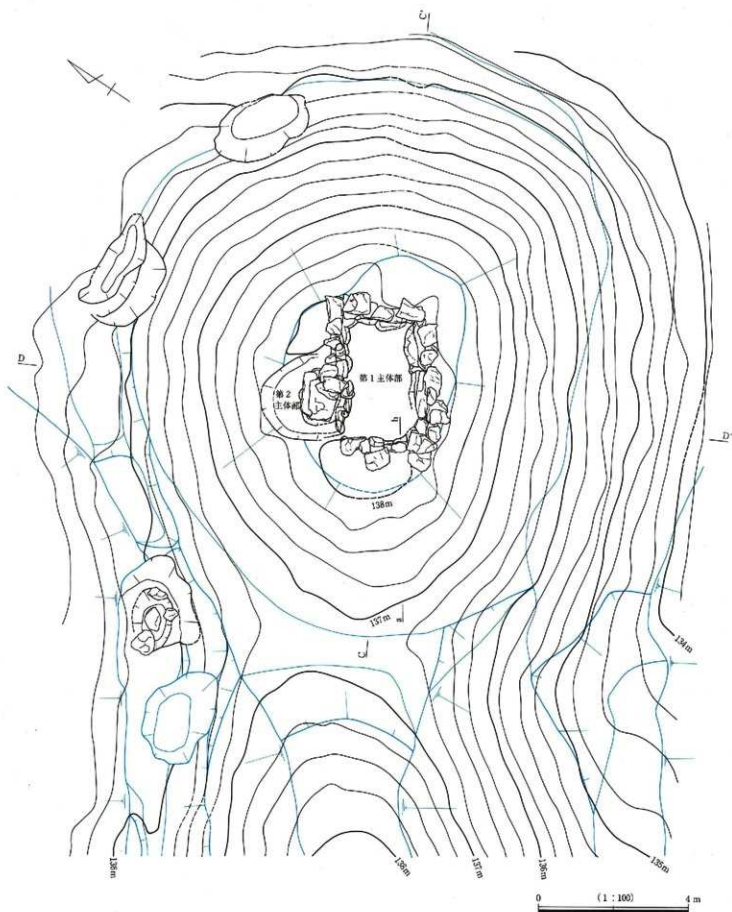


第10図 横枕43号墳 墳丘遺存図

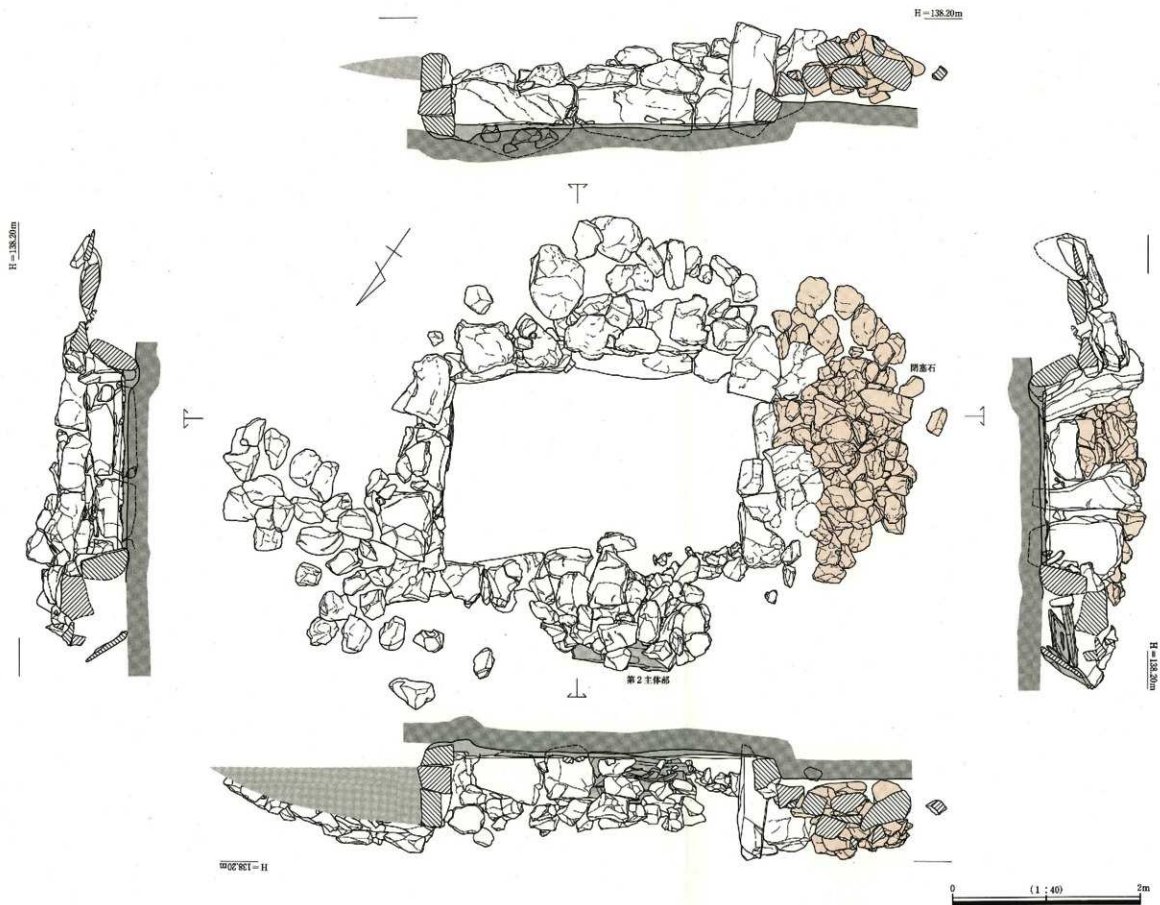


1. 明褐色粘質土(黄褐色粘質土および堆山ブロックを含む；やや明赤褐色かかる)
2. 明褐色粘質土(よりやや暗色かかる；暗褐色粘質土および堆山ブロックを含む)
3. 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土および堆山ブロックを多く含む；泥)を含む)
4. 明褐色粘質土(1-2よりやや暗；堆山ブロックを含む)
5. 濃い褐色粘質土(暗黄褐色粘質土および堆山ブロックを多く含む)
6. 濃い褐色粘質土(2より暗；堆山ブロックを多く含む)
7. 暗赤褐色粘質土(堆山ブロックを含む)
8. 暗赤褐色粘質土(2より暗；堆山ブロックを多く含む；泥片を含む)
9. 濃い褐色粘質土(堆山ブロックを密に含む)
10. 暗赤褐色粘質土(3より暗；やや暗赤褐色かかる)
11. 濃い褐色粘質土(5より暗；堆山ブロックを密に含む)
12. 暗褐色粘質土(堆山ブロックを多く含む)
13. 濃い褐色粘質土(5よりやや暗；堆山ブロックを密に含む)
14. 暗赤褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロックを含む)
15. 底シート状質土(堆山ブロックおよび泥片を含む；やや黄褐色かかる)
16. 明褐色粘質土(黄褐色粘質土および堆山ブロックを含む)
17. 明褐色粘質土(16よりやや暗；堆山ブロックを多く含む)
18. 暗褐色粘質土(3よりやや暗色かかる；堆山ブロックを含む)
19. 明褐色粘質土(褐色粘質土および黄褐色粘質土の混合(堆山ブロックを含む)
20. 明褐色粘質土(1-2よりやや暗；やや黄褐色かかる)
21. 明褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロックを含む；やや暗色かかる)
22. 明赤褐色粘質土(22より暗；暗赤褐色粘質土ブロックを含む；泥片を含む)
23. 明赤褐色粘質土(21より暗；暗赤褐色粘質土ブロックを密に含む；泥片を含む)
24. 明褐色粘質土(20より暗；暗赤褐色粘質土ブロックを含む；泥片をごく僅かに含む；やや赤褐色かかる)
25. 明褐色粘質土(20より暗；24よりやや暗；暗赤褐色粘質土ブロックを含む；泥片をごく僅かに含む；やや赤褐色かかる)

第11図 横枝43号墳 第1主体部実測図



第12图 横枕44号墳 墳丘遺存図

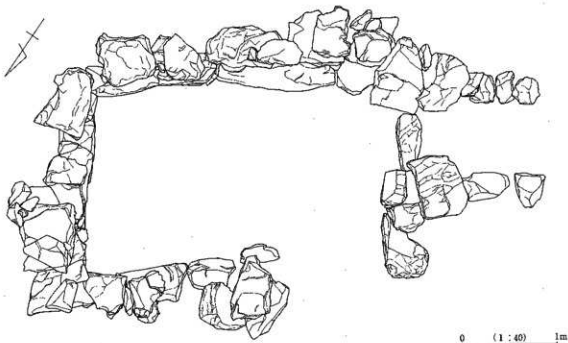


第13図 横枕44号墳 石室実測図 (1)

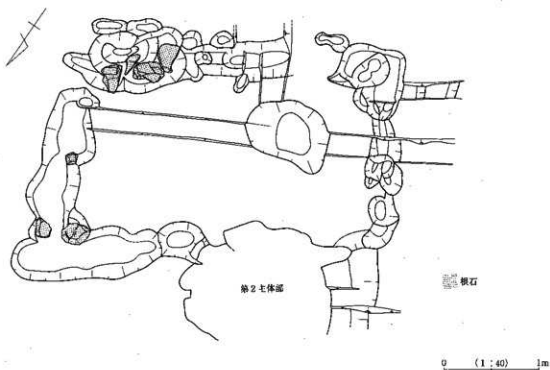
これらの出土遺物等から43号墳の築造時期は古墳時代後期後半頃と考えられる。

2) 横枕44号墳(第5,6,8,12~25図;PL6~18)

位置と現状 横枕44号墳は、43号墳の西約25mで尾根上の平坦部の東端に位置し、標高は43号墳より高位の138m程度に立地する円墳で、水田面からの比高差は120m弱である。調査前には墳頂部は凹み、石材の一部が露出した状態が見受けられたほか、墳丘の東から南東にかけての裾付近には抜き取られたものと思われる石材が認められ、内部施設に石室をもつ古墳であることが推察された。また、墳丘の西側には尾根を横断する僅かに弧状の浅い溝が認められるとともに、東側墳裾付近には傾斜の変換点が認め



第14図 横枕44号墳 石室実測図(2)



第15図 横枕44号墳石室石材(腰石以上)抜き取り後実測図

られ、その見かけ上の高さは3.5m程度であった。

墳丘 断面観察によると、旧表土と考えられる暗黄褐色粘質土(第74層)の遺存状況から、もともとほぼ平坦地であった尾根の先端部をさらに少しならして墳丘基底部を造り、さらに地山整形と多量の盛土を行うことで墳丘を造り出していることが判る。このうち墳丘基底部は、北から南にやや傾斜するももとの尾根平坦面の高位側即ち北側の一部を削り、南側の低位側に若干盛って(第70~73層)ならしたものとと思われる。

次いで地山整形は、まず墳丘の西側に52号墳と共有ながら尾根を横断する浅い溝を掘り込むことで墳丘を尾根から切り離し、その他の外周については地山をカットする形で行われる。なお、北西側墳裾については西側溝底部よりさらに1m以上低いレベルで52号墳の北西まで続く幅1m前後の細長い平坦面によってカットされており、両古墳の北側に墳裾を兼ねた墓道状の遺構があった可能性も考えられるが明瞭にはできなかった。また墳丘の東および南側の掘付近では、43号墳の東西墳丘断面と同様に、自然によると考えられる土層の変化が生じており、明確な裾の判断が困難であった。

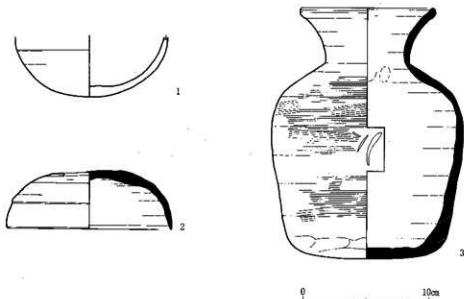
厚さ20cm程度の表土下に認められる盛土は、石材の裏に層序の乱れが認められず、明瞭な石室掘り方も認められないことから、墳丘基底部上に石室の構築とともに積み上げられていったものと考えられる。そして盛土上層付近ではその流失を抑えるためか、北東側および南東側墳丘肩部に30~50cm大の割石を配している。しかしながら盛土方法は互層状の緻密な層を形成するものとはいえず、結果として墳丘基底面造成の際に盛土を行った比較的基盤の弱い南東側では石室石材が外方へ傾いた状態となっている。なお多量の盛土が行われた結果、もともと浅い溝を掘り込んでいた墳丘の南西側には見かけ上深い溝が形成された形になっている。ただ石室の遺存状況から見ると、本来の盛土はもっと高かったものと容易に想像できるが、現状での盛土の遺存厚は最大で1m弱である。

墳丘規模は、径は東西側墳裾間で14.8m、高さは北東側墳裾から3.2m、南西側周溝底から1.12m、北西側墳裾から2.25mを測る。

埋葬施設 埋葬施設は墳頂部ほぼ中央から横穴式石室1基(第1主体部)と、その北側に接して石棺1基の計2基が検出された。

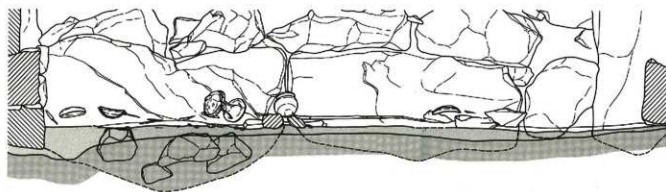
第1主体部

第1主体部は、奥壁に向かって左側に袖をもつ片袖式の横穴式石室である。主軸は尾根にほぼ平行のN-55°-Eにとり、尾根中心ラインよりやや南側にずれた位置で南西側に開口する。調査時には石材

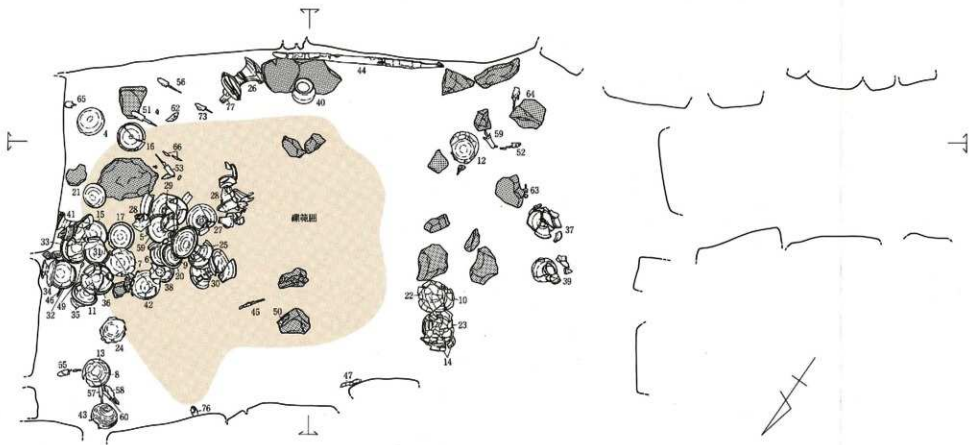
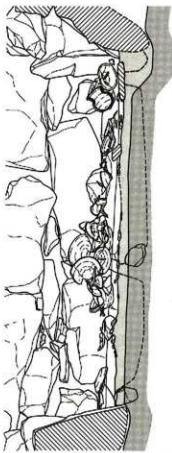


第16図 横穴44号墳 出土遺物実測図

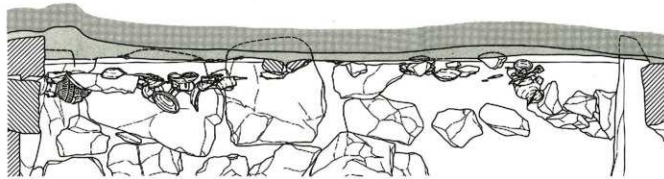
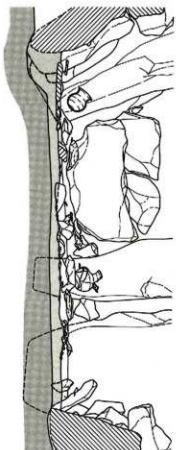
H=137.80m



H=137.80m



H=137.80m



H=137.80m

第17图 横枕44号墳 石室内遺物出土状況実測图

0 100 1m (1:20)

のうち支室から羨道にかけての天井石はすべて失われていたが、その他は腰石上に1石ないし2石が遺存している。このため当初の表土除去時には支室・羨道とも完全に埋没し、その埋土中には本石室に使用されていたものと見られる一抱え以上の大きさの割石がぎっしりと転落した状態であった。その状況は見る位置によってはある一定方向に並ぶ様相があり(PL7-3)、石室内が埋没する以前に一気に崩落したものと考えられる。埋土および転落石除去後の石室は、壁体の上部が遺存していないことと後述の第2主体部付近に乱れがあることを除くと比較的良好な遺存状態といえる。石室の全長(奥壁～羨道入り口)は4.7mを測る。

支室は、左側壁の一部を欠くが、内法で奥壁幅1.9m、右壁長3.15m(奥壁～框石まで)、左壁長3.18m、推定袖幅0.8mを測り、やや平行四辺形ぎみの長方形を呈する。最大遺存高は、奥壁0.83m、右側壁0.85m、左側壁0.87m、支門部1.05mである。壁体は、まず支門部には約50cm角で長さ1.2m、約30×40cm角で長さ1.2m程度の角柱状の割石を框石を挟むように立てて配す。右側壁は腰石として3石用いているが、奥壁側の2石は長さ約1.3m、高さ50～70cm、厚さ30～50cm程度の石材をそれぞれ平らな面を支室の内側に向けて高さを揃えて寝かし立て、これと支門との間に横目地を通すように高さを揃えた小振りの石材を配している。左側壁は第2主体部と接する袖側1/2以外に腰石3石が遺存している。こちらも右側壁と同様な石の使い方が成されているが、長さ約50～70cm、高さ55cm、厚さ30cm程度とやや小振りの石材が使われており、盛土によるやや軟弱な右側壁側に少しでも安定感のある大振りの石材を配した可能性が考えられる。これらの両側壁の間に挟み込まれるように据えられているのが奥壁で、腰石は基本的に2石であるが、向かって右側のものは高さがなくさらに同様の石材を重ねて左の腰石との高さを揃えている。左袖壁では長さ約70cm、高さ1m、厚さ40cm程度の石材が平らな面を支室の内側に向けて配されている。そしてこれらの腰石上に比較的整った小口面を内側に向けて小振りの石材が横積みされ各壁面が構築されている。

先述のとおり支門部には框石が設置されるが、羨道床面がこの框石上面に揃っているのに対して支室床面はこの框石設置面と、結果として支室が框石の高さ分だけ一段下がって形成された形となっている。なお支室床面には、墳丘基底面上に橙褐色粘質土(第25層)が一層入れられ、さらに奥壁側中央部にはその上に1～3cm程度の河原石が敷かれて整地されている。

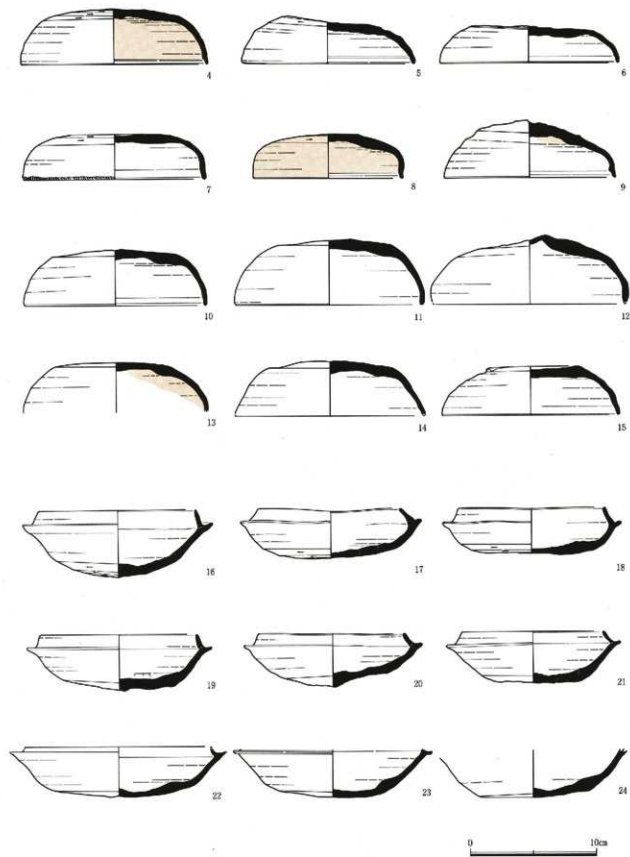
羨道部分を見ると、右側壁で長さ1.25m、左側壁で同1.3mが遺存し、幅は支門部で1.3～1.5mを測る。壁体の構成は、両側壁とも先述した支門部に立てた角柱状の割石に続いて類似した割石を同様に1石ずつ立てて配し、さらにそれぞれ30～50cm程度の石材を2～4石列状に並べており、簡略した形ながら羨道部として意識したものと考えられる。縦断面を見ると、框石の背面から途中消える部分もあるものの1.8mにわたって厚さ数cmの淡黄褐色粘質土(第97層)が認められ、これが羨道部の床面であったものと考えられる。

また羨道は調査時には人頭大の石を多数用いてしっかり閉塞された状態で検出された。範囲は框石の背面から両側壁の端までで、支門側から階段状に段をなしてやや大きな石から次第に小さな石へと積み上げられている。

石室の掘り方については、石室自体の明確なものは認められず、墳丘基底面上でせいぜい各腰石を据える際にそれぞれの下を僅かに掘り凹める程度であったようである。

遺物は主に支室内から出土しているが、そのほか墳丘基底面および盛土中からのものがある。須恵器のほか、土師器、鉄製品があり、主に細片以外の77点を図化した(第18～24図)。このうち支室内のもの(4～77)は比較的遺存状況が良いものも認められるが、墳丘基底面および盛土中のもの(1～3)はいずれも破片である。

出土状況を見ると、墳丘基底面および盛土中のものは、土師器碗(1)は奥壁裏の盛土中、杯蓋(2)と壺(3)は奥壁裏の盛土中のものと支室部分奥壁側墳丘基底面直上のものとが接合しており、このことから



第18图 横枕44号墳 石室内出土遺物実測図(1)



25



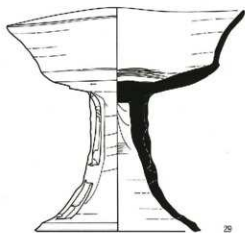
26



27



28



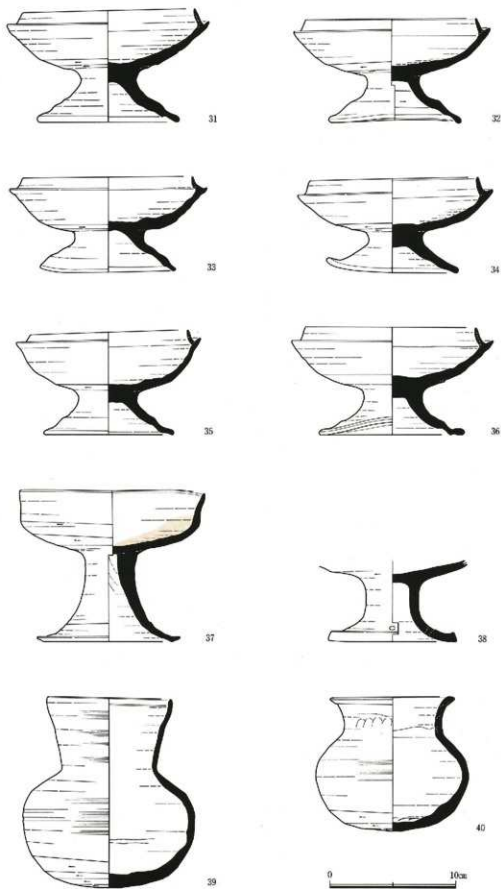
29



30

0 10cm

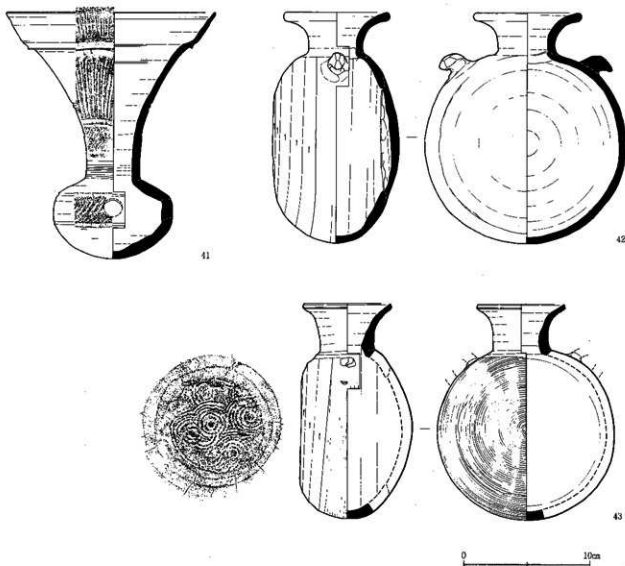
第19图 横枕44号坑 石室内出土器物实测图(2)



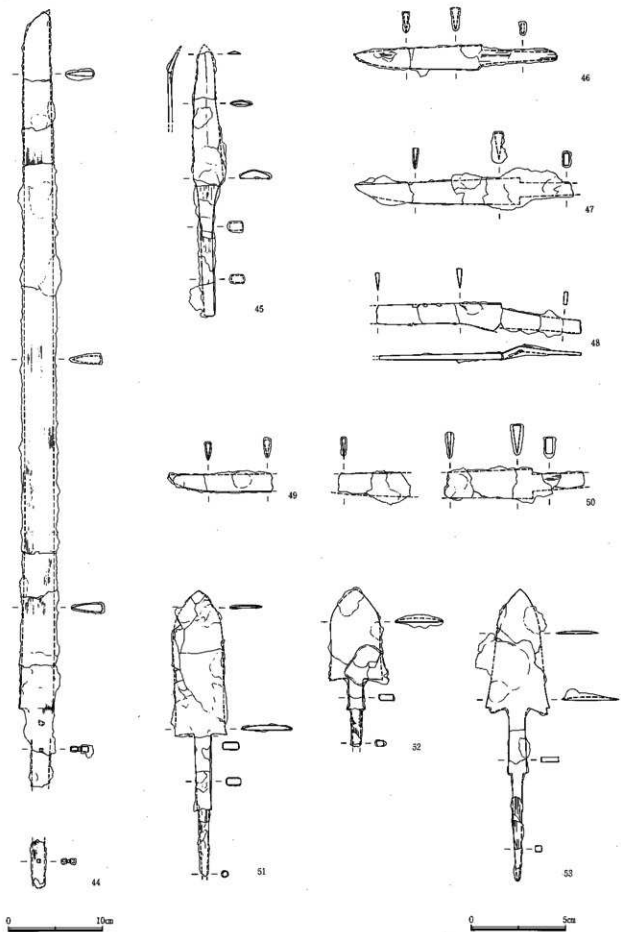
第20图 横杖44号墳 石室内出土遺物実測図(3)

これらの遺物は墳丘築造時に破碎され、奥壁裏の盛土中に置かれた際その一部が玄室内に転落した可能性が考えられる。ただ(3)と接合した破片の一部は左袖部分の外側の表土中からも検出されており、あるいは既に流出した左袖外部の盛土中にも置かれていた可能性が考えられる。玄室内のものは、左側壁の袖側約1/3から壁に沿って奥壁まで(杯蓋・杯身・埴瓶・刀子・鉄鏝・鉄斧)①、右側壁の玄門側約1/3から壁に沿って奥壁まで(杯蓋・杯身・高杯・壺・大刀・鉄鏝・鉄斧)②、奥壁中央部からその手前付近(杯蓋・杯身・壺・埴瓶・高杯)③、玄門・袖石の奥壁側50cm付近(高杯・壺・鉄鏝)④にまとまりをもつように思われるが、特に③は積み重ねられた様相を呈している。また出土レベルとしては、いずれの遺物も河原石床面より5cm程度浮いた状態で出土している。このことは、①と③の間、②と③の間、②と④の間辺りにはそれぞれ空白部分が認められ、なおかつそれぞれの奥壁側から朱を塗った杯蓋(8, 13)、(4)、(9)が出土していることなどとあわせると、同時複数埋葬とは考え難く、この玄室内に追葬が行われて複数の遺体が葬られた可能性を示すものと思われる。

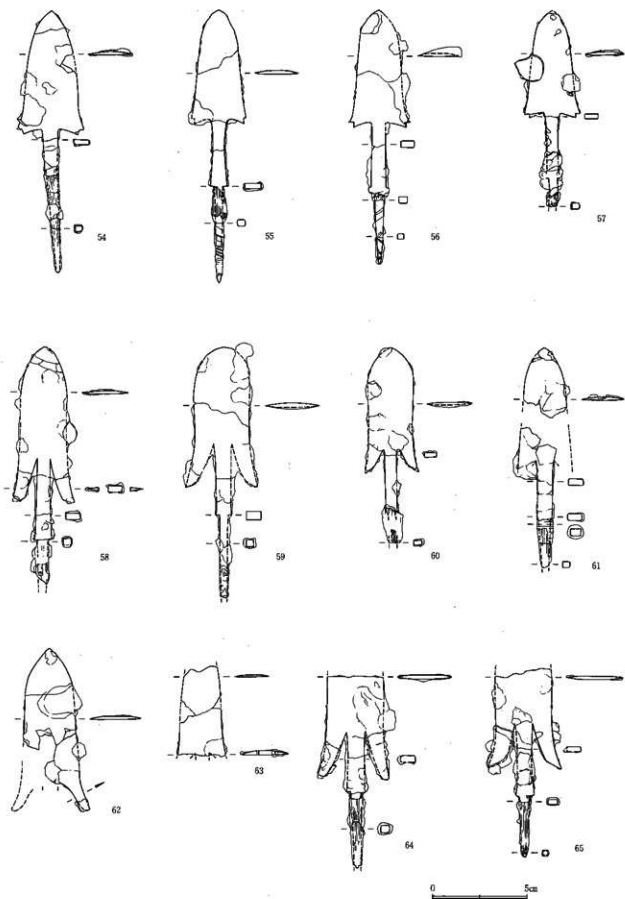
遺物については、それぞれの形態・手法の特徴等については観察表を参照していただくとして簡単に概観すると、杯蓋はいずれもつまみを持たないもので、口径は、11.6cmの(8)を除くと13.6~14.75cmに取まる。調整は、ヘラ削りのもの(4~8)、ヘラ切り後ナデのもの(9~14)、ヘラ切り未調整(15)のものがある。杯身は、ヘラ削りのもの(16~18)、ヘラ切り後ナデのもの(19~24)、に分かれるが、(16)は器高が5.4cmで4cm前後の他より高く底部も丸い。(22~24)は口径が、15cm前後あり12cm前後の他より大



第21図 横枕44号墳 石室内出土遺物実測図(4)



第22图 横枕44号墳 石室内出土遺物実測図(5)

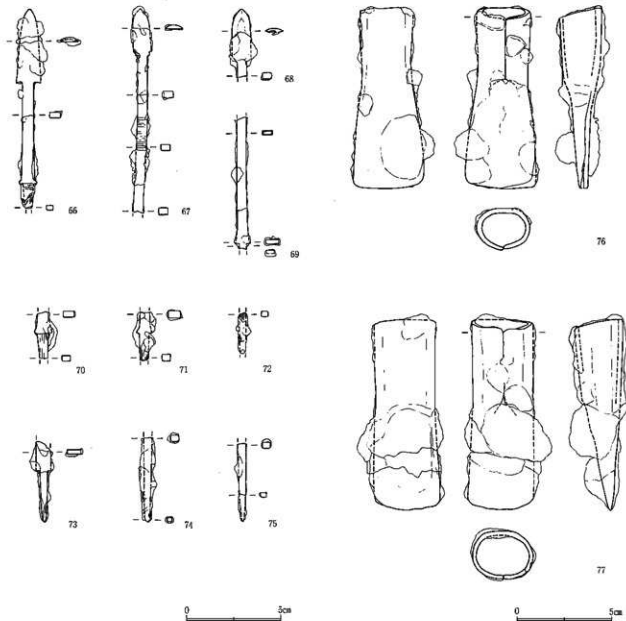


第23图 横枕44号墳 石室内出土遺物実測図(6)

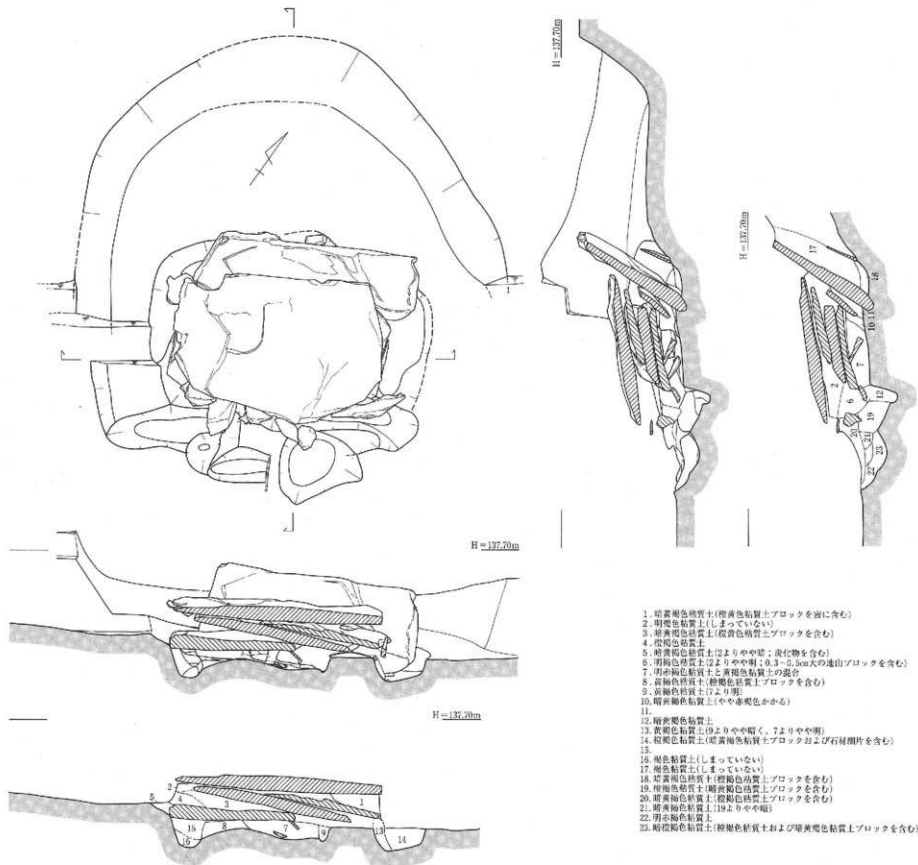
さい。高杯には有蓋と無蓋があり、前者には脚柱部に長方形の二段透しを持つもの(25~28)と持たないもの(31~36)とがある。また後者にも二段透しを持つもの(29, 30)と持たないもの(37, 38)とがあるが、このうち(29, 30)の透しの上段は貫通せず、(38)は脚柱部に円孔を持つ。壺(39)は口頸部が外傾し、口縁部が内湾するもので、(40)は口頸部が外反し、端部で肥厚して面を持つものであるがいずれも体部中位に最大胴径を持つ。その他ラップ状に大きく外反する口頸部を持って口縁部に段をなして外傾する甕(41)や鈎状の把手を持つ提瓶(42)等がある。また鉄製品も大刀(44)、鉞(45)、刀子(46~50)、鎌(51~75)、鉄斧(76, 77)などが出土している。

第2主体部

第2主体部は第1主体部(石室)の左側扉玄門側に接する位置から検出された石棺で、石室よりやや東に振ったN-62°-Eにとる。石室検出時に同時に検出されたが、完全につぶれた状態であった。墳丘断面の観察から、腰石の高さまで盛土がなされた後、左側壁の外側が掘り込まれて棺が据えられたものと見られる(第8図参照)。墓壇は二段掘りで上段は半楕円形状を呈し、長軸で2.2m、短軸で2.3m、深さ0.45m程度を測る。下段は隅丸長方形で、長さ1.55m、幅1.0m、上段床面からの深さ0.15m程度を測り、この中から組合せ式で見られる石棺が検出された。棺は上述のとおりつぶれており、北西側側



第24図 横枕44号墳 石室内出土遺物実測図(7)



第25図 横杖44号墳 第2主体部(石棺)実測図

1. 緑黄色粘質土(緑黄色粘質土ブロックを油に含む)
2. 黄褐色粘質土(はまっている)
3. 暗褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロックを含む)
4. 暗褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土(土よりやや暗く、炭化物を含む)
6. 赤褐色粘質土(よりやや暗く、0.3-0.5cm程度の遠山ブロックを含む)
7. 赤褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合
8. 黄褐色粘質土(粘褐色粘質土ブロックを含む)
9. 黄褐色粘質土(土より暗)
10. 暗褐色粘質土(やや黄褐色がかる)
- 11.
12. 暗褐色粘質土
13. 黄褐色粘質土(よりやや暗く、7よりやや明)
14. 緑褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックおよび石粒碎片を含む)
- 15.
16. 褐色粘質土(はまっている)
17. 褐色粘質土(はまっている)
18. 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)
19. 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)
20. 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)
21. 暗褐色粘質土(土よりやや暗)
22. 明褐色粘質土
23. 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土および暗褐色粘質土ブロックを含む)

0 1:20 2m

板だけが墓壇掘り方に沿って外側に開いているが、他の石材は、南西側小口板がまず内側に倒れ、その上に南東側側板、北東側小口板、蓋石といった順であろうか、きれいに積み重なっている。さらに当初この蓋石上には30～50cm程度の割石・転石が積み重なって検出されており、石室石材の崩落あるいは抜き取りの際の攪乱の可能性も考えられるが、蓋石の上に意識的に置かれたものとも思われる。棺の規模は復元内法で長さ0.9m、幅0.4m程度と考えられる。墓壇および棺内から遺物は検出されなかった。なおこの第2主体部(石棺)を設置する際に第1主体部(石室)の側壁の一部が抜き取られた可能性が蓋石上の石の状況などから考えられ、また石棺自体もその棺材が如何にも整理して重ねられたような様相を呈しており、本当に棺として機能したものかあるいはなんらかの理由で石室の壁として利用されたものかなどその意味については明確にできなかった。

なお墳丘および第1主体部中の出土遺物から本墳の築造時期は、古墳時代後期後半頃と考えられる。

3) 横枕52号墳(第5, 6, 9, 26, 27図; PL19, 20)

位置と現状 横枕52号墳は、調査区の西側に位置し44号墳の西に隣接する古墳で、尾根上平坦部の最頂部、標高約138.5mに立地する。調査前には、墳頂部の一部と北側・南東側・南西側の墳丘に崩れが認められ、極めて遺存状況の悪い古墳と推察された。

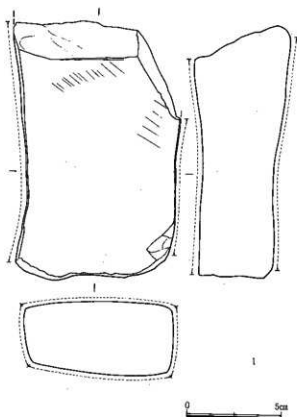
墳丘 墳丘は、旧表土と見られる暗黄褐色粘質土(第35層)の遺存状況等から、比較的平坦で南西から北東にやや傾斜する尾根の高位側即ち南西側の一部を削り、低位側に若干盛り上げて墳丘基底部を造り、さらに地山整形と多量の盛土を行うことで築造されたものと考えられる。このうち地山整形は、北東側は44号墳との間に前述のとおり共有となる尾根を横断する浅い溝を掘り込み、北西側についてはその流失が著しいものの、地山カットがなされている。流失のため明確にはできなかったが南東側掘付近も地山カットが成されていたものと思われるが、尾根上の南西側は厚さ15cm程度の表土下はすぐ地山となり、盛土によって墳丘が作り出されていた可能性も考えられる。ただし現在盛土は、尾根の傾斜に沿って高位側、即ち南西側に薄く低位に厚く遺存しており、北東側の最も厚い部分で60cm程度の遺存に止まる。

規模・墳形は、墳丘の流失が著しく、さらに44号墳でもふれたとおり北西側は幅1m前後の細長い平坦面によってカットされており、ともに明確にはできず、北東側周溝底からの高さ1.65mを測るのみである。

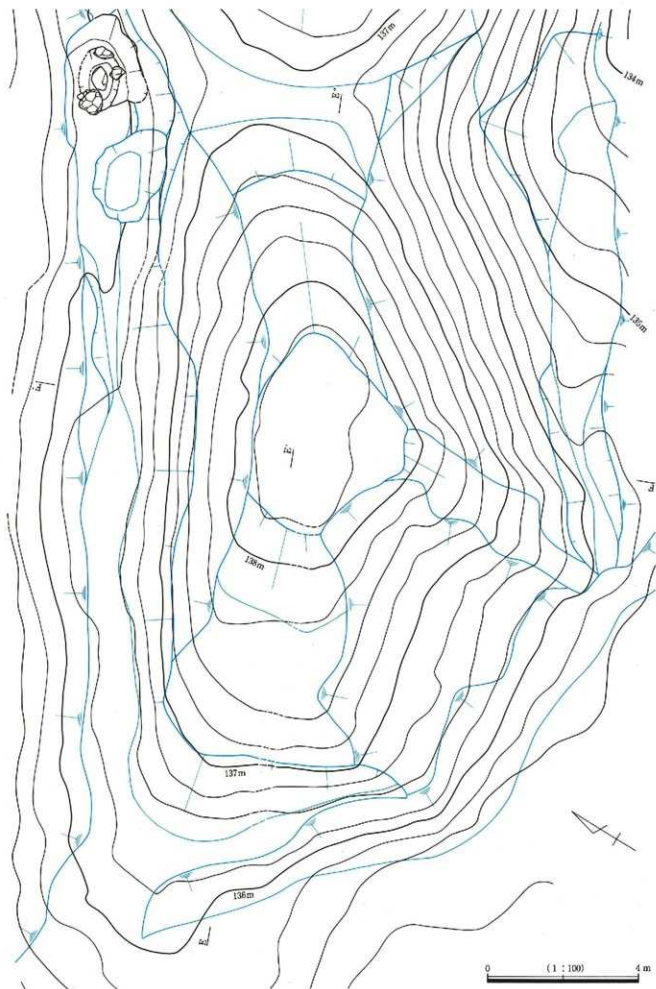
埋葬施設 埋葬施設は、平面精査、墳丘断削、盛土除去等を行った結果検出できず、流失したものと考えられる。

出土遺物 遺物は表土中から須恵器体部小片4点、墳丘斜面から砥石1点、旧表土中から土器体部片1点が出土したのみで、4面に使用痕の見られる砥石(第26図-1)を図化した。

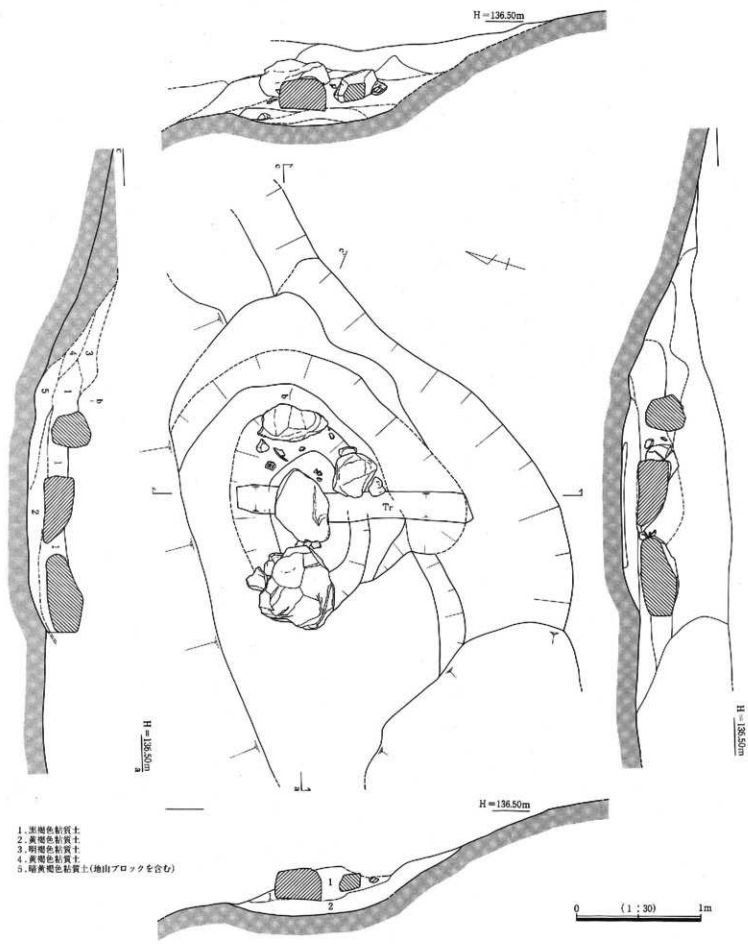
なお出土遺物等からは本古墳の築造時期は明確にできなかった。



第26図 横枕52号墳 出土遺物実測図



第27図 横枕52号墳 墳丘遺存図



- 1. 黒褐色粘質土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 明褐色粘質土
- 4. 黄褐色粘質土
- 5. 暗黄褐色粘質土(油山ブロックを含む)

第28図 SK-01 実測図

4) 土坑 (土壇) (第28~36図; PL20~22)

① SK-01 (第28図; PL20-4)

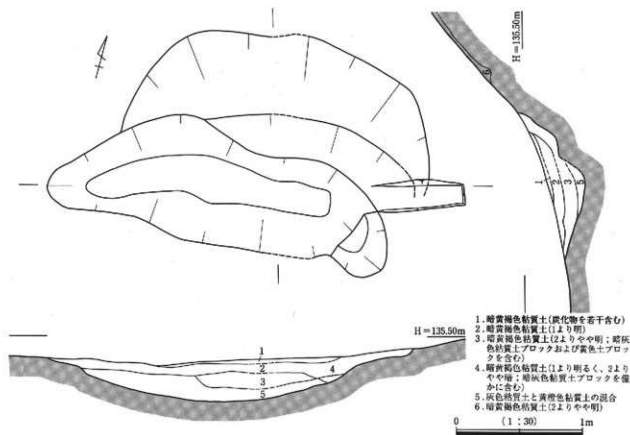
調査区中央、標高136m程度で44号墳の西裾付近に位置し、先述の44号墳・52号墳の北西側傾裾付近に細長く延びる平坦面上から検出した。平面形は不定形で、主軸はN-59°-Eにとる。規模は遺存値で、長さ2.65m、幅2.15m、深さ0.73mを測る。断面は緩やかな傾斜で途中にテラスをもちまた緩やかに下がって底部へと続く。土坑の北西側は上の一段目が流失し、南西側は一段目が高さを減じてテラス部が消え、テラス部が前述の44号墳北西側傾裾付近の細長い平坦地へと続いている。このテラス部に掘り込まれた浅い掘り込み部分からはいずれも床から10cm程度浮いた状態で40~70cmの転石を検出したが、その性格は不明である。なお遺物として転石付近から須恵器小片を検出したが、図化するには至らず、本土坑の時期は不明である。ただ後述のSK-02、-03と位置的には44号墳を取り巻くように立地しており、44号墳に伴う遺構の可能性も考えられる。

② SK-02 (第29図; PL21-1)

SK-01の7.5m程度北東で、44号墳の北裾付近の細長く延びる平坦部分に位置し、44号墳の北裾付近を少し削りながら掘り込まれる。標高は135.5m程度である。平面形は不定形で東西に長く、主軸はN-81°-Eにとる。規模は、長さ約2.90m、幅1.10m、深さ0.53mを測る。断面は東西方向は緩やかな傾斜で、南北方向は途中で部分的テラス状とも思えるほどの傾斜の変化を持って下り底部へ続く。なお遺構の性格については、前述のとおりその位置から44号墳に伴う遺構の可能性も考えられるが、土坑内から遺物は検出されず、遺構の性格や時期等の詳細は不明である。

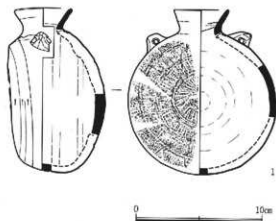
③ SK-03 (第30、31図; PL21-2)

SK-02の2.5m程度南東で、44号墳の北裾付近の細長く延びる平坦部分の東端部に位置し、SK-02と同様に44号墳の北東裾付近を少し削りながら掘り込まれる。標高は135.5m程度である。平面形は不定楕円形で、主軸はN-53°-Wにとる。規模は、長さ2.60m、幅1.47m、深さ0.78mを測る。

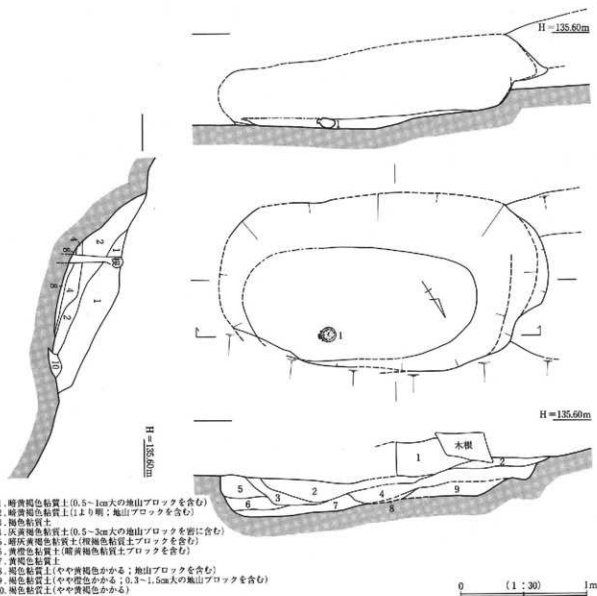


第29図 SK-02 実測図

断面は、南西～北東方向は緩やかに下って底部へ続き、北西～南東方向の南東側は内湾気味にまた北西側はすぐ地山の岩盤となるため不整な掘り込みとなっている。床面は地山の関係かあるいは44号墳の墳丘断面に認められた土層変化の原因に影響されたのか北西から南東にやや傾斜をもつ。土坑東側の床面直上から両肩に環状の把手をもつ提瓶1点が出土した。遺構の時期はこの遺物から古墳時代後期後半頃で、位置的にも44号墳との関連が考えられるが、明確にはできなかった。



第30図 SK-03 出土遺物実測図



1. 時黄褐色粘質土(0.5-1cm大の地山ブロックを含む)
2. 時黄褐色粘質土(1より明；地山ブロックを含む)
3. 褐色粘質土
4. 灰黄褐色粘質土(0.5-3cm大の地山ブロックを初に含む)
5. 時灰黄褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)
6. 黄褐色粘質土(暗黄褐色粘質土ブロックを含む)
7. 黄褐色粘質土
8. 褐色粘質土(やや黄褐色かかす；地山ブロックを含む)
9. 褐色粘質土(やや橙色かかす；0.3-1.5cm大の地山ブロックを含む)
10. 褐色粘質土(やや黄褐色かかす)

第31図 SK-03 実測図

④SK-04 (第32、33、35図; PL21-3、22-1)

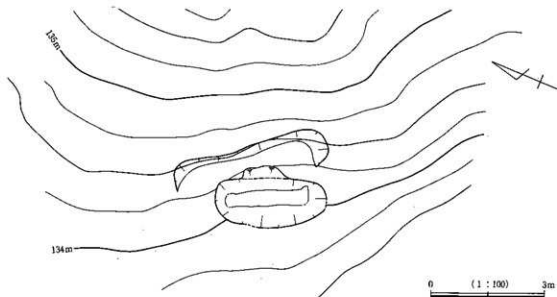
調査区南西端部、尾根中央の52号墳墳頂部から南西に約20m下った尾根斜面に位置する。標高は134～134.5m付近で、厚さ15cmの表土を除去した段階で検出した(第9図参照)。遺構は尾根斜面の上位側に平面形コの字状のテラスを掘削し、その下位側に隅丸長方形の墓壇を掘り込んである。規模は、テラス部で長さ4.10m、最大遺存幅1.07m、深さ0.25mを測り、墓壇で長さ2.91m、幅1.30m、テラス部からの深さ0.58mを測る。主軸は尾根に直交の北西～南東方向にとり、テラス部がN-38°-W、墓壇がN-26°-Wである。墓壇断面は長軸方向がいずれも二段掘りとなっており、比較的緩やかに下ってからテラスをもち、のちに底部まで垂直に近い傾斜で掘り込まれる。小口側は、南東側は緩やかに下った後底部までの10cmを急傾斜で下り、北西側は比較的急傾斜で掘り込まれる。底面は隅丸の長方形形状を呈し、北西側端部からは幅が底部幅の40cm、深さ10cm程度の小口穴とも考えられる小穴が掘り込まれる。

墓壇の埋土状況を見ると、横断面では両長軸の二段目の掘り込みからはほぼ垂直方向に立ち上がるラインが見られ、同様のことが南東側小口部分にも認められる。このことは木棺が埋納されていた痕跡と考えられ、本土壤は木棺直葬の埋葬施設の可能性が考えられる。また棺構造を具体的に示す資料はほとんど得られなかったが、北西端部に掘り込まれた小口穴と見られる小穴や埋土状況等から組合せ式木棺の可能性が考えられる。棺の規模は長さ2m、幅0.4m、深さ0.3m程度が推定される。

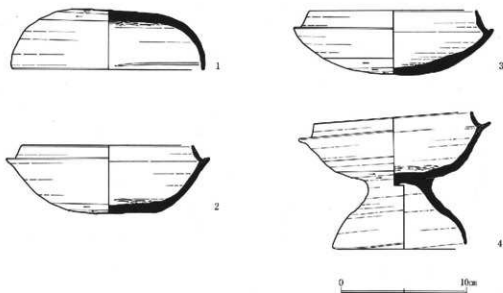
遺物はテラス部と墓壇内から須恵器が出土している。テラス部からは南東側から蓋杯3点とそれから40cmほど南から蓋杯1点が出土し、遺存状況の良い3点(第33図1～3)を図化した。杯蓋(1)は口径は15.1cmと比較的大きいが、平坦な天井部からなだらかに下り、口縁端部は丸く納め、その内面に僅かに1条の沈線を残すもので、天井部外面にヘラ削りが認められる。杯身(2、3)も受部径はそれぞれ16.1cm、15.6cmと比較的大きいが、前者の内傾して端部を丸く納める立上りは短く、後者のそれはやや高めとなっている。また後者の底部は丸く仕上がっておりやや不安定である。

墓壇内の遺物としては中央部床面より5cmほど浮いた状態で蓋高杯1点と、南西小口側の床面より5cmほど浮いた状態で杯3点、同じく床面から30cmほど浮いた状態で杯1点とテラス部出土の(2)と同一固体の可能性が考えられる蓋杯小片が出土している。このうち遺存状況が良い蓋高杯(4)は、内傾して丸い端部の立上りをもつ蓋杯に比較的基部の太い脚が付いた形のもので、脚部はハの字状に開いてから内湾気味に先細り丸く納める。またその他の杯は、いずれも比較的口径は大きいと見られるが遺存状況が悪く、外面の外側に粗雑なヘラ削り調整が認められる程度である。

なおこれらの遺物から本土壤の時期は古墳時代後期後半頃と考えられる。



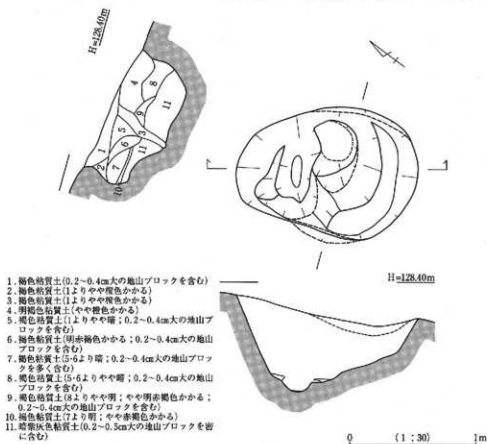
第32図 SK-04 遺存図



第33図 SK-04 出土遺物実測図

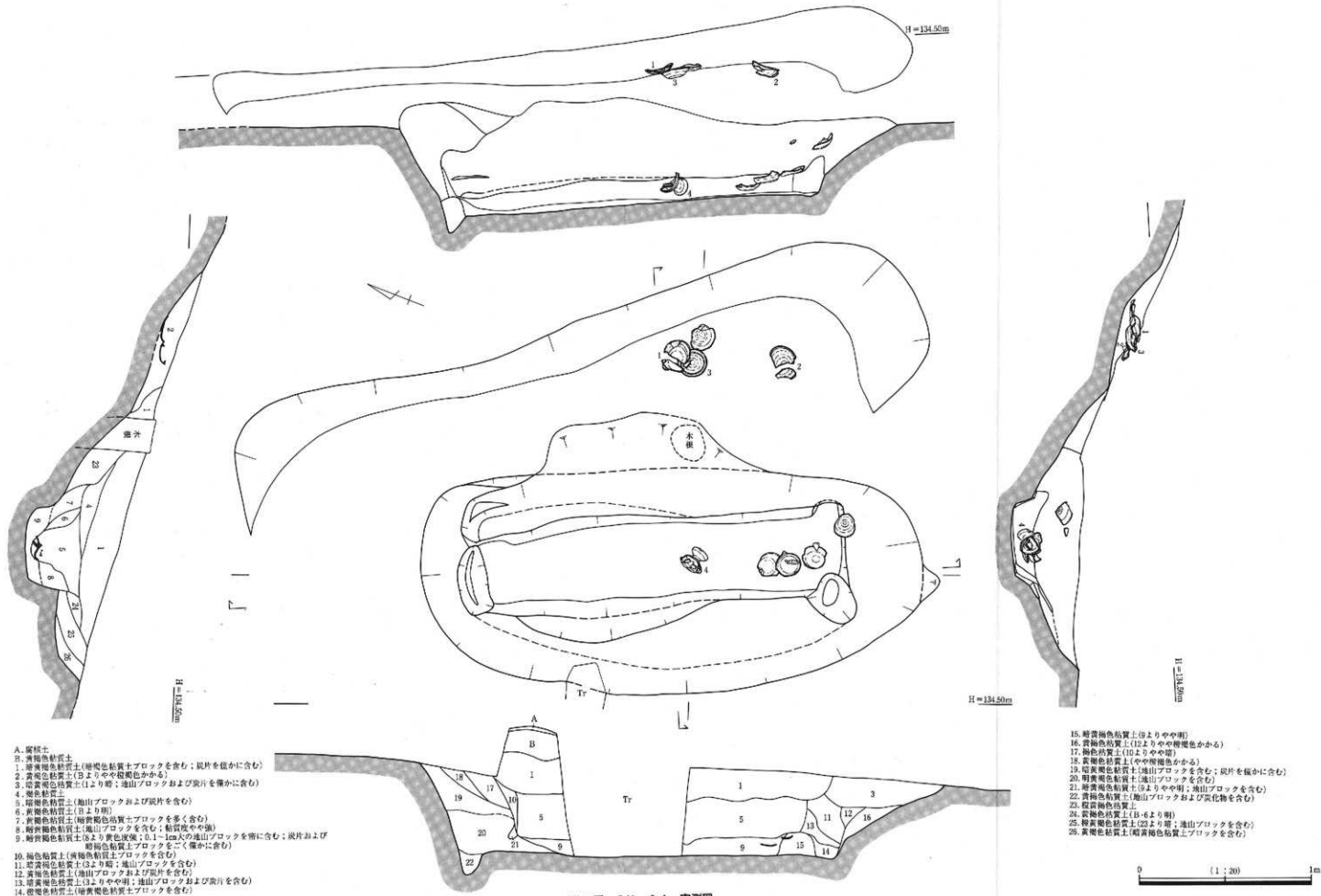
⑤ SK-05 (第34図; PL22-2)

調査区東端部、43号墳の北東側緩傾斜地に位置する。標高は128m強で、厚さ20cm弱の表土を除去した段階で検出した。平面形は不定形で、主軸はN-32°-Wにとる。断面は鋭角に掘り込まれた後、主軸ラインで南東側の中位にまずテラスをもち、そこから緩やかに下ってさらに傾斜が変わるかまたテラスをもった後に下って底部へと続いている。北西側は鋭角に下がった後、角度が変わって底部となる。また南西側壁面には一部にややオーバーハング傾向が見られる。規模は、長さ1.44m、幅1.10m、深さ



1. 褐色粘質土(0.2~0.4cm大の地山ブロックを含む)
2. 褐色粘質土(1よりやや黄色かかる)
3. 褐色粘質土(1よりやや黄色かかる)
4. 明褐色粘質土(やや黄色かかる)
5. 褐色粘質土(1よりやや暗; 0.2~0.4cm大の地山ブロックを含む)
6. 褐色粘質土(明赤褐色かかる; 0.2~0.4cm大の地山ブロックを含む)
7. 褐色粘質土(5より暗; 0.2~0.4cm大の地山ブロックを多く含む)
8. 褐色粘質土(5-6よりやや暗; 0.2~0.4cm大の地山ブロックを含む)
9. 褐色粘質土(5よりやや明; やや明赤褐色かかる; 0.2~0.4cm大の地山ブロックを含む)
10. 褐色粘質土(7より明; やや赤褐色かかる)
11. 暗紫灰色粘質土(0.2~0.5cm大の地山ブロックを密に含む)

第34図 SK-05 実測図



- A. 腐植土
 B. 黄褐色粘質土
 1. 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む；炭片を粗かに含む)
 2. 黄褐色粘質土(Bよりやや暗褐色かかる)
 3. 暗褐色粘質土(12より暗；埴山ブロックおよび炭片を粗かに含む)
 4. 褐色粘土
 5. 黄褐色粘質土(埴山ブロックおよび炭片を含む)
 6. 黄褐色粘質土(Bより暗)
 7. 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを多く含む)
 8. 黄褐色粘質土(埴山ブロックを含む；粘質灰や中砂)
 9. 黄褐色粘質土(13より暗；0.1-1cm程度の埴山ブロックを稀に含む；炭片および暗褐色粘質土ブロックを多く含む)
 10. 褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロックを含む)
 11. 暗褐色粘質土(13より暗；埴山ブロックを含む)
 12. 黄褐色粘質土(埴山ブロックおよび炭片を含む)
 13. 暗褐色粘質土(13よりやや暗；埴山ブロックおよび炭片を含む)
 14. 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)

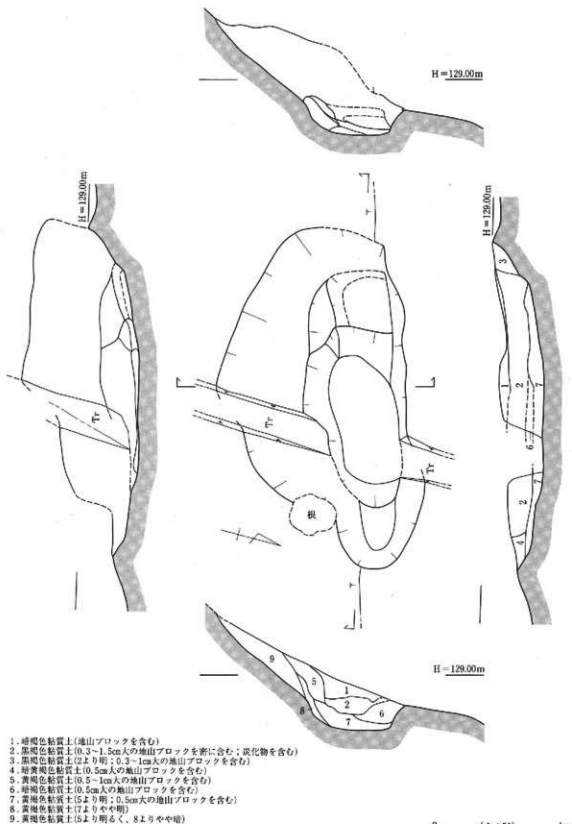
15. 暗褐色粘質土(13よりやや暗)
 16. 黄褐色粘質土(12よりやや暗褐色かかる)
 17. 褐色粘質土(12よりやや暗)
 18. 黄褐色粘質土(やや暗褐色かかる)
 19. 暗褐色粘質土(埴山ブロックを含む；炭片を粗かに含む)
 20. 暗褐色粘質土(埴山ブロックを含む)
 21. 暗褐色粘質土(13よりやや暗；埴山ブロックを含む)
 22. 暗褐色粘質土(埴山ブロックおよび炭化物を含む)
 23. 暗褐色粘質土
 24. 黄褐色粘質土(13より暗；埴山ブロックを含む)
 25. 暗褐色粘質土(12より暗；埴山ブロックを含む)
 26. 黄褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)

第35図 SK-04 実測図

0.77mを測る。土坑内から遺物は検出されず、遺構の性格や時期等の詳細は不明である。

⑥SK-06 (第36図; PL22-3)

調査区東部、43号墳の北側墳裾部に位置し、同古墳の裾を少し削りながら掘り込まれる。標高は129m前後で、厚さ15cm程度の表土除去後、43号墳の墳丘検出時に同時に検出された。平面形は不整楕円形



1. 暗褐色粘質土(埴山ブロックを含む)
2. 黒褐色粘質土(0.3~1.5cm大の埴山ブロックを密に含む;炭化物を含む)
3. 黒褐色粘質土(2より明;0.3~1cm大の埴山ブロックを含む)
4. 暗黄褐色粘質土(0.5cm大の埴山ブロックを含む)
5. 黄褐色粘質土(0.5~1cm大の埴山ブロックを含む)
6. 暗褐色粘質土(0.5cm大の埴山ブロックを含む)
7. 黄褐色粘質土(5より明;0.5cm大の埴山ブロックを含む)
8. 黄褐色粘質土(7よりやや明)
9. 黄褐色粘質土(5より明るく、8よりやや暗)

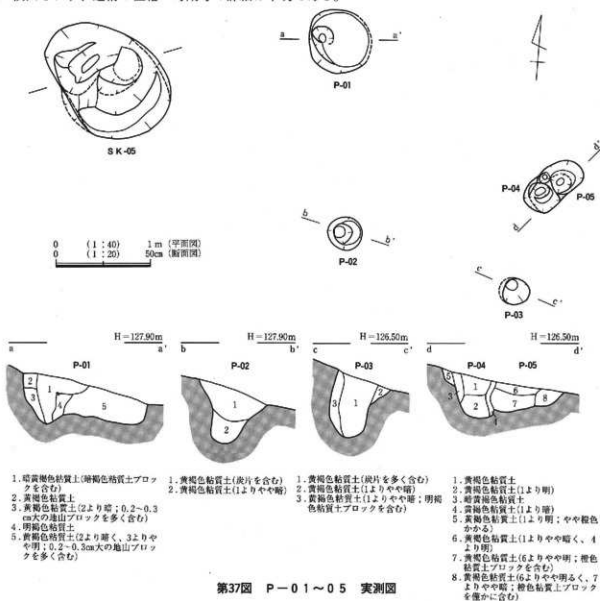
第36図 SK-06 実測図

で、主軸は43号墳の第1主体部とほぼ直行方向のN-72°-Eにとる。断面は、横断は比較的鋭角に掘り込まれるが、縦断は緩やかに下って底部となり、底部にやや浅い段差をもつ。規模は、長さ2.75m、幅1.53m、深さ0.93mを測る。なお土坑内から遺物は検出されず、遺構の時期等の詳細は不明であるが、その位置関係や埋土状況などからあるいは43号墳に伴う遺構の可能性も考えられる。

5) ビット(第37図; PL23-1~5)

調査区東端部、43号墳の北東側緩傾斜地で、SK-05の東北東約1.5mにP-01、その南約1.5mにP-02、その東南東約1.6mにP-03、さらにその北約0.7mに切り合うP-04・05が位置する。標高は127m前後で、厚さ20cm弱の表土を除去した段階で検出した。

P-01は、平面形はほぼ円形で、底部東側に浅い凹みをもつ。規模は径0.71m、深さ0.27m程度である。P-02は、平面形はほぼ円形で、斜面に対して垂直に、上位はやや緩やかに、中位から鋭角に斜めに掘り込まれる。規模は径0.36m、深さ0.34m程度である。P-03は、平面形はやや不定な円形で、P-02と同様に斜面に対して垂直にやや斜めに掘り込まれる。規模は径0.32m、深さ0.36m程度である。P-04は、平面形はやや楕円形で、断面中位にテラスをもつ。規模は長軸0.36m、深さ0.27m程度でその北東側がP-05を切る。P-05は、平面形はやや不定な円形でその南西側をP-04に切られる。規模は長軸0.39m、深さ0.16m程度である。なおそれぞれのビット中および周辺から遺物は検出されず、遺構の性格・時期等の詳細は不明である。



第37図 P-01~05 実測図

3. 平成12(2000)年度の調査

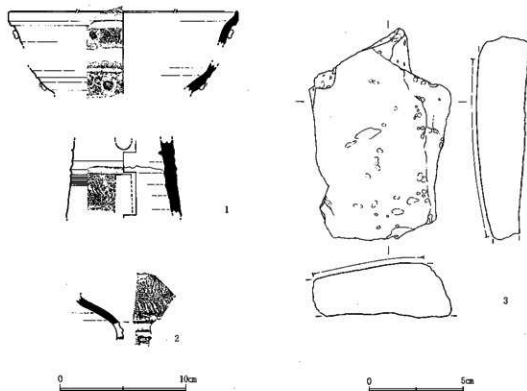
平成12年度の調査は、調査対象地中央部、標高100m付近の尾根上に位置して一支群を形成する横枕42、53～55、57、58号墳と、標高32m程度の丘陵裾に位置する56号墳の計7基の古墳が対象となったが、42号墳以外はいずれも事前の試掘調査等によって新たに見つかったものである。またこの試掘調査時に尾根上から古墳以外の遺構が見つかっており、周辺の平坦地も調査した結果、古墳上のもも含めて土坑3基(SK-07～09)や古墳以前の遺物が検出され、同時に調査を実施した。位置関係について見ると、12年度調査地の北西部に42号墳が、その東北東に隣接して58号墳が、また南東に近接して55号墳が位置し、55号墳から次第に標高を下げながら5mほど南東に54号墳、さらに南東に57号墳と続き、57号墳の北東に周溝を切り合う形で53号墳が立地している。またこれらの一支群の形成される尾根とは谷を挟んで南に位置する別の丘陵裾に56号墳が立地する。両者間の距離は約220mである。土坑等については、SK-07が56号墳の北側周溝と切り合っており、SK-08が57号墳上に、SK-09が42号墳の北西に位置し、古墳築造以前の遺物は主にSK-09周辺(A区)から粗密の違いはあるものの42・55・54号墳付近にかけて分布している。

調査の結果、7基の古墳等から計2基の埋葬施設と上述の土坑が検出され、墳丘や周溝から須恵器の壺杯、高杯、器台、壺や、弥生土器、石鏃、石皿、石錘、砥石、磨石等が出土した。

1) 横枕42号墳(第38～43図; PL25～29)

位置と現状 横枕42号墳は、尾根上調査区に立地し、支群の最北西端部に位置する円墳である。標高は103m前後で、周辺水田面からの比高差は80m程度である。調査前の墳丘遺存状況は悪く、墳頂部の2/3程度が抉るように流失あるいは削平された状態であった。ただ南東側の一部を除くと墳丘を一周するような溝状の凹みが認められ、北側ではこの凹みの底から2.5m弱の高まりが認められた。

墳丘 墳丘は地山整形と多量の盛土によって築造されている。このうち地山整形は、尾根状の平坦地に幅3～5m、深さ1m前後の溝を周回するように掘り込むもので、既に流失あるいは削平されている南東側の一部を除くこの溝に囲まれた直径12～13mの円形部分が墳丘基底面となる。厚さ20cm前後の表土・流土下に認められる盛土は、墳丘基底面上の旧表土と考えられる暗オリーブ褐色粘質土(第41層)上にな

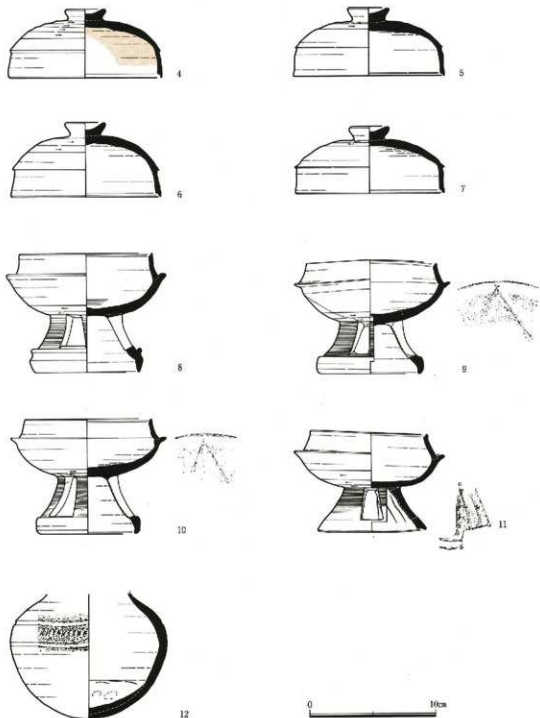


第38図 横枕42号墳 出土遺物実測図

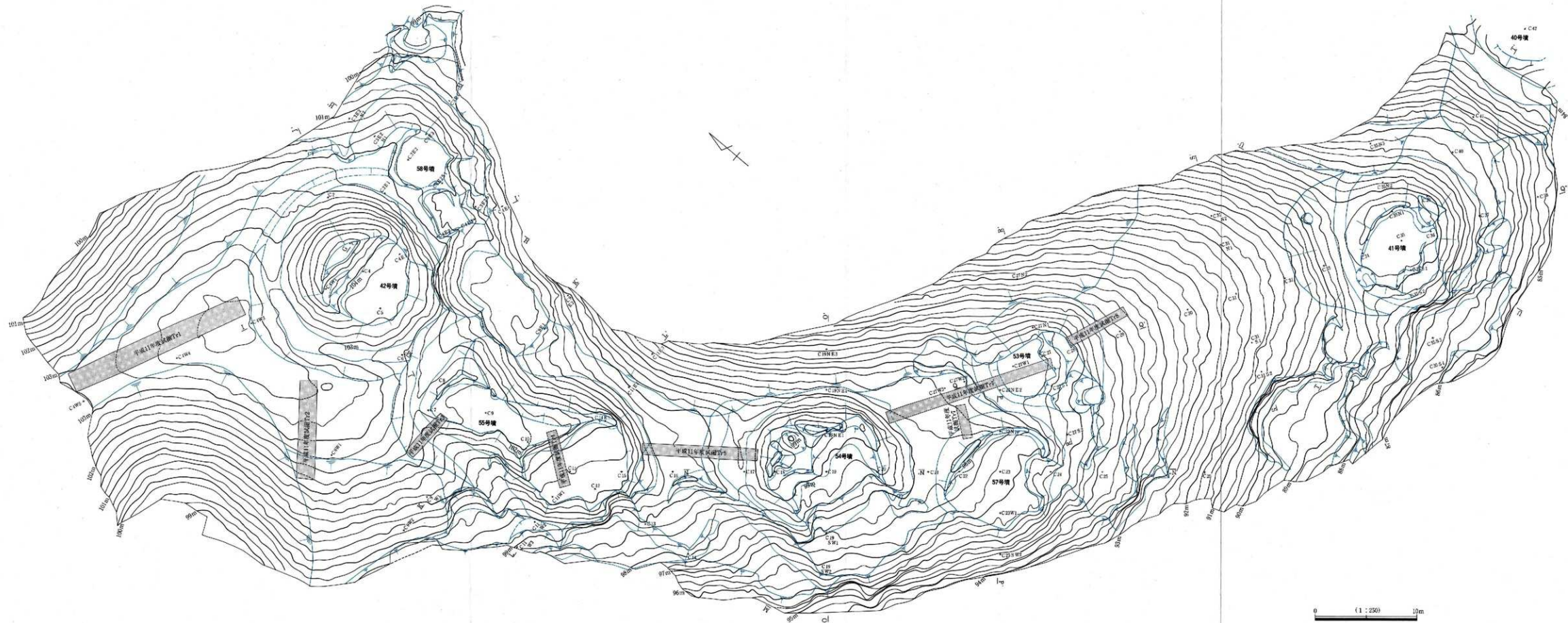
されているが、上述のとおり南側の多くが失われている。遺存厚は、北側の墳丘肩部あたりでは最大厚1.48mを測るものの中央部から南側では15~20cm程度が残るのみである。墳丘規模は、北西~南東墳裾間で16.76m、同周溝外縁間で19.90m、高さは北側墳裾から2.88m、北東側墳裾から3.14mを測る。

埋葬施設 埋葬施設は、平面精査、墳丘断割、盛土除去等を行った結果検出できず、既に流失あるいは削平されたと見られる墳丘中央部から南部分に存在したものと考えられる。ただ盛土の遺存状況と除去後状況から少なくとも盛土前に旧表土や地山を掘り込むのではなく、ある程度盛土がなされた後あるいは盛土整形後に埋葬施設が設けられたものと推定される。

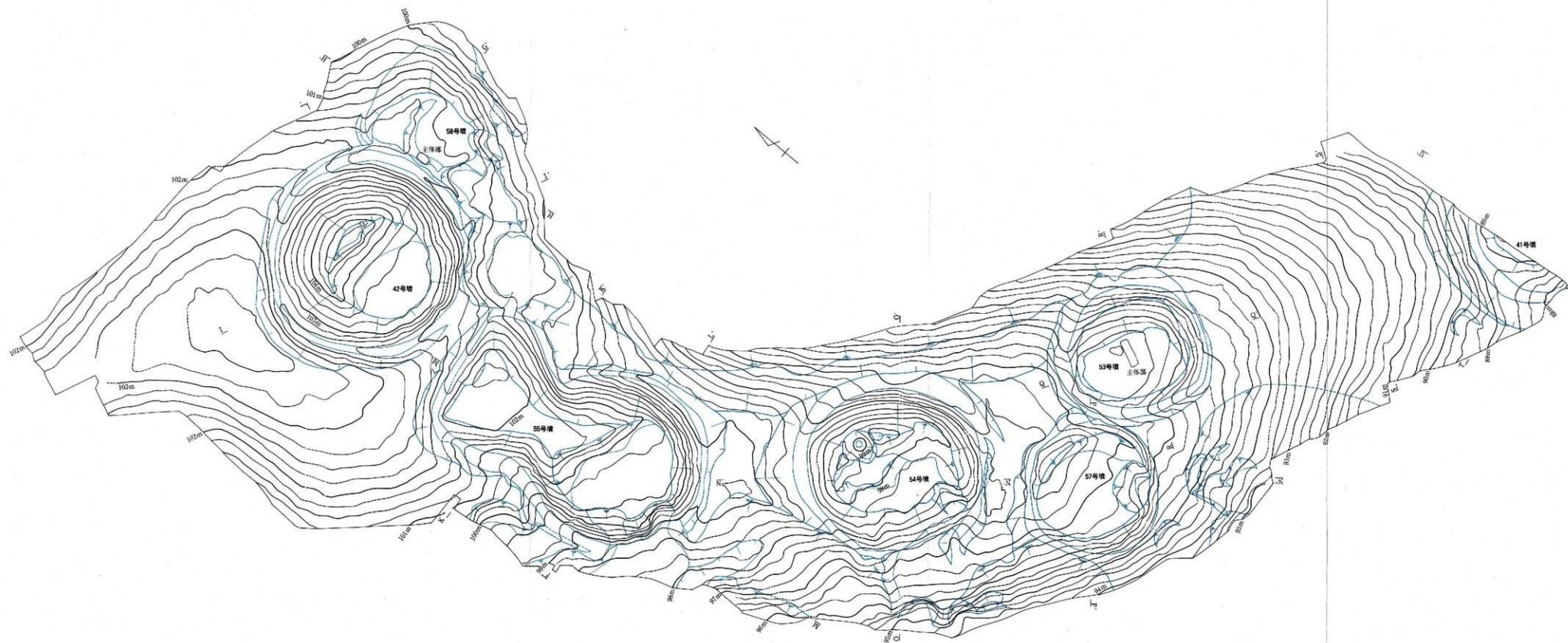
出土遺物 遺物は主に墳頂部南側および周溝内から出土した(第42図)。前者は、遺存する墳丘の検出面から検出されたもので、須恵器器台片、同体部片、磨石(第38図-1~3)等がある。墳丘流失あるいは削



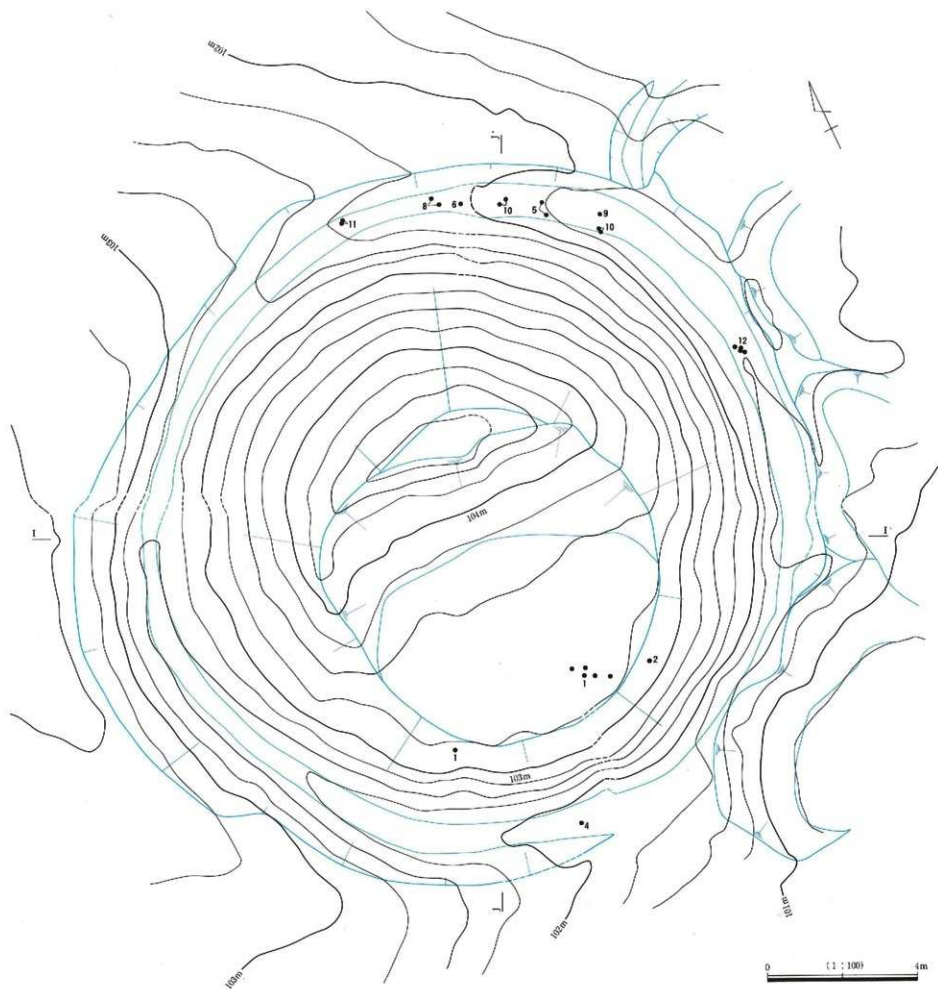
第39図 横杖42号墳 周溝内出土遺物実測図



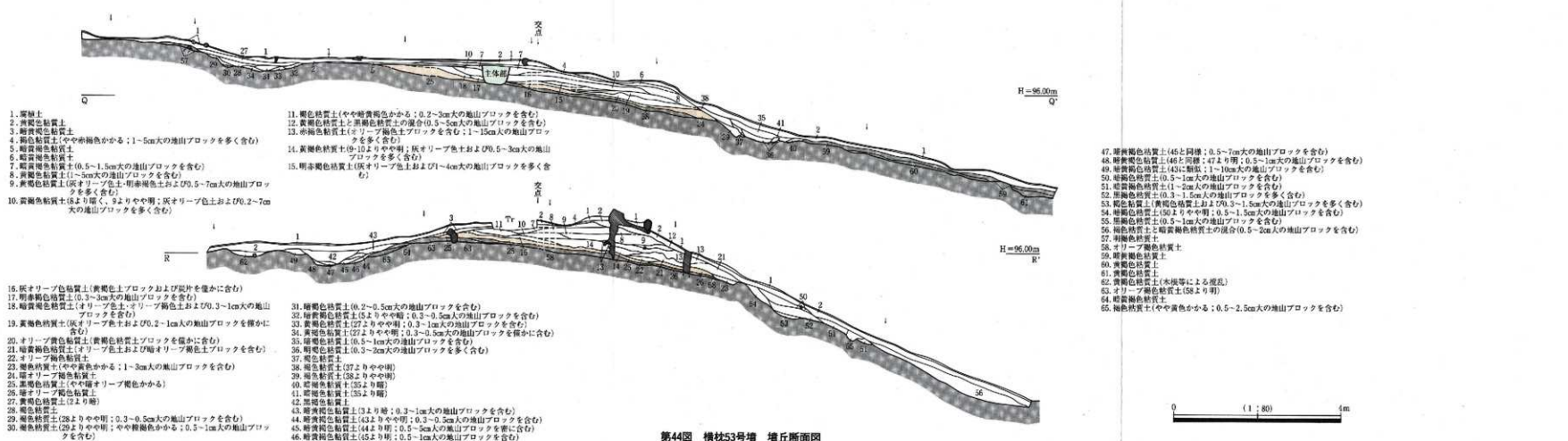
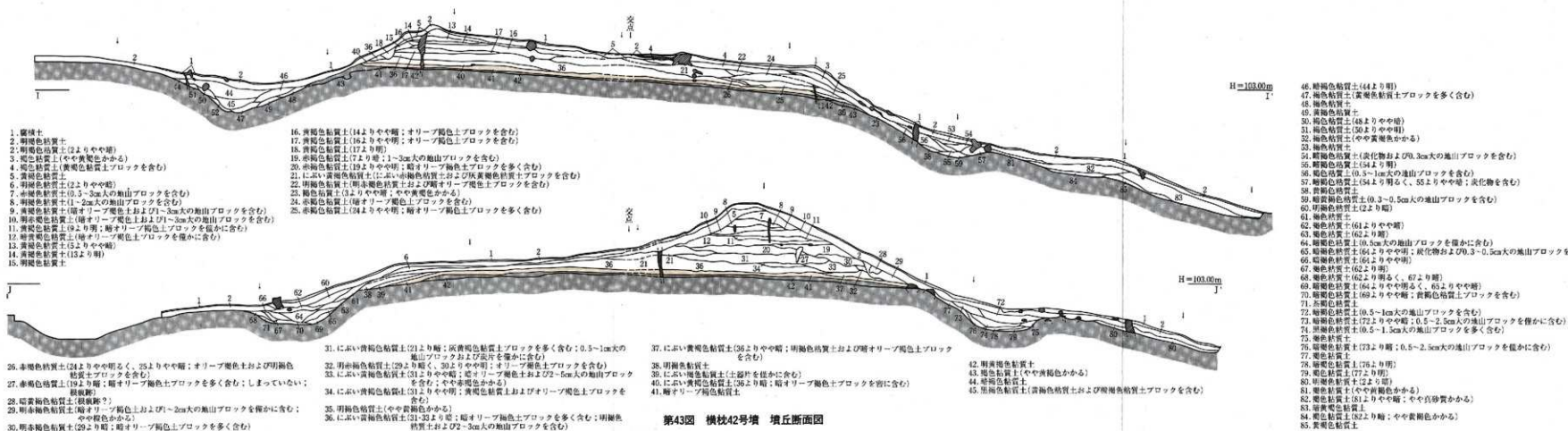
第40图 平成12(2000)・13(2001)年度調査区地形图



第41图 横枕42·53·54·55·41号墩 填丘遗存图



第42図 横枕42号墳 墳丘遺存図



平時に検出場所に移動したものと考えられる。また後者はいずれも周溝底から検出されており、蓋、有蓋高杯、壺(第39図4~12)等がある。その出土状況から前者とは異なり墳丘築造時あるいはその後の元位置を保っているものと考えられる。

このうち蓋(4~7)はいずれも口径12cm程度の小型のものであるが、天井部中央に比較的扁平でその中心が凹面となるつまみをもつ。また天井部は丸く、口縁端部には内傾する凹面をもち、天井と口縁部を界する稜は(6)や(7)にはやや鋭さが残るがいずれも短くなっている。有蓋高杯(8~11)はいずれも受部径12cm前後で、蓋(4~7)と同様に小型のものである。内傾する立上りの端部にはいずれも内傾する段をもつが、杯底部は丸みを帯びる(8~10)とやや平らな(11)とがある。また脚部はハの字状に外反し方形の透し窓を三方向にもつが、端部は外方へ段をなしてさらに下方へカギ形に曲げる(8~10)と凹面をもつ(11)とがある。なお(9,10)には杯部外面の同位置に同様の2条の線で構成されるヘラ記号が、(11)には脚部内面に3本の線で構成されるヘラ記号がそれぞれ認められる。底部が丸い壺(12)は体部片で、中位付近に最大径をもち、そこからやや上位にかけて2条の沈線に挟まれた連続刺突文をもつ。器台(1)はいずれも小さな破片となって出土したが、筒形の脚部を伴うものと見られ受部外面には後線間に浮文が貼付され、脚部には粗雑な波状文とともに透し窓が認められる。

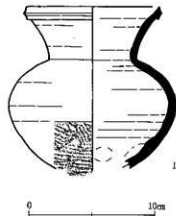
なおこれらの出土遺物から42号墳の築造時期は古墳時代後期前半から中葉頃で、11年度調査の44号墳よりやや先行するものと考えられる。また盛土中および旧表土中から弥生土器等が検出されているが、これについては後述する。

2) 横枕53号墳(第40,41,44~47図;PL30~33)

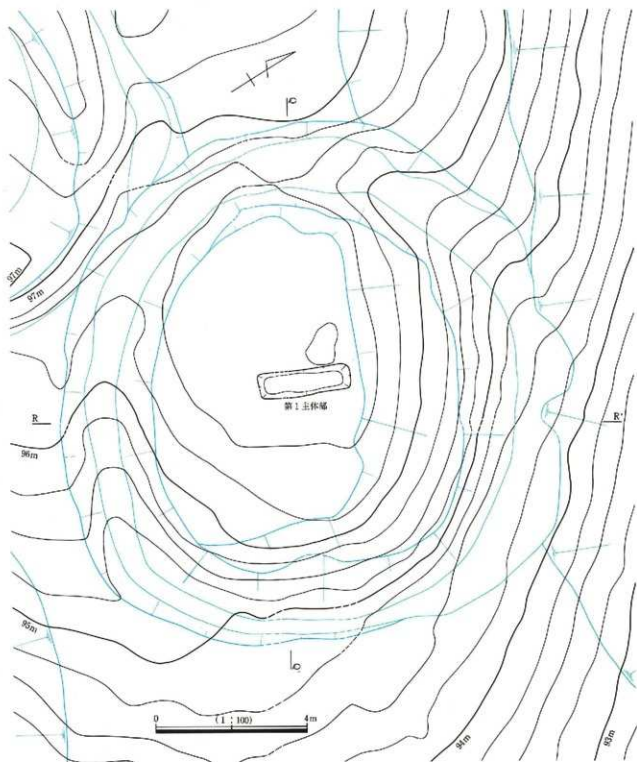
位置と現状 横枕53号墳は尾根上調査区南東部に立地し、支群の最南東端部に位置する。標高は95~97m程度で、その東側には千代川と鳥取平野が大きく広がる。調査前は53号墳付近はほとんど平坦地形となっていたが、墳丘の南東端部から尾根の傾斜が変わってそれまでよりやや鋭角に下り、さらに微妙な傾斜の変換が認められた。このため事前に試掘がなされ、溝と地山カット部分が検出されたことから古墳の存在が明らかになったものである。なお古墳南東部での平坦部と裾付近の比高差は1.8m程度であった。

墳丘 墳丘は円墳で、地山整形と多量の盛土によって築造されている。このうち地山整形は、まず尾根上の緩やかな傾斜地に幅2~3m、深さ0.8m前後の溝や地山カットを周回するように掘り込み、次いでこの溝・地山カットに囲まれた長軸9.5m、短軸7.5mの尾根に沿ってやや長い円形部分の尾根高位側を削って墳丘基底部を形成する。なお現状では周溝は古墳の北東部以外に遺存しているが、北東側も墳裾の地山カットと墳裾テラス部が認められ、尾根の端部のためその外縁が流失していることを考慮すると本来はここにも周溝が廻っていたことも考えられる。また盛土は先の墳丘基底部上になされるが、既にかかなりの量が流失あるいは削平されたものと見られ、尾根の高位側にあたる墳丘の北西側では厚さ10cm強の表土下は直ちに地山となる部分と認められる。遺存厚は、北東側墳丘肩部付近が最も厚く、旧表土と考えられる黒褐色粘質土(第25層)上に0.64mを測る。墳丘規模は北西~南東墳裾間で11.49m、同周溝外縁で14.10m、北東~南西墳裾間で10.52m、同周溝外縁で11.84m、北東側墳裾からの高さ2.34mを測る。

埋葬施設 埋葬施設は、墳頂部のほぼ中央から1基(第1主体部)が10cm強の表土を除去した段階で検出された。墓壇の平面形は隅丸長方形で、主軸を尾根と直交方向のN-24°-Eにとる。規模は長さ2.48m、幅0.76m、深さ0.39mを測り、盛土・旧表土・地山を掘り込む。埋土状況を見る限り墓壇内部に木棺等が納められた痕跡は認められず、埋葬

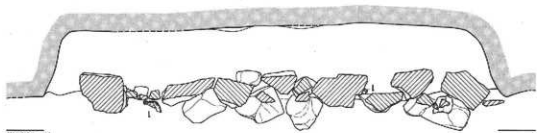
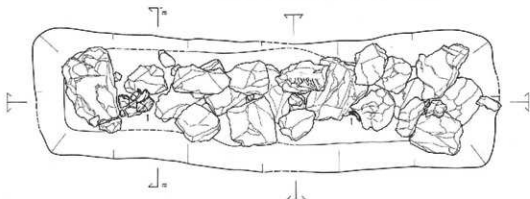
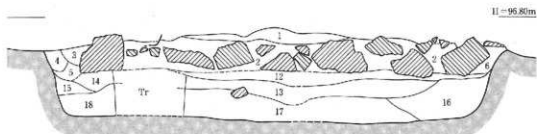
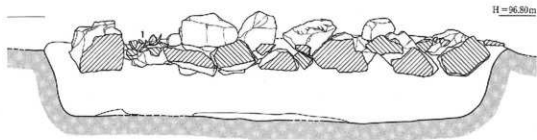
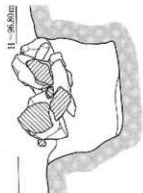
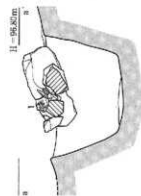


第45図 横枕53号墳 出土遺物実測図

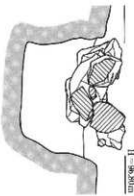
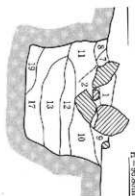
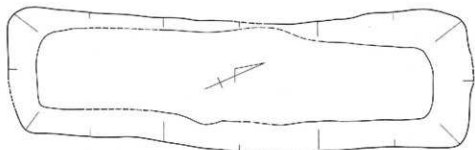


第46図 横枕53号墳 墳丘遺存図

主体は墓域内に直葬されたものと考えられる。ただし墓墳上には20~40cm大の地山石が配置されている。即ち、墓域内に遺体を埋置した後床面から25cm程度まで埋め、その上に規則的に石材が配される。配置は、まず墓域両小口側に40×20cm程度の石の平らな面を墓域内側に向けて立てて据える。北東側のものは外方に開いて傾くもの、その間は約1.65mである。次いで墓域主軸線上に20~35cm程度の石5個を平らな面を下に向けて、南西側小口部付近には20cm程度の間があくが、まるで蓋をするかのように置く。そしてさらにこれらの石の継ぎ目付近の両側上に同程度の石を2列5対、両側外に開き加減になるように立てて置いている。その際石の設置は北東側小口部の石とそのすぐ南西の平に置いた石との間の継ぎ目からなされており、結果として南西側小口部の石とそのすぐ北東側に平らに置いた石との間の継ぎ目



11.96.80-11



1. 黄褐色粘質土(0.5cm大の地山ブロックを含む)
2. 黄褐色粘質土(12よりやや硬; 0.5-1cm大の地山ブロックを含む)
3. 黄褐色粘質土(0.2-0.2cm大の地山ブロックを含む)
4. 黄褐色粘質土(0.3-1cm大の地山ブロックを多く含む; 黒褐色土を含む)
5. 黄褐色粘質土(0.1-0.2cm大の地山ブロックを含む)
6. 黄褐色粘質土(1-3cm大の地山ブロックを含む)
7. ぶい・黄褐色粘質土(0.5-3cm大の地山ブロックを含む)
8. 黄褐色粘質土(0.5cm大の地山ブロックを含む)
9. 黄褐色粘質土(0.2cm大の地山ブロックを含む)
10. 黄褐色粘質土(0.5-5cm大の地山ブロックを含む)
11. 黄褐色粘質土(0.3-5cm大の地山ブロックを含む)
12. 黄褐色粘質土(10よりやや硬; 0.3-3cm大の地山ブロックを含む)
13. 黄褐色粘質土(1-3cm大の地山ブロックを含む; やや明褐色がかる)
14. ぶい・黄褐色粘質土(0.3-0.5cm大の地山ブロックを多く含む)
15. 黄褐色粘質土(0.5cm大の地山ブロックを含む; ややオリーブ褐色がかる)
16. 黄褐色粘質土(13より硬; 明褐色がかる)
17. 黄褐色粘質土(13より硬く; 16より明; 0.5-8cm大の地山ブロックを含む)
18. オリーブ褐色粘質土(0.5-2cm大の地山ブロックを含む)
19. 黄褐色粘質土(17より明)

第47園 横枕53号墳 第1主体部実測図

は他よりやや広めに開くこととなっている。そしてここから須恵器壺(第45図-1)が検出されている。ただしこれと接合する破片が墓域内の北東側石材上から検出されており、あるいは埋葬時に破砕して石材上に配した可能性も考えられる。なお壺(1)は緩やかに外反する口頸部をもち、最大径を体部中上位に求めるものである。

その他の出土遺物 主体部内出土遺物の他には墳丘盛土中から弥生土器と見られる土器小片が出土しているが図化するには至らなかった。

なお主体部内出土の遺物等から本墳の築造時期は古墳時代後期中葉頃と考えられる。

3) 横枕54号墳(第40、41、48～51図;PL33～35)

位置と現状 横枕54号墳は、尾根上の調査地および支群の中央よりやや南東側、53号墳の北西8m付近に位置する円墳である。標高は98～99m程度で、周辺水田面からの比高差は80m弱となる。調査前の墳丘遺存状況は悪く、墳丘の南西側1/2以上が流失あるいは削平され、さらに墳頂部北西側にも盗掘穴と見られる長軸径3m弱の掘り込みがなされていた。ただ古墳の北西側即ち尾根の高位側には幅6m程度の凹みが見られ周溝の存在が想定されるとともに、北東側では古墳の裾と見られる傾斜の変換から2m余りの高まりが認められた。

墳丘 墳丘は地山整形と多量の盛土によって築造されている。このうち地山整形は、尾根上の高位側に最大幅約7m、同深さ0.8mの弧状の溝を掘り込むとともに低位側も南東に隣接する57号墳と共有の最大幅約5m、深さ0.5mの尾根を横断する溝を掘り込んで墳丘を尾根から切り離し、さらに裾部には幅0.5～2m、深さ10cm前後の弧状の溝を掘り込む。また、北東側および南西側については溝の延長線上でそれぞれ周回するようにその裾部を最大高1m地山カットするとともに墳裾テラス部を整形している。盛土はこの溝・地山カットによって削り出された直径約13mの円形の墳丘基底部になされるが、墳頂部から南で厚さ10cm前後の表土下が直ちに地山となるように、既にかんがりの量が流失あるいは削平されている。したがって最大遺存厚も、墳丘の北東側肩部付近で旧表土と考えられる暗オリーブ褐色粘質土(第38層)上に0.9mを測る程度である。

墳丘規模は、北西～南東墳裾間で径15.3m、同周溝外縁で20.3m、北東側墳裾からの高さ2.52m、北西側周溝底からの高さ1.2mを測る。

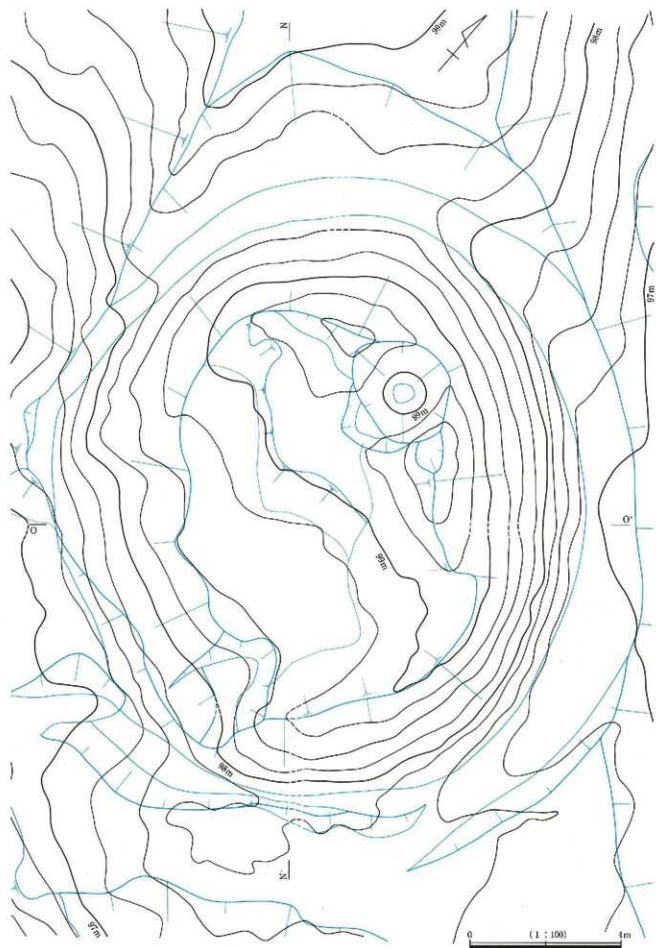
埋葬施設 埋葬施設は、平面精査、墳丘断削、盛土除去等を行った結果検出できず、既に流失あるいは削平されたと見られる墳丘中央部から南西部分に存在したのと考えられる。

その他の遺構 本墳からは埋葬施設は検出されなかったものの、墳丘盛土を除去したところ旧表土面から地山まで掘り込まれる溝状遺構を検出した。これは墳丘基底面の外縁に沿って北西側から時計回りに南東側まで一部抜けはあるものの直径約10mで半円形以上周回するもので、最大幅0.9m、同深さ0.25mを測る。現在では基底面自体が喪失したと見られる残りの部分にもこの溝は続いて周回していたとも考えられ、その位置関係から本墳築造に伴う遺構と考えられる。ただその性格やもつ意味については明確にはできなかった。

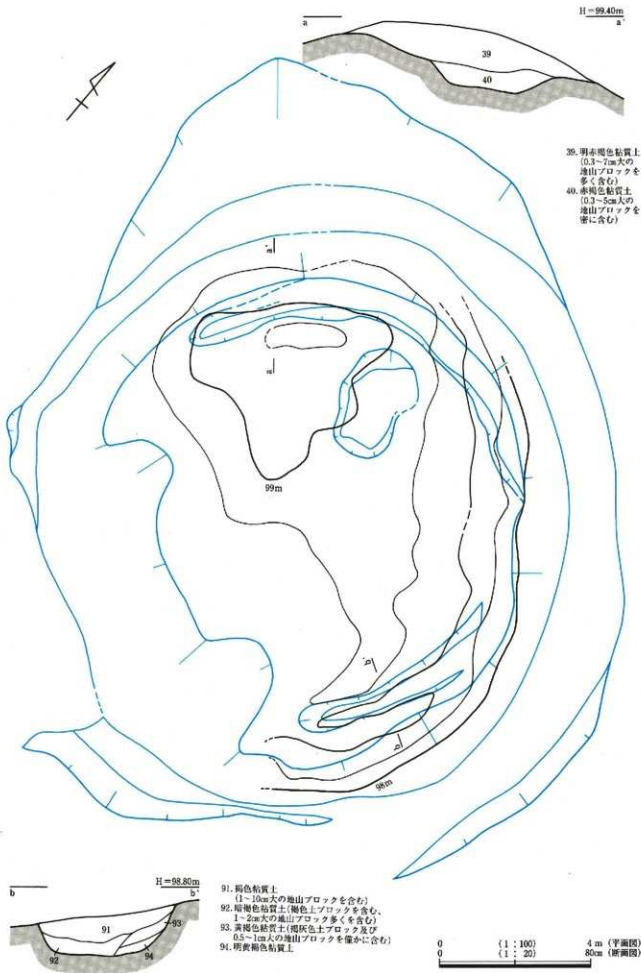
出土遺物 遺物は周溝、墳裾および盗掘穴攪乱土直下から須恵器片が、また旧表土から弥生土器と見ら



第48図 横枕54号墳 出土遺物実測図



第49图 横枕54号墳 墳丘遺存図



第50図 横枕54号墳 墳丘盛土除去後地形図

れる小片が少量ながら出土している。このうち須恵器はほとんどが体部片で、口縁部(第48図-1)と底部(同-2)を図化した。口縁部(1)は外面に形骸化した鈍い稜をもつもので、端部は丸くなりながら僅かに内傾する段の痕跡が残る。(2)は丸く仕上げられた底部で、回転ヘラ切り後ナデがなされる。

なおこれらの出土遺物等から本墳の築造時期は古墳時代後期頃と考えられる。

4) 横枕55号墳(第40,41,52~55図;PL36~39)

位置と現状 横枕55号墳は、尾根上の調査地および支群の中央よりやや北西側、42号墳と54号墳に挟まれた位置に尾根の軸に沿って立地する前方後円墳である。主軸はN-12°-Wにとり、尾根の高位側即ち42号墳の方向に前方部を向けて築造されている。標高は99~102m程度で、周辺水山面からの比高差は80m強である。調査前の墳丘遺存状況はあまり良好とはいえず、前方部、後円部共にその南西側が大きく抉られるように流失あるいは削平された状態であった。ただ前方部の北側から西側にかけては尾根を掘削したと思われる溝状の凹みが見受けられ、また前方部東側から時計回りに後円部南東付近には1.7~2.2m程度の高まりが見られるとともにくびれの様相を呈していたため、人為的な地山整形が想定された。

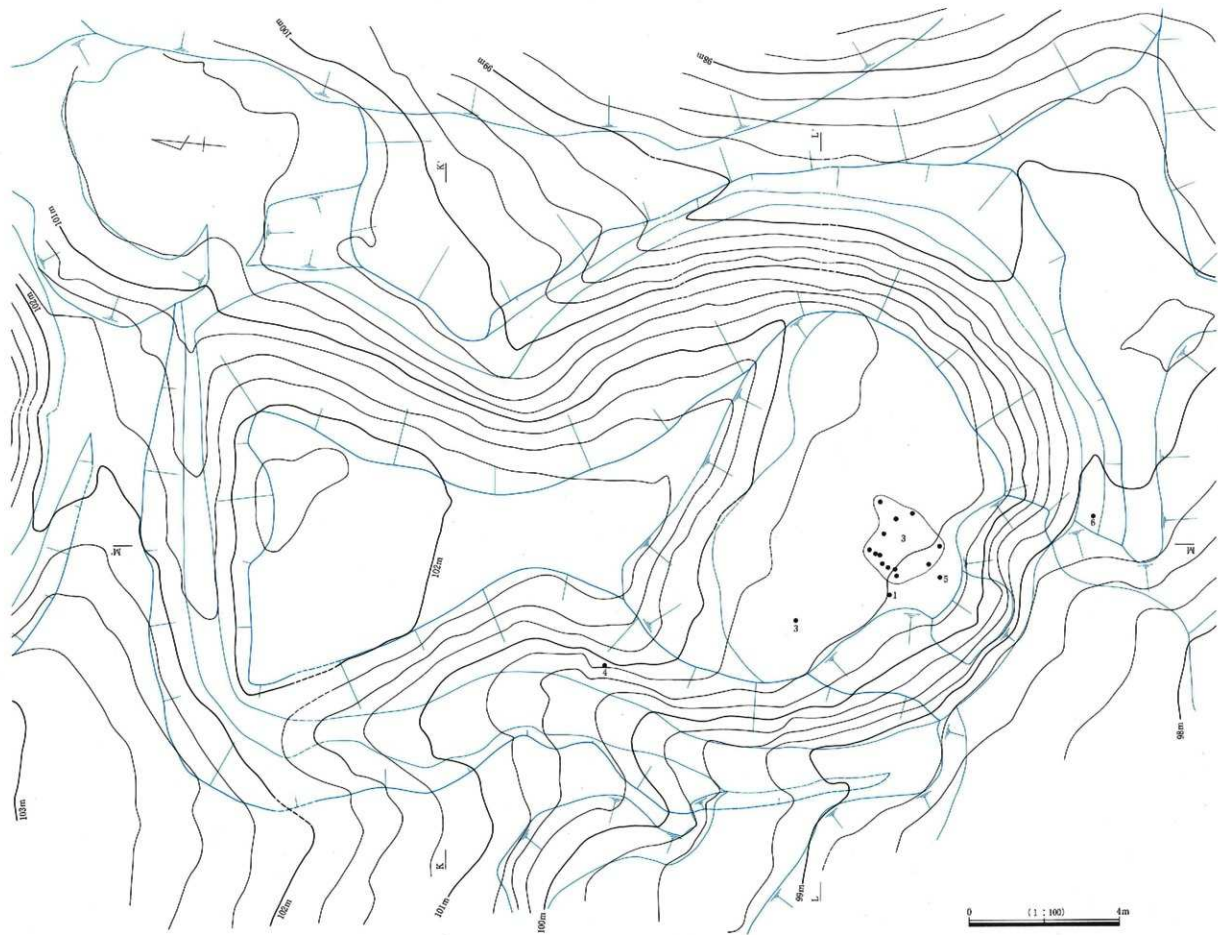
墳丘 墳丘は地山整形と多量の盛土によって築造されている。このうち地山整形は、まず上述のとおり、尾根の高位側即ち前方部の北側から西側、さらにくびれ部をへて後円部西側にかけて掘り込まれ周溝を造り出している。溝の規模は幅2.9~4.7m、深さ0.5~1.0mである。また前方部東側から時計回りにくびれ部をへて後円部南東付近ではその裾部を1.0~1.5m程度地山カットして墳裾テラス部を形成するとともにくびれ部から後円部南側にかけてはさらに10cm前後掘り下げて浅い周溝状の溝を形成している。次いで、この溝・地山カットによって削りだされ鍵穴形部分の尾根高位側の一部を削って墳丘基底部を形成している。盛土はこの墳丘基底部の上になされるが、地山整形によって削られた前方部の一部を除くと基本的に旧表土と見られる暗オリーブ褐色粘質土(第59層)上に盛られている。なお盛土は前方部、後円部ともに流失あるいは削平されており、その遺存厚は、前方部で最大0.26m、くびれ部付近で0.4m、後円部で最大0.86mを測る程度である。

墳丘規模は、全長23.2m(墳裾間)、同26.0m(周溝外縁間)、前方部長8.0m、前方部端部幅9.9m(墳裾間)、くびれ部幅7.75m(墳裾間)、後円部径14.5~15.2m(墳裾間)、同16.5m(周溝外縁間)を測る。また前方部の高さは1.24m(北側墳裾から)、2.04m(東側墳裾から)で、後円部の高さは2.8m(南側墳裾から)、2.98m(東側墳裾から)を測る。

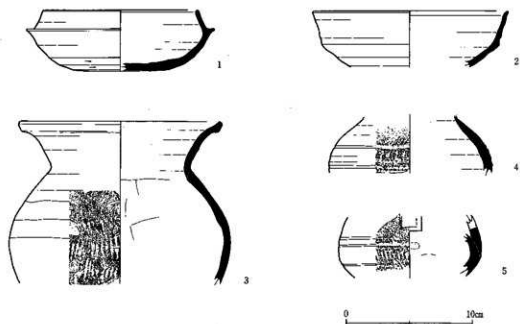
なお平面形について見ると、後円部はほぼ真円で、前方部はくびれ部から前方部両コーナーへ向けて墳裾で約55°の角度をもって開く。ただしくびれ部については東側のものが西側のものに比べてくびれ込む様相を呈している。また前方部と後円部の関係について見ると、絶対高には現状ではほとんど差異は認められないが、いずれも大きく流失あるいは削平されており、築造時の状況は不明である。

埋葬施設等 埋葬施設は、平面精査、墳丘断面、盛土除去等を行った結果検出できず、既に流失あるいは削平されたと思われる後円墳頂部中央から南側に存在したものと考えられる。ただ盛土の遺存状況と除去後状況から少なくとも盛土前に旧表土や地山を掘り込むものではなく、ある程度盛土がなされた後あるいは盛土整形後に埋葬施設が設けられたものと推定される。また前方部でも祭祀等の遺構は検出されなかった。

出土遺物 遺物は前方部墳裾や後円部周溝内から、また後円墳頂部表土下からそれぞれ少量の須恵器が出土した他、旧表土中から弥生土器等(後述)が出土している。このうち墳丘上および墳丘斜面出土の5点(第54図-1~5)と周溝内出土の1点(第55図-6)の計6点を図化した。杯身(1)は内傾する立上りをもつものでその端部は丸く底部は比較的平らである。これに対して(6)はやや内傾した後真上に延びる立上りを有しその端部に面をもつものである。高杯と見られる(2)は鈍い稜をもつもので、外傾する口縁部の端部はやや外方へ先細る。壺(3)は体部肩の張りの少ないもので、外反する口頸部の端部を肥厚する。



第53図 横枝55号墳 墳丘遺存図



第54図 横枕55号墳 出土遺物実測図



第55図 横枕55号墳 周溝内出土遺物実測図

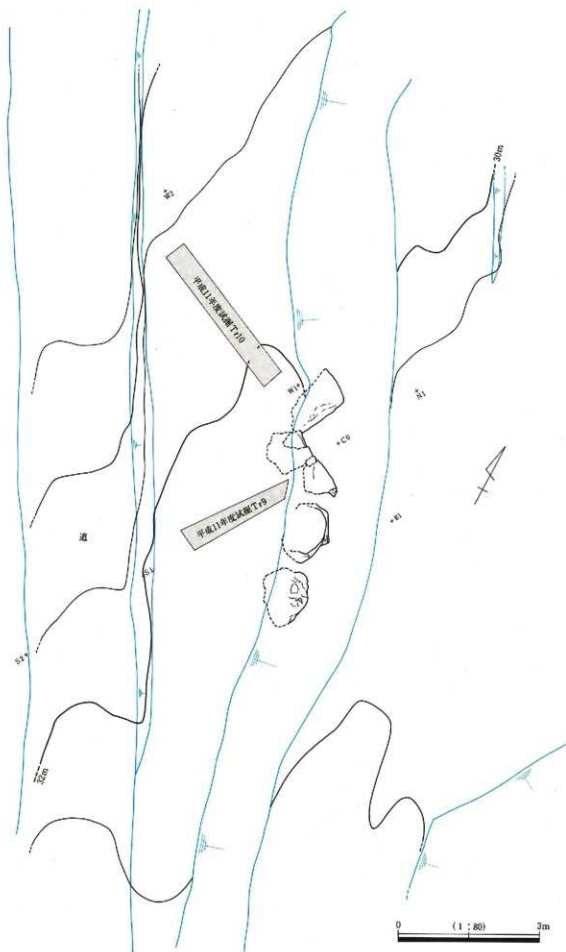
体部片(4,5)は体部の1/2あたりにもつ最大径の前後にそれぞれ2本の沈線を廻らせその間に連続刺突文をもつものである。

なおこれらの出土遺物から本墳の築造時期は古墳時代後期中葉頃と考えられる。

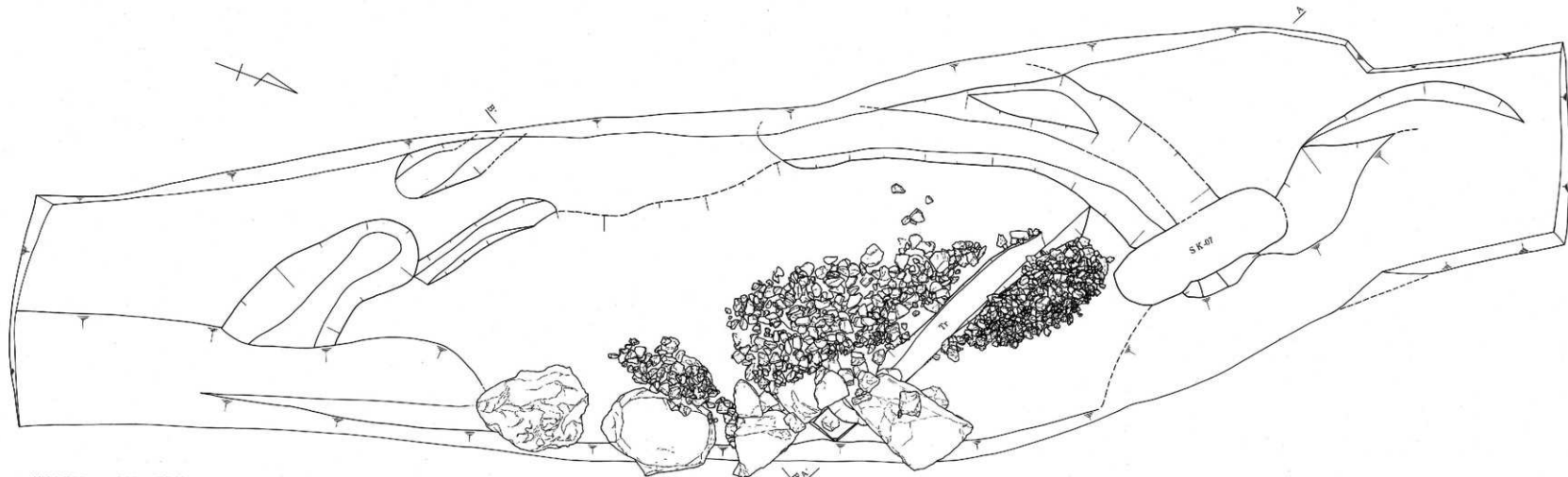
5) 横枕56号墳(第56～59図;PL40～42)

位置と現状 横枕56号墳は横枕集落の東側、標高32m程度の丘陵裾に位置し、東側に広がる水田面からの比高差は10m程度である。もともとは知られていなかった古墳であるが、地元の方からの「切り土面に大きな石があった」との情報をもとに平成11年度に試掘を行い確認された古墳である。周辺の丘陵裾には同様の古墳が点在しており今後も開発には注意が必要な地域である。調査前の状況は、ちょうど丘陵裾から平野部への変換点付近ということもあって、古墳の途中から高さ2m以上カットされてその前面に農用地の造成がなされていた。また古墳の残り部分についても、その上部の大部分が平坦化され畑作地あるいは果樹園として利用され、さらに山道として整備されていた。従って現状で古墳の存在を示すものは、切り土面の石材の露頭だけであったが、内部施設に石室をもつ古墳であることが推察された。

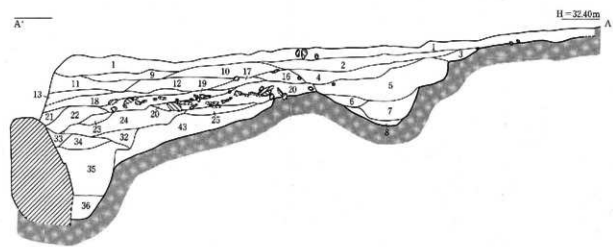
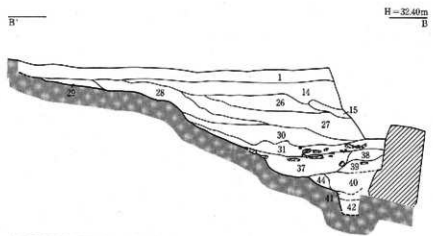
墳丘 墳丘は地山整形と盛土によって築造されている。このうち地山整形は、まず墳丘を丘陵裾斜面から切り離すため現状では一部が削平されているものの、斜面上位側に幅1.1m程度の弧状の溝を掘り込んで古墳の後背周溝部分を形成する。次いでその中に石室構築のための場所として墓壇が掘り込まれる。墓壇は周溝の内側の斜面を半円形状に傾斜角をややきつめにカットし、さらにその中に平面L字状にほ



第56図 横杖56号墳 地形図



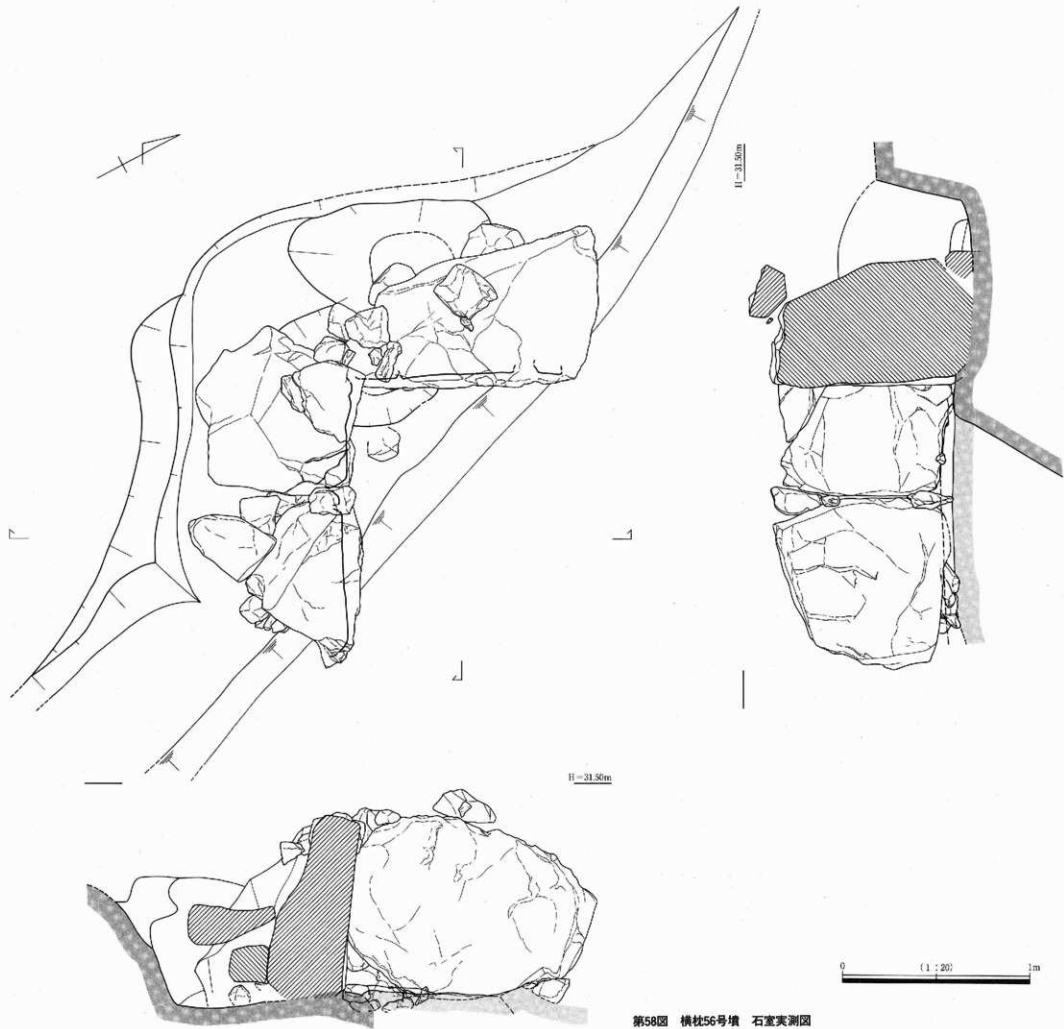
1. 暗褐色粘質土(ややシルトかかぬ; 雑作土)
2. 褐色粘質土(0.2~0.5cm大の塊山小礫および炭片を含む; ややシルトかかぬ)
3. 褐色粘質土(2より暗く; 2よりやや明; 0.2~0.5cm大の塊山小礫を僅かに含む; ややシルトかかぬ)
4. 褐色粘質土(2より暗く; 2よりやや明; 0.2~0.5cm大の塊山小礫を僅かに含む; ややシルトかかぬ)
5. 暗褐色粘質土(2より暗; 0.2~1cm大の塊山小礫および炭片を含む; ややシルトかかぬ)
6. 暗褐色粘質土(2より暗; 0.2~0.5cm大の塊山小礫を僅かに含む)
7. 暗褐色粘質土(2より暗く; 6よりやや明; 0.3~1cm大の塊山小礫を含む)
8. 土間~褐色粘質土(0.1~0.5cm大の塊山小礫を多く含む)
9. 褐色粘質土(2より暗; 0.1~0.5cm大の塊山小礫を僅かに含む; ややシルトかかぬ)
10. 褐色粘質土(2よりやや明るく; 2より暗; 0.2~0.5cm大の塊山小礫および炭片を含む; ややシルトかかぬ)
11. 褐色粘質土(9より暗; 0.2~0.3cm大の塊山小礫および炭片を含む; ややシルトかかぬ)
12. 褐色粘質土(10よりやや明; 0.2~0.3cm大の塊山小礫および炭片を含む)
13. 褐色粘質土(11より明; 暗褐色塊山小礫を多く含む)
14. 褐色粘質土(14よりやや明; 暗褐色塊山小礫を多く含む)
15. 褐色粘質土(14よりやや暗; 0.2~0.5cm大の塊山小礫を含む; ややシルトかかぬ)
16. 褐色粘質土(12よりやや明; 0.2~0.5cm大の塊山小礫を含む)
17. 褐色粘質土(12よりやや暗; 0.2~0.5cm大の塊山小礫を含む)
18. 褐色粘質土(12; 13より暗; 0.2~0.5cm大の塊山小礫を含む)
19. 褐色粘質土(17; 18より暗; 3~25cm大の礫を含む)
20. 褐色粘質土(18より暗; 3~20cm大の礫を多く含む)
21. 褐色粘質土(18よりやや明; 21よりやや暗; 0.5~4cm大の塊山小礫を多く含む)
22. 褐色粘質土(18よりやや明)
23. 暗褐色粘質土(褐色粘質土ブロックを含む)
24. 暗褐色粘質土(22より明; 暗褐色粘質土上層褐色粘質土および1.5~3cm大の塊山小礫を含む; やや赤褐色かかぬ)
25. 暗褐色粘質土(0.5~1cm大の塊山小礫を含む)
26. 暗褐色粘質土(24より明; 0.1~0.3cm大の塊山小礫を含む; やや赤褐色かかぬ; ややシルトかかぬ)
27. 暗褐色粘質土(24より明るく; 25よりやや暗; 0.2~1.5cm大の塊山小礫を含む; やや赤褐色かかぬ; ややシルトかかぬ)
28. 土間~赤褐色粘質土(0.2~1.5cm大の塊山小礫を多く含む; ややシルトかかぬ)
29. 暗褐色粘質土(0.2~0.5cm大の塊山小礫を含む)
30. 暗褐色粘質土(27よりやや明; 5~20cm大の礫を多く含む; やや赤褐色かかぬ)
31. 暗褐色粘質土(29より明; 0.2~0.5cm大の塊山小礫および15~18cm大の礫を多く含む)
32. 暗褐色粘質土(24より明; やや赤褐色かかぬ)
33. 暗褐色粘質土(22よりやや明るく; 24より暗; 0.5~1cm大の塊山小礫を多く含む)
34. 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)
35. 暗褐色粘質土(22より暗; 24より明; 暗褐色粘質土ブロックを多く含む; 0.5~3cm大の塊山小礫を含む)

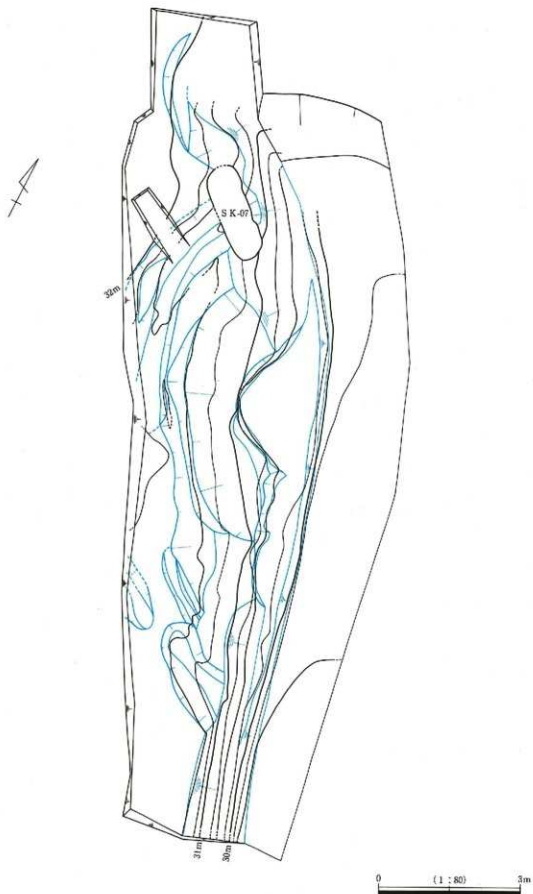


35. 暗褐色粘質土(塊山小礫を含む)
36. 暗褐色粘質土(31より暗; 5~20cm大の礫を含む)
37. 暗褐色粘質土(31より暗; 5~20cm大の礫を含む)
38. 暗褐色粘質土(31より暗; 27よりやや明; 0.2~0.5cm大の塊山小礫を含む)
39. 暗褐色粘質土(31より明; 0.2~1.5cm大の塊山小礫を多く含む; やや赤褐色かかぬ)
40. 暗褐色粘質土(29よりやや明; 0.2~3cm大の塊山小礫を含む)
41. 暗褐色粘質土
42. 暗褐色粘質土(41より明)
43. 暗褐色粘質土(24よりやや明; 0.5~3cm大の塊山小礫を含む)
44. 暗褐色粘質土(40よりやや明; 0.2~1cm大の塊山小礫を含む)

第57図 横柱56号墳 墳丘検出状況図・墳丘断面図







第59図 横枕56号墳 墳丘盛土除去後地形図

は垂直に40~55cm掘り込みもので、現在はその一部しか遺存していないが、その前面に形成される平坦面が玄室床面および墳丘基底面となる。盛土はこの墓室内に石室の腰石が設置され、それぞれ裏込め土(第33~36、38~42層)によって固定された後、その上に盛り上げられている。ただ上述のとおり本墳は既にその多くが削平されており本来はもっと高く盛り上げられていたものと考えられるが、石室の裏込め土近くで遺存厚0.8~1mを測るのみである。また現状での石室より斜面の高位側には腰石の上面前後の第19、20、31、37層付近で2~25cm程度の角礫が多量に敷き詰められている。これらの礫はすべて盛土中に埋没されるもので、盛土強化の目的で埋置された可能性が考えられる。

なお墳丘は遺存状態が極めて悪いものの、周溝の形態から見て円墳と考えられ、規模は径が約10m強で、墳丘基底面からの高さは1.67mを測る。

埋葬施設 埋葬施設は墳丘のほぼ中央と想定される位置から石室1基が検出されたが、削平によって遺存状況が極めて悪く、L字状に腰石が3石とその上に若干の積み石が遺存するのみである。周辺古墳の例などから横穴式石室と考えられるが、袖の有無、開口方向など詳細は不明である。ただし、3石の腰石は北西側の1石と南西側の2石に分けられ、前者を奥壁とすれば、南東側に開口して主軸はN-62°-Wとなり、後者を奥壁とすれば、北東側に開口して主軸はN-28°-Eとなる。玄室の遺存長は、内法で、南西~北東方向が1.2m、北西~南東方向が1.54m、最大遺存高0.95mを測る。遺存する壁体について見ると、北西側の腰石は長さ1.4m、高さ0.97m、厚さ0.85mの石材の平らな面を玄室の内側に向けて南西側の腰石を挟むように配す。南西側壁には腰石として2石が遺存しているが、西側コーナー側のものが長さ0.9m、高さ0.91m、厚さ0.85m、もう1石が長さ0.91m、高さ0.95m、厚さ0.63mを測り、それぞれ平らな面を玄室の内側に向けてほぼ高さを揃えて配している。これらの石の継ぎ目には別の小振りな石が積められて隙間がふさがれ、また高さ調整もなされている。おそらくこの腰石目には別の小振りな石が小口面を玄室の内側に向けて横積みされたものと思われるが詳細は不明である。

なお南西側腰石の南には同様サイズの石材2個が隣接する。本来は本墳の壁体を構成する2石であったものと考えられるが、用地造成の際に現位置に移動されたものと思われる。

出土遺物 遺物はそのほとんどが失われたものと思われ、僅かに耕作土、周溝内、墳丘盛土中から須恵器小片数点が検出されたのみでいずれも図化するには至らなかった。

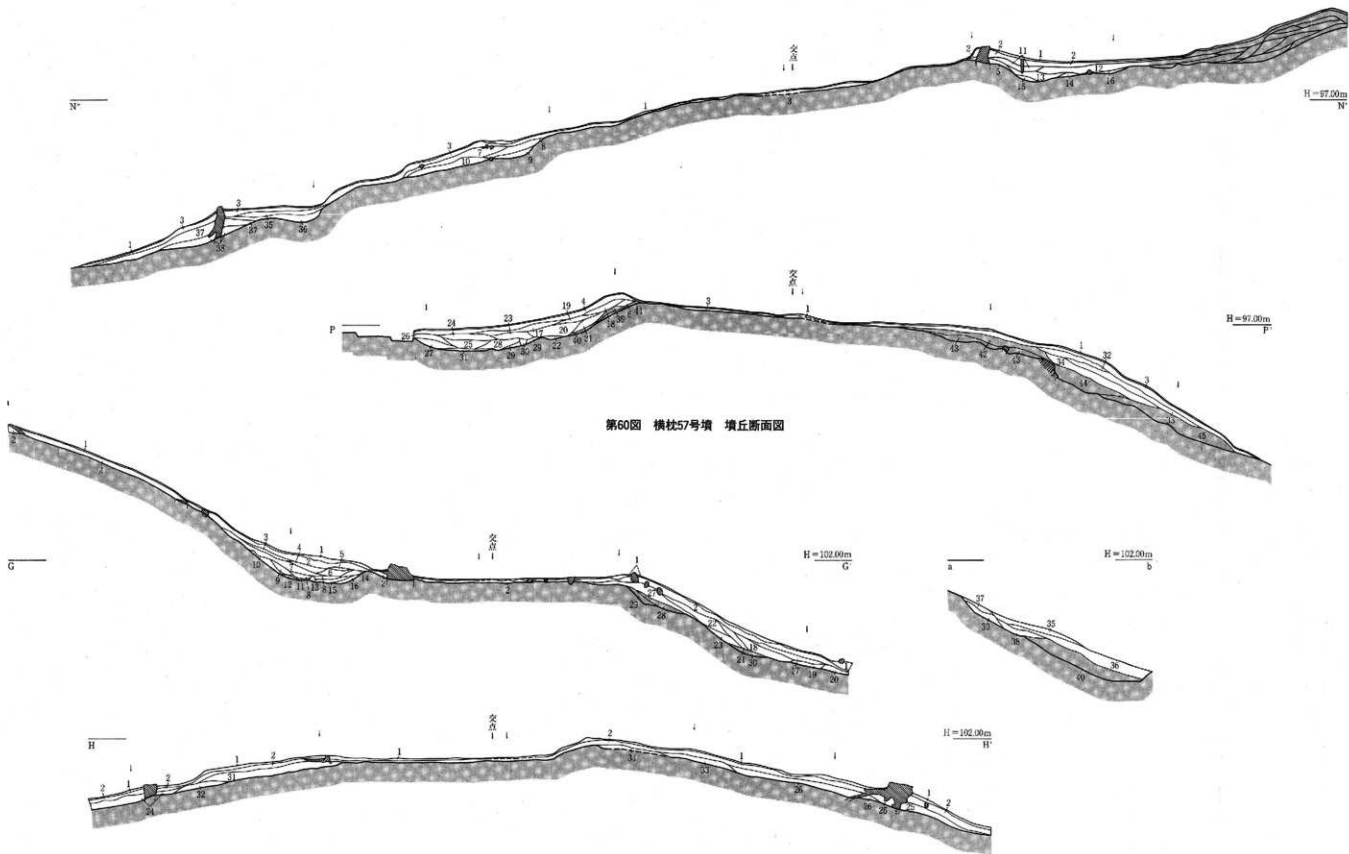
なお消極的ではあるがこれらの出土遺物などから本墳の築造時期は古墳時代後期と考えられる。

6) 横枕57号墳(第40、41、60、62図:PL43~44)

位置と現状 横枕57号墳は尾根上調査地に立地し、支群の最南東部に位置する。北東側周溝の一部が53号墳の周溝と切り合い、北西側8mには54号墳が隣接する円墳である。標高は95.5~97.5m程度で、周辺水田面からの比高差は75m強となる。調査前には周辺は53号墳も含めて比較的平坦地形となっていたが、その中の一部に外輪山状の高まりが認められた。その比高差は20~40cm程度である。

墳丘 墳丘は地山整形と盛土によって築造されている。このうち地山整形は、尾根の高位側即ち54号墳側に、先に述べたように54号墳と共有の最大幅5m、深さ0.5mの尾根を横断する溝を掘り込んで墳丘を尾根から切り離すとともに墳丘の北西から時計回りに北東側までの裾には幅2~3m、深さ10~30cmの弧状の溝を掘り込む。またその他の古墳裾については、周回するように30~50cm程度地山カットして墳裾を形成している。盛土はこの溝・地山カットによって削り出された直径10m程度の円形墳丘基底面上になされるが、墳頂部の大部分で3~10cm程度の表土下が直ちに地山となることでわかるように既にそのほとんどが失われたものと考えられる。従って最大遺存厚も墳頂部北側外縁付近で僅かに10cm前後を測るのみである。

墳丘規模は、北西~南東墳裾間で径10.93m、同周溝外縁で径12.88m、北西側墳裾からの高さ0.55m、北東側墳裾からの高さ1.22mを測る。なお本墳はその周溝の一部が53号墳の周溝と僅かに切り合うが、断面観察によると53号墳の周溝が埋没した後に本墳の周溝が掘り込まれる様相を示している。



第60図 横枕57号墳 墳丘断面図

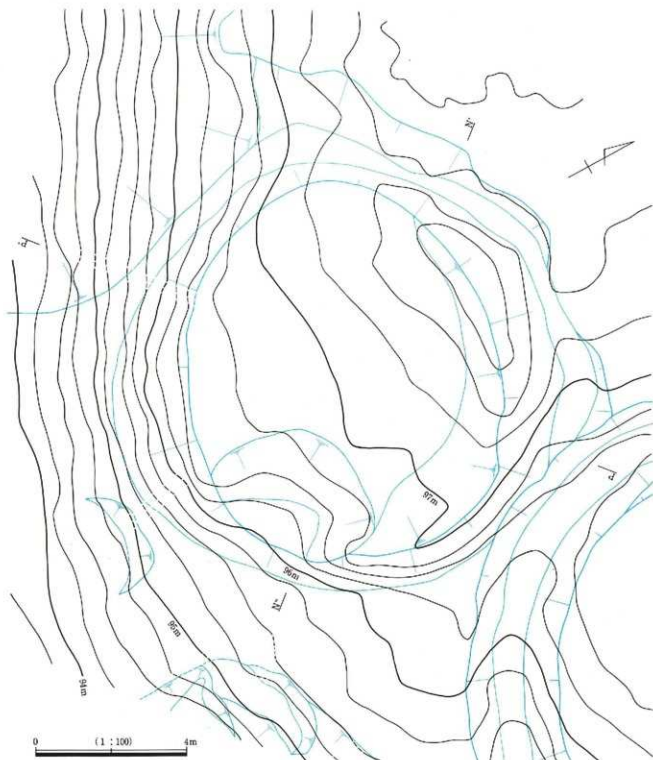
第61図 横枕58号墳 墳丘断面図

1. 腐植土
2. 暗褐色粘質土(やや灰色かか)
3. 暗褐色粘質土(0.5cm大の嵐山ブロックを密に含む；しまっていない)
4. 暗褐色粘質土(10.2cm大の嵐山ブロックを含む)
5. 暗褐色粘質土(0.2-2cm大の嵐山ブロックを含む)
6. 褐色粘質土(やや暗褐色か)
7. 暗褐色粘質土(1.5よりやや明；0.2-0.5cm大の嵐山ブロックを含む)
8. 暗褐色粘質土(3.5より明；0.2-1cm大の嵐山ブロックを密に含む)
9. 暗褐色粘質土(1.5より明；0.5-5cm大の嵐山ブロックを含む)
10. 暗褐色粘質土(5よりやや暗；0.2-5cm大の嵐山ブロックを密に含む)
11. 暗褐色粘質土(12よりやや暗)
12. 暗褐色粘質土(11よりやや暗；やや灰色かか)
13. 暗褐色粘質土(11よりやや暗；5よりやや暗；0.3-0.7cm大の嵐山ブロックを含む)
14. 暗褐色粘質土(12よりやや暗；0.5cm大の嵐山ブロックを密に含む)
15. 暗褐色粘質土(13より明；0.5-0.5cm大の嵐山ブロックを含む)
16. 暗褐色粘質土(12よりやや暗；やや灰色かか)
17. 暗褐色粘質土(12よりやや暗)
18. 褐色粘質土(やや暗褐色かか；6よりやや暗)
19. 褐色粘質土(やや暗褐色かか)
20. 暗褐色粘質土
21. 褐色粘質土(19より明)
22. 暗褐色粘質土(やや暗褐色かか；0.5-1cm大の嵐山ブロックを含む)
23. 暗褐色粘質土(20よりやや暗)
24. 暗褐色粘質土
25. 暗褐色粘質土(0.5-1cm大の嵐山ブロックを含む)
26. 暗褐色粘質土(25よりやや暗)
27. 褐色粘質土(0.5-2cm大の嵐山ブロックを多く含む)
28. 暗褐色粘質土(26より暗；23よりやや明)
29. 暗褐色粘質土(28より暗；23よりやや明)
30. 暗褐色粘質土(28より暗；23よりやや明)
31. 暗褐色粘質土(29に暗；0.5-5cm大の嵐山ブロックを含む)
32. 暗褐色粘質土(31よりやや暗；0.5-1cm大の嵐山ブロックを密に含む)
33. 暗褐色粘質土(0.5-1cm大の嵐山ブロックを含む)
34. 暗褐色粘質土(33よりやや暗；0.5-0.5cm大の嵐山ブロックを含む)
35. 暗褐色粘質土(33より暗；0.5-1cm大の嵐山ブロックを含む；あまりしまっていない)
36. 暗褐色粘質土(0.2-1cm大の嵐山ブロックを含む)
37. 暗褐色粘質土(29より明)
38. 暗褐色粘質土(37よりやや暗；やや暗褐色かか；2-10cm大の嵐山ブロックを含む)
39. 暗褐色粘質土(21よりやや暗)
40. 暗褐色粘質土
41. 暗褐色粘質土
42. 暗褐色粘質土(33よりやや暗；3-32よりやや暗；0.5-1cm大の嵐山ブロックを多く含む；しまっていない)
43. 暗褐色粘質土
44. 暗褐色粘質土(灰化物存在)
45. 暗褐色粘質土(44よりやや暗；5-20cm大の嵐山ブロックを密に含む)

1. 腐植土
2. 暗褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土(2よりやや暗)
4. 褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土(2よりやや暗)
6. 褐色粘質土(4よりやや暗)
7. 暗褐色粘質土
8. 暗褐色粘質土(7より暗；暗褐色粘質土ブロックを含む)
9. 褐色粘質土(4よりやや暗；1cm大の嵐山ブロックを含む)
10. 暗褐色粘質土(4より明)
11. 褐色粘質土(9よりやや暗；10よりやや暗；やや暗褐色かか)
12. 褐色粘質土(10より明)
13. 暗褐色粘質土(0.5-2cm大の嵐山ブロックを含む)
14. 暗褐色粘質土(12より明)
15. 暗褐色粘質土
16. 暗褐色粘質土(15より明；やや暗褐色かか)
17. 暗褐色粘質土
18. 暗褐色粘質土(17より明；暗褐色粘質土および嵐山ブロックを多く含む)
19. 暗褐色粘質土(17より明；やや暗褐色かか)
20. 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土)
21. 暗褐色粘質土
22. 暗褐色粘質土
23. 暗褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)
24. 暗褐色粘質土
25. 暗褐色粘質土
26. 暗褐色粘質土(25よりやや暗)
27. 暗褐色粘質土(27より暗褐色かか)
28. 暗褐色粘質土(22よりやや暗)
29. 暗褐色粘質土
30. 暗褐色粘質土(21よりやや暗)
31. 暗褐色粘質土(21よりやや暗；暗褐色粘質土)
32. 暗褐色粘質土
33. 暗褐色粘質土(26よりやや暗)
34. 暗褐色粘質土(33よりやや暗；灰化物を密に含む)
35. 暗褐色粘質土
36. 暗褐色粘質土(36よりやや暗)
37. 暗褐色粘質土(36よりやや暗)
38. 暗褐色粘質土
39. 暗褐色粘質土(36よりやや暗)
40. 暗褐色粘質土(36よりやや暗)

埋葬施設等 埋葬施設は、平面精査、墳丘断削等を行った結果検出できず、既に流失あるいは削平された墳頂部に存在したものと考えられる。なお本墳遺存墳頂部の東側からは地山を掘り込む後述のSK-08が検出されている。また本墳墳丘の南東側や、南東側墳丘外2.5m付近には長径3～4m程度の抉ったような凹みが認められ、後世に何らかの人為的な行為が行われた可能性を示していると思われる。

出土遺物 本墳からは南西側墳掘付近から弥生土器と見られる細片が僅かに出土したのみで図化するには至らなかった。なお本墳の築造時期は、53号墳との切り合い関係や54号墳との関係などから古墳時代後期頃としておきたい。

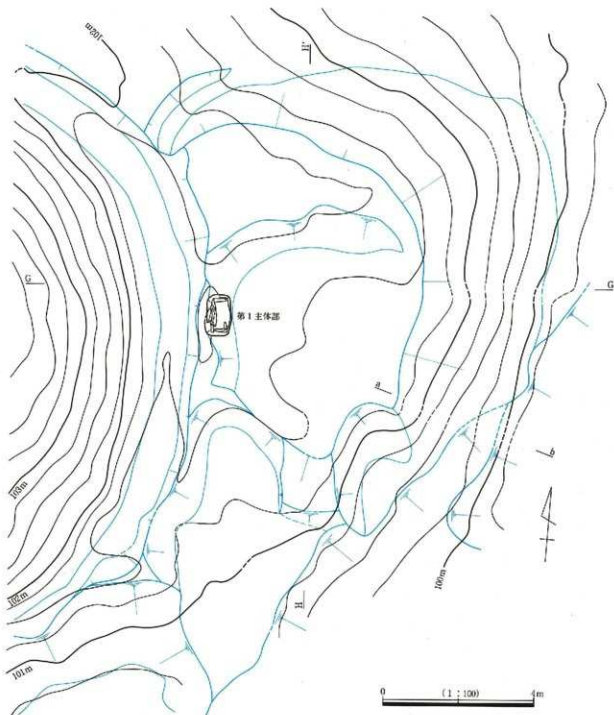


第62図 横杖57号墳 墳丘遺存図

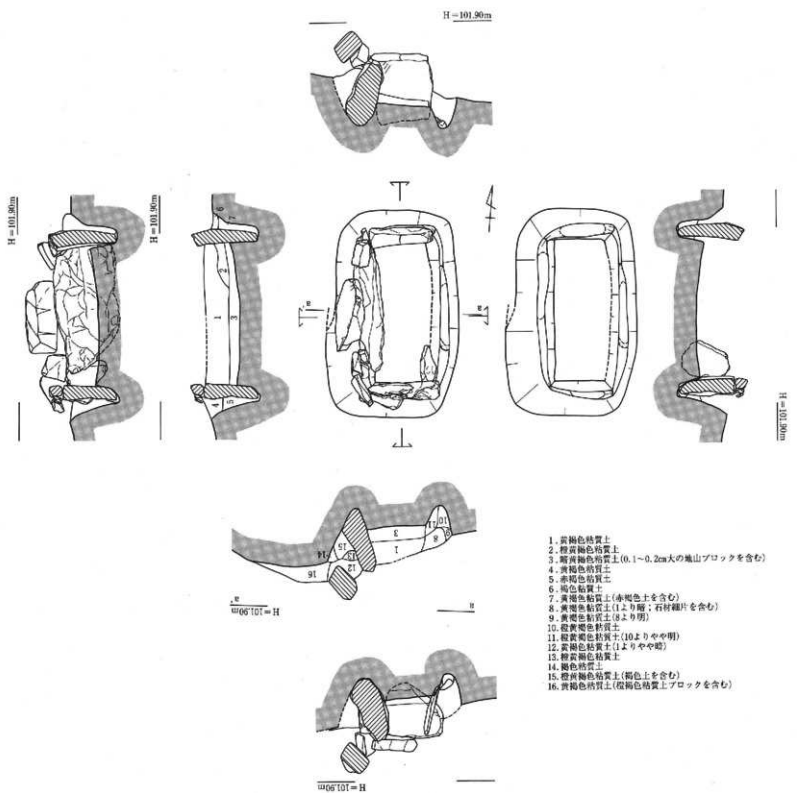
7) 横枕58号墳(第40、41、61、63、64図;PL44~46)

位置と現状 横枕58号墳は尾根上調査地に立地し、支群の最北部に位置する。南西側には42号墳が接する。標高は102m程度で、周辺水田面からの比高差は80m強である。調査前の周辺は南西側に隣接する42号墳が約3mもの遺存高をもつのに比べたらほとんど平坦と言って良い地形で、その墳頂部付近に30cm強の深さでカール状に抉られるような流失あるいは削平の痕跡が認められたほかは、北西側墳裾付近に周溝状の僅かな凹みが見受けられる程度であった。

墳丘 墳丘は地山整形によって築造されたものと考えられる。即ちまず墳丘の北西側に見られる幅1.1m、深さ0.2m程度の溝を尾根の高位側即ち墳丘の西側に掘り込んで墳丘を尾根上平坦部から切り離し



第63図 横枕58号墳 墳丘遺存図



第64図 横枕58号墳 第1主体部実測図

たものと考えられる。ただし現状では西側には42号墳の周溝が廻っており、また南西側はカール状の流失あるいは削平がなされており溝は検出されていない。次いで丘陵斜面部分にあたる他の部分については流失が著しくてやや不明瞭であるが、斜面の角度をもう少しきつめにカットして墳丘を造り出している。おそらくはこうして造り出された墳丘基底面上に盛土がなされたものと考えられるが、遺存状況が極めて悪く、表土下で直ちに検出された旧表土の漸移層と見られる暗黄褐色粘質土(第27、31-34、39層)上には明瞭に盛土と考えられる土層は認められなかった。あるいは他の古墳とは異なって薄い封土的なものであった可能性も考えられる。

墳丘規模は、径10m程度、高さは東側墳裾から1.3mであるが遺存状況が悪くやや不明確と言わざるを得ない。また墳形は明確にできず、42号墳との切り合い関係も不明である。

埋葬施設 埋葬施設は、墳頂部の西側肩部付近で42号墳周溝の外縁にもあたる位置から箱式石棺1蓋(第1主体部)が検出された。検出の段階で既に蓋石はなく、片側の側板も失われており、墓壙自体もその上位が流失した状況であった。墓壙の平面形は隅丸長方形で、主軸はN-5.5°-Wにとる。規模は、長さ1.1m、幅0.7m、深さ0.28mを測り地山を掘り込んでいる。箱式石棺は南北両小口部にまず幅35cm前後、高さ30-35cm、厚さ8cm程度の板石を立て、西側側板としてはやや内側に倒れかかっているが、それを挟むように長さ70cm程度、高さ35cm、厚さ10cm程度の板石を北側小口側からつめて据える。少し間の開いた南側小口寄りには、その間を埋めるように小振りの長さ20cm、高さ25cm、厚さ6cm程度の板石を北側と同様に小口板を挟むように据え付けている。東側側板はほとんど喪失しているが、南側小口寄りに長さ20cm、高さ25cm、厚さ4cm程度の板石がやや内側に倒れかかるように傾いて遺存している。これは小口板を挟むという形ではないが、石材の抜き取られた側板穴と考え合わせると、西側側板の組み方とほぼ同様の組み方がなされたものと考えられる。また、南側小口板の上には小振りな割石が積まれており、北側小口板や側板とほぼ高さを揃えている。さらに西側側板の南北両端付近では別の割石が両小口板より5cmほど高い位置でほぼ同レベルになるようにそれぞれ積まれている。おそらくどちらかの上に蓋石が乗せられていたものと思われる。石棺の規模は、内法で長さ0.75mを測り、幅と深さは推定内法でそれぞれ0.3m、0.27m程度となる。棺内から遺物は検出されなかった。

なお、この石棺はその位置からして本墳の中心主体とは考え難く、本来は墳頂中央部にも埋葬主体部が存在したと思われるが、墳丘の喪失が著しく精査の結果検出されなかった。

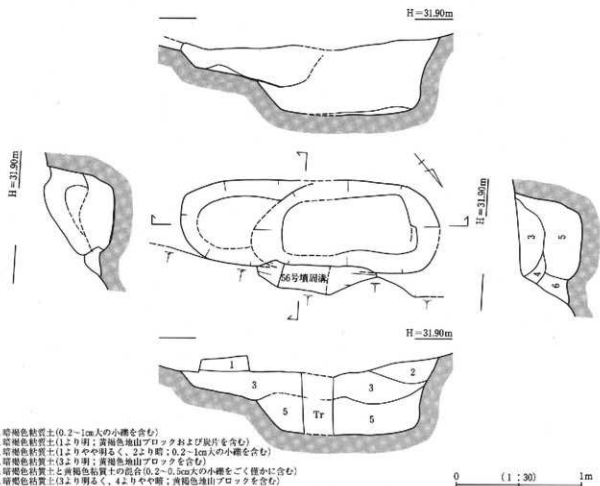
その他の出土遺物 遺物は北側墳裾から須恵器片1点と、墳頂部地山直上から弥生土器片2点(後述)が出土した。このうち須恵器は図化しなかったが杯身の細片で、その立上りは内傾してからやや真上に立ち上がるもので端部には内傾する段をもつものである。なお本墳の築造時期については、検討材料に乏しく不明としておきたい。

8) 土坑(第65-67図;PL47)

①SK-07(第65図;PL47-1)

丘陵裾調査地、標高32m弱で56号墳の北西側から周溝を切る形で検出した。平面形は長楕円形で、主軸をN-50°-Wにとって地山まで掘り込む。断面は長軸方向の片側にテラスをもつ二段掘りとなっており、北西側はやや緩やかに下りた後鋭角に底へと続き、南東側が一段下りてテラスを経た後再び下りて底へと続く。北東側は農業用地造成時のほとんど法面にあたるため不明瞭であるが、南西側は比較的鋭角に底へと続く。床面の平面形は隅丸長方形である。規模は、長さ2.06m、幅0.74m、深さ0.63mを測る。

遺物は埋土中位から風化の進んだ土師器片が出土したものの器種、器形ともに不明で、土坑の性格や時期も56号墳より新しいということ以外は不明である。



1. 暗褐色粘質土(0.2-1cm大の小礫を含む)
2. 暗褐色粘質土(1より明; 黄褐色地山ブロックおよび炭片を含む)
3. 暗褐色粘質土(1よりやや明るく; 2より暗; 0.2-1cm大の小礫を含む)
4. 暗褐色粘質土(3より明; 黄褐色地山ブロックを含む)
5. 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合(0.2-0.5cm大の小礫をごく僅かに含む)
6. 暗褐色粘質土(3より明るく; 4よりやや暗; 黄褐色地山ブロックを含む)

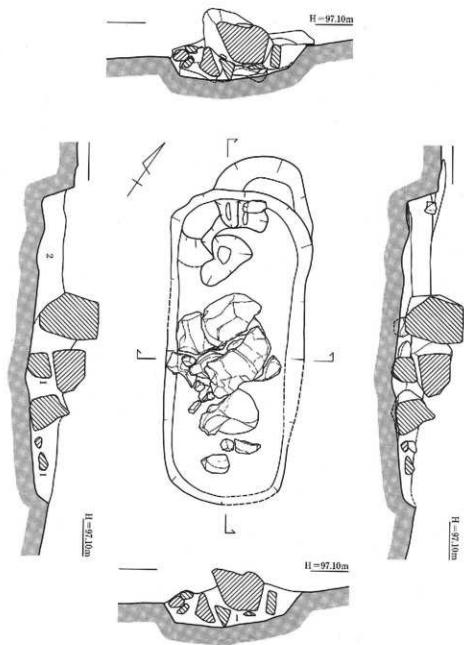
第65図 SK-07 実測図

②SK-08 (第66図; PL47-2)

尾根上調査地南東部の57号墳遺存墳頂部東端部付近から表土下で検出した。平面形は隅丸長方形で、北側短辺の外側に深さ5cm程度の浅い皿状の落ち込みが認められるが、遺構に伴うものか自然のものか明確にはできなかった。主軸はN-35°-Wにとって地山を掘り込む。断面は基本的に浅い逆台形状であるが、北西側床面は地山の岩盤を掘り込んでいるため凸凹となる。規模は、長さ1.67m、幅0.77m、深さ0.24mを測る。遺物は埋土中から土器片と7~30cm程度の地山石を検出した。このうち地山石の一部は本土坑検出面より15cmも露出しており、土坑は本来もっと深かったものが次第に流失した事を示していると思われる。なお土坑の性格や時期などの詳細は不明である。

③SK-09 (第67図; PL47-3)

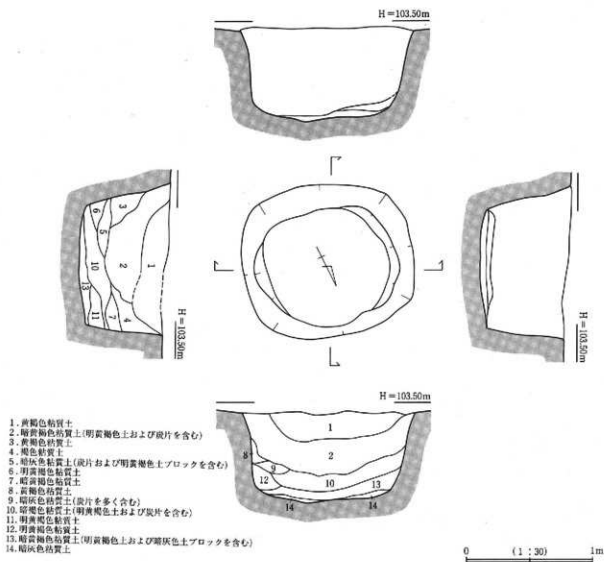
尾根上調査地北西部の平坦地A区内に位置し、42号墳周溝外縁の北西約1mに掘り込まれる。表土下の褐色シルト下から検出したもので、平面形はやや丸みを帯びた隅丸方形である。主軸はN-79°-W程度にとり、地山を掘り込む。断面は逆台形状である。規模は、長軸1.36m、端軸1.24m、深さ0.72mを測る。遺物は暗褐色粘質土(第10層)から炭塊と自然石1点が出土した。なお土坑の時期は検出面から、古墳より古い時期の可能性が考えられるが明確にはできず、またその性格についても不明である。



1. 灰黄褐色粘質土
2. 褐色粘質土(1~15cm人の地山礫(石)・ブロックを多く含む;しまっていない)

0 (1:20) 50cm

第66図 SK-08 実測図

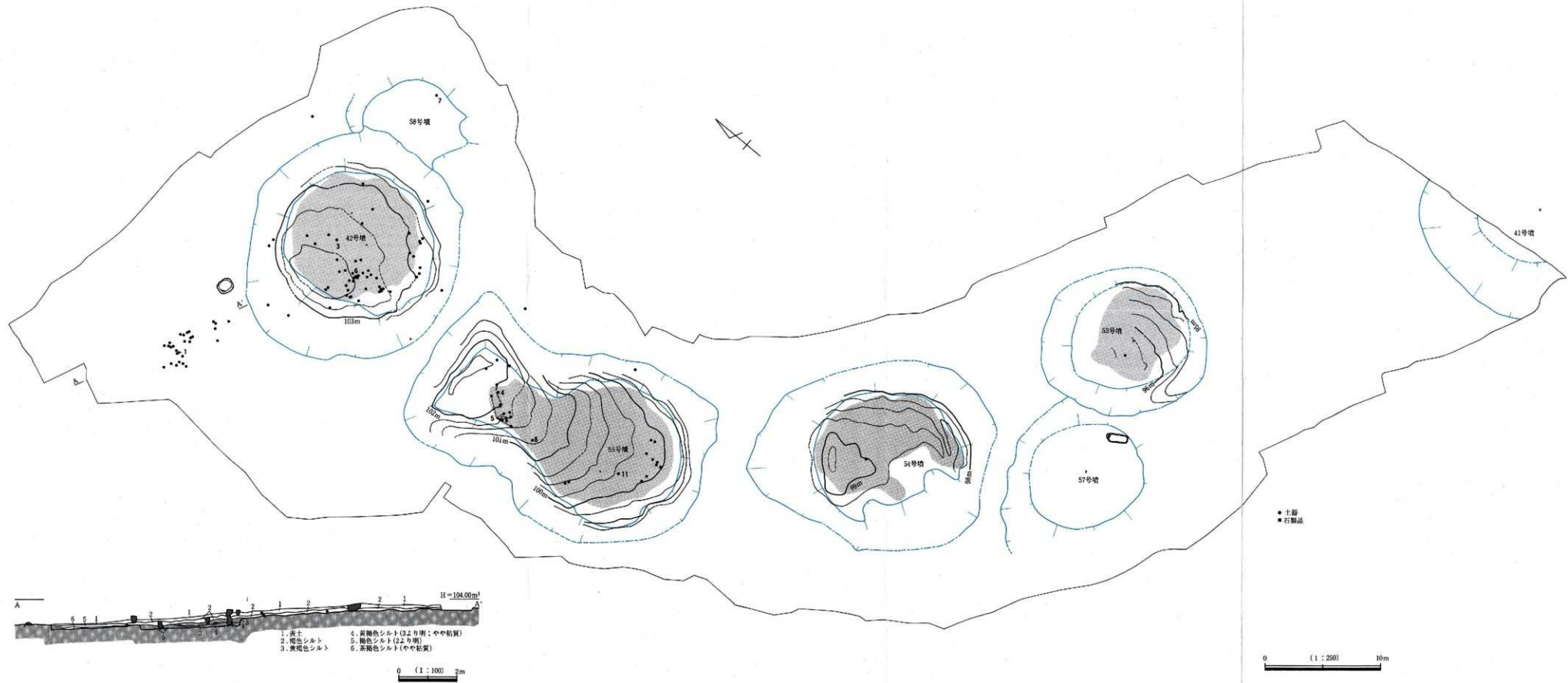


第67図 SK-09 実測図

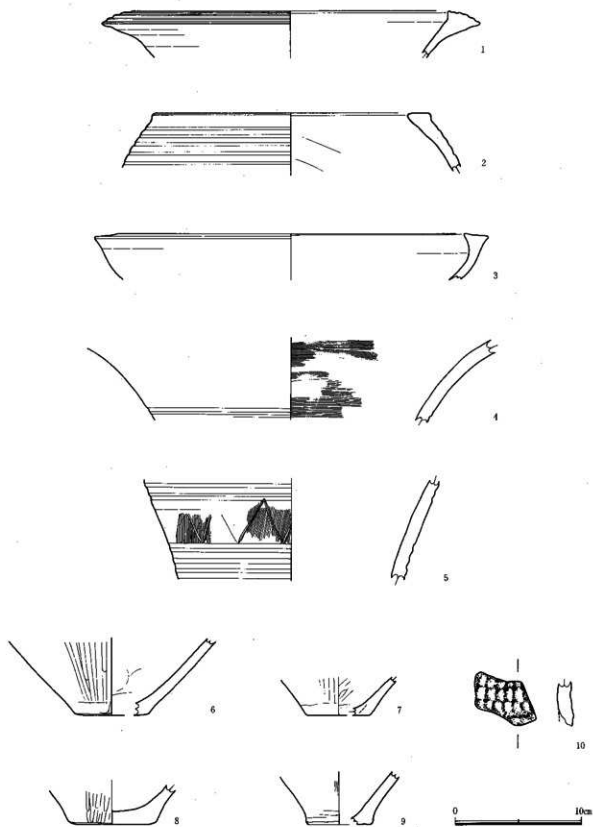
9) 古墳築造以前(第68~70図;PL47~49)

尾根上調査地内での各古墳の調査では、前述のとおり古墳時代以前の遺物が出土している。また本文中では相前後するが、事前の試掘調査で古墳地以外の平坦地(A区)からも土坑(SK-09)が検出されていた。このため今回の調査ではA区の調査のみならず各古墳とも可能な限り盛土除去を行って古墳築造以前の遺構の検出に努めた。その結果、遺構はSK-09以外には検出されなかったものの、A区では同土坑検出面の上から、また各古墳地からは古墳築造前の旧表土直下およびその付近から弥生土器や石器が比較的まとまって検出された。このことは古墳築造以前の何らかの生活面がこの尾根上に存在したものと考えられる。

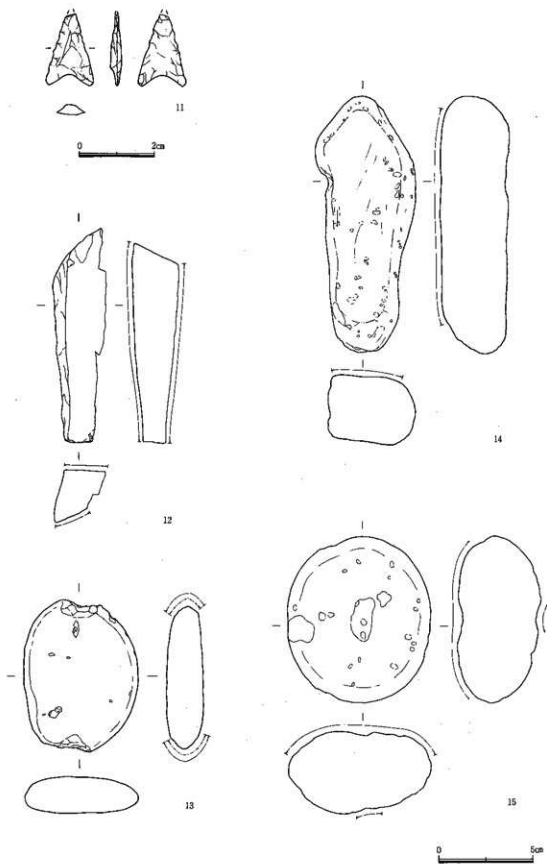
遺物の散布状況を見ると(第68図)、標高100~103m付近で尾根の最も広いA区から42、55号墳にかけて集中する傾向が認められる。この付近は丘陵中腹小尾根上の最高所で、その北東から南に開ける平野部を見晴らすことのできる位置にあたり、明瞭な遺構はさほど認められなかったものの、今後周辺の丘陵部上から同様の事例が見つかる可能性もあり注意が必要と思われる。なお、出土遺物のうち土器についてはいずれも風化が著しかったが、その中から石器も含めて比較的遺存状況の良かった15点を図化した(第69~70図-1~15)。出土位置は(2,13,15)がA区、(1,3,6,9,14)が42号墳直下および周溝埋土・流土中、(4,5,8,11)が55号墳直下、(7,10)が58号墳直下および流土中、(12)が53号墳直下である。



第68図 各古墳築造以前(盛土除去後)地形図及び遺物出土位置図



第69图 各古墳築造以前 出土遺物実測図(1)



第70図 各古墳築造以前 出土遺物実測図(2)

外反して口縁端部が肥厚し端面を成す(1)は端面に凹縁が施されるもので、口径が20.2cmと大型である。いわゆる無頸壺の(2)は口縁部を僅かに肥厚して上端部に面をもつもので上位外面には沈線が認められる。高杯(3)は比較的広く浅い杯部で、口縁端部に平坦面をもつ。(4,5)は口縁端部が遺存していないが、いずれも口縁部下位あるいは筒部に沈線をもち、(5)は沈線間に連続鋸歯文が施される。平底底部の(6~9)のうち、(9)は外面にハケ目痕が認められるが、他はヘラ磨き調整である。その他、指頭圧痕連続文の体部片(10)も認められる。また石器としては、石鎌、砥石、石錘、磨石が見られる。このうち石鎌(11)は凹基無頸の形態のもので、砥石(12)には二面に使用痕が残る。石錘(13)は扁平な長卵形の自然石の両端部を打ち欠いた結合部を持つものである。(14,15)にはそれぞれ一面に使用痕が認められるため磨石としたが、前者は棒状の自然石の一面に使用痕の認められるもので、後者はやや扁平な円礫の一面に使用痕の認められるほか両面中央部に凹みも見られることから凹石としても使用された可能性もある。

なおこれらの出土遺物から、尾根上調査地の各古墳築造以前には、弥生時代中期末から後期頃の生活面が存在したと思われる。

4. 平成13(2001)年度の調査

平成13年度の調査は、12年度尾根上調査区の南東側隣接尾根上に位置する。標高は89~94m程度である。12年度調査区の南東端部に位置する53号墳からは、その南東側には比較的緩やかな傾斜が続き、12年度調査の一支群とは別の支群を2基の古墳で形成する41・40号墳へと続く。現状では53号墳から41号墳の間には古墳の存在を示すものはなかったが、12年度の調査で古墳築造前の遺物が検出されていたことなどからこの緩傾斜地(B区)から境界の41号墳の一部までが調査対象となった。

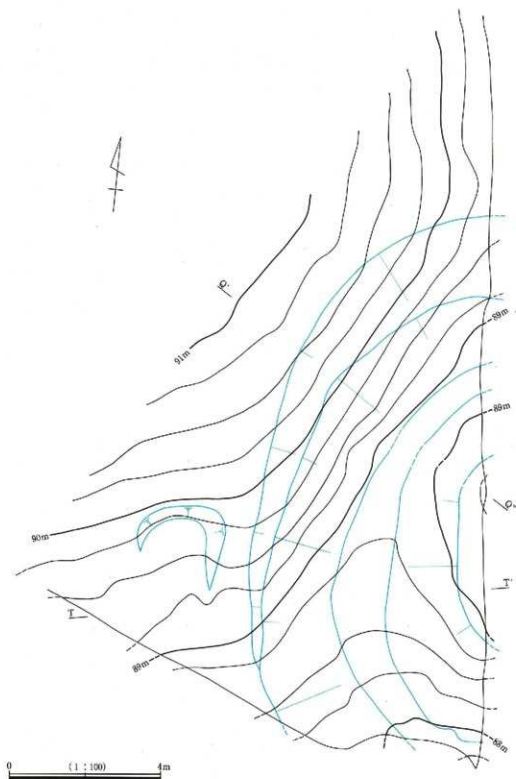
調査の結果、遺構として1基の古墳の周溝を検出したが、遺物は表土中から須恵器片が出土したに止まった。

1) 横枕41号墳(第71,72図;PL49,50)

位置と現状 横枕41号墳は丘陵尾根の小さな一分岐点付近に立地し、調査区南東端部の境界上に位置する。上述のとおり南東側調査地境界外に隣接する40号墳と2基で一支群を形成している。標高は87~89.5m程度で、周辺水田面からの比高差は70m弱である。調査前の遺存状況は、比較的良く形状を保っていると思われるが、墳頂部については何らかの流失あるいは削平のため部分的に外輪山状の高まりが見受けられた。ただ墳裾テラス部と見られる東側裾部からの高まりは明瞭で、その高さは約2.1mを測る。また尾根の高位側即ち古墳の北西側には尾根を横断する形に弧状のカットが明瞭に認められ、周溝が存在するものと思われた。

墳丘 墳丘は地山整形と盛土によって築造されている。このうち地山整形は、尾根の高位(北西)側を最大深1.5m程度カットするとともに最大幅5.5m程度の弧状の溝を掘り込んで墳丘部分を尾根から切り離している。また、他の部分についてはほとんどが調査区外となるが、調査した墳丘南側の一部と現地形の観察等から尾根高位側以外については、その裾部を地山カットするとともに墳裾テラス部を形成したものと考えられる。さらに地山ブロックの混入等から盛土と考えられる明赤褐色粘質土(第20層)の状況から、この溝と地山カットによって造り出された平面円形状区画の高位側を若干削ってならし、墳丘基底部としてその上に盛土を行なったものと考えられる。なお径は、現状で14m前後である。

埋葬施設等 今回の調査地内にはほとんど墳頂部はかかっていたが、地内の周溝底および墳丘肩部について平面精査を行なった。結果、今回の調査地内からは埋葬施設およびその他の遺構は検出されなかった。また41号墳の今回の調査地内からは遺物も出土せず、古墳築造の時期等詳細は不明である。

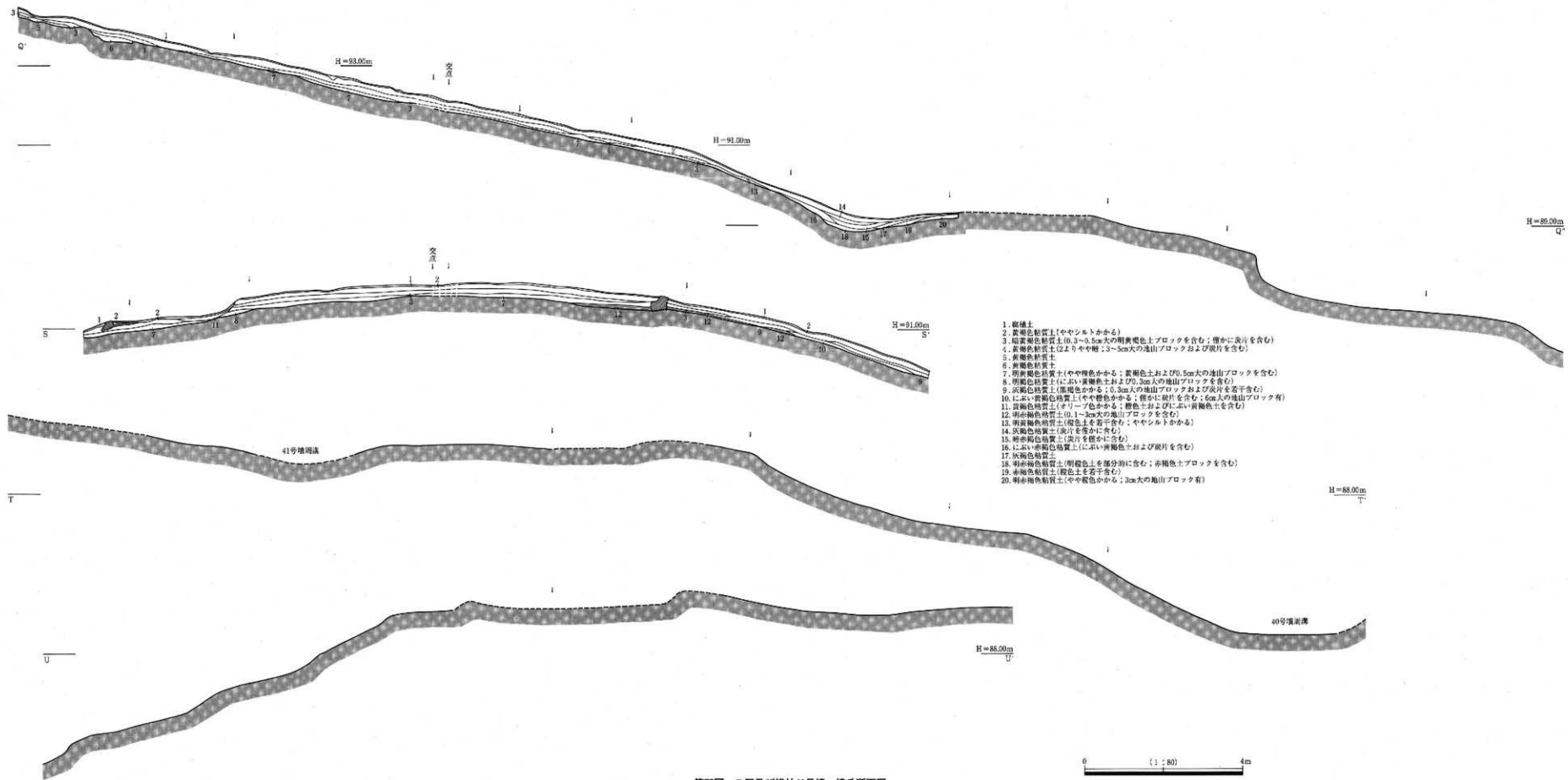


第71図 横枕41号墳 墳丘遺存図

2) B区(第72図; PL50, 51)

B区は丘陵尾根上で両側に比較的平地が続く間の緩傾斜地で、横枕古墳群の中では、12年度調査古墳の一支群と13年度一部調査の一支群に挟まれる位置にあたる。標高は90.5~94.5m前後である。

調査の結果、腐植土および表土である黄褐色粘質土(第2層)下に炭片を僅かに含む暗黄褐色粘質土(第3, 4層)あるいは灰褐色粘質土(第9層)、にぶい黄褐色粘質土(第10層)が認められるが、当該の遺構、遺物とも検出されなかった。なお表土中から須恵器片が出土したが、図化するには至らなかった。



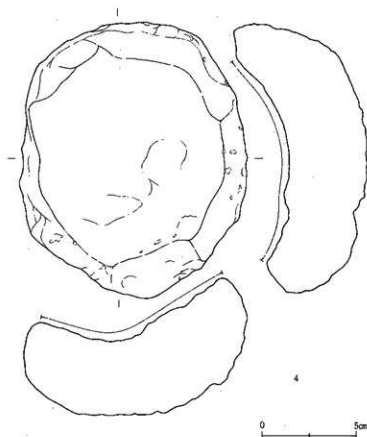
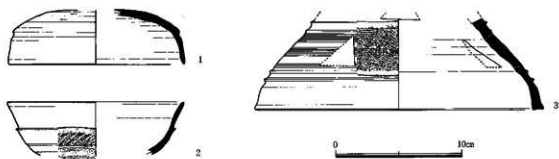
1. 腐植土
2. 黄褐色粘質土〔ヤヤシルトかかふる〕
3. 黄褐色粘質土(0.3~0.5m大の明褐色土ブロックを含む；骨かに焼片を含む)
4. 黄褐色粘質土(ヤヤシルトかかふる)〔0.3~0.5m大の地山ブロックおよび焼片を含む〕
5. 黄褐色粘質土
6. 黄褐色粘質土
7. 明褐色粘質土(ヤヤ褐色かかふる；黄褐色土および0.5m大の地山ブロックを含む)
8. 明褐色粘質土(に濃い黄褐色土および0.3m大の地山ブロックを含む)
9. 灰褐色粘質土(黄褐色かかふる)〔0.3m大の地山ブロックおよび焼片を含む〕
10. に濃い黄褐色粘質土(ヤヤ褐色かかふる；骨かに焼片を含む；6cm大の地山ブロック有)
11. 黄褐色粘質土(ヤヤシルトかかふる；骨色およびに濃い黄褐色土を含む)
12. 明褐色粘質土(0.1~0.3m大の地山ブロックを含む)
13. 明褐色粘質土(骨色土を若干含む；ヤヤシルトかかふる)
14. 灰褐色粘質土(焼片を若干含む)
15. 明褐色粘質土(焼片を若干含む)
16. に濃い黄褐色粘質土(に濃い黄褐色土および焼片を含む)
17. 灰褐色粘質土
18. 明褐色粘質土(明褐色土を部分的に含む；赤褐色土ブロックを含む)
19. 赤褐色粘質土(骨色土を若干含む)
20. 明褐色粘質土(ヤヤ褐色かかふる；3cm大の地山ブロック有)

第72図 B区及び横杖41号墳 墳丘断面図

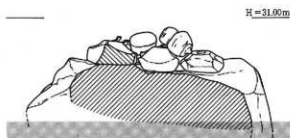
5. その他(第73~74図;PL51、52)

今回の3年間の調査のうち、古墳あるいはその他の遺構に伴うことが明確でなかった遺物が若干認められる。最後ではあるがここに遺構外遺物として図化(第73図-1~4)あるいは出土状況図(第74図)を示すこととする。

(1)は44号墳の東側墳堀外から出土した杯壺である。天井部と口縁部の境には、僅かにかつての稜の痕跡が認められるが、外傾する口縁端部は先細る。天井部外面にはヘラ削り調整が見られる。(2)は53号墳北東側墳堀外から出土した無蓋高杯の口縁部片である。外反する口縁部の稜の下位にはハケ状工具による波状文が認められ、底部外面にはヘラ削り調整が見られる。(3,4)は53、57号墳の南東側墳丘外即ちB区から出土した。このうち(3)はハの字状に外反する脚部である。凸線によって界された中にカキ目工具による波状文からなる文様帯が認められ、三角形の透し窓をもつ。また(4)は石皿で、自然礫の一面が使用痕とともに大きく凹んでいる。使用によるものと思われるが、あるいは元々一部に大きな凹みがあったこの礫を石皿として使用した可能性も考えられる。



第73図 遺構外出土遺物実測図



第74図 遺構外五輪塔出土状況図

ゆるい(6)に分けられる。また空風輪と接合する上面にはいずれもほぞ穴が加工されるが、水輪と接合する下面にはほぞ穴は認められない。長さは21.2~23.5cm、幅は20.1~23.3cm、高さは(6)が10.3cmと低いが、他は13.2~12.5cmで、ほぞ穴径は5.3~6.0cm、同深さは2.4~3.1cmである。空風輪3点はいずれも一体化したもので、風輪下面には火輪と組み合わせるほぞが作り出されている。形態としては3点とも空輪と風輪の作り分けが形骸化してきており、その境界に緩やかな段をもつ程度である。また横断面をみると、比較的楕円形状の(1)とやや角張って扁平な(2,3)に分けられるほか、空輪の上端突起をみると、形骸化しながらも突起のあるもの(1,2)とないもの(3)に分けられる。空輪の高さは8.1~10.1cm、幅13.0~13.7cmを測り、風輪の高さは6.9~8.1cm、幅12.1~14.3cmを測る。

なおここからは五輪塔のほかにも須恵器片も出土している。

IV おわりに

横枕古墳群は、中国山地を源とした鳥取平野の南西縁辺部に面する丘陵端部に形成され、横枕集落の北から東に位置する。その数は現在79基を数えいまだ増加中であるが、それぞれの丘陵および独立丘陵尾根上に1基から10数基で支群を形成するとともに丘陵裾にも横穴式石室を主体とする古墳が形成されている。今回の調査は、古墳群のうち最北部で東西方向に延びる尾根上に形成された3支群上の10基と丘陵裾の横穴式石室を主体とする1基の計11基の古墳が対象となった。この周辺ではこれまで古墳や中世城館の存在は知られていたものの、本格的な発掘調査が行われたことはなく、近年になって今回の調査の起因となった浄水施設整備や道路整備に伴う調査が行われることとなった。調査の結果、弥生時代中期~後期の遺物や古墳時代後期の古墳・土坑、遺物等が検出され、周辺地域での初めての発掘調査の一つとなったが、現地調査中および整理作業中に気付いたいくつかの点を挙げることでまとめにかえたい。

第74図は56号墳石室の南東側隣接地から出土した組合せ式五輪塔の検出状況図である。前述のとおり周辺はちょうど丘陵裾から平野部への変換点付近に当たり、前面には農用地の造成がなされている。この造成時に56号墳の石材の一部が原位置を失って移動していった可能性も考えられるが、長さ1.5m、幅0.8m、厚さ0.6m程度の石材の平らな面を上にしてその上に五輪塔が置かれている。おそらく周辺にあったものがまとめられたものと思われる。その部位は、地輪は無く、水輪1、火輪3、空風輪3である。

このうち水輪(7;写真図版参照)はややつぶれた球形の天地を平坦にカットした形態をとるが、一平坦面は中心から片側へずれており、長さ22.3cm、幅19.6cm、高さ14.4cmを測る。火輪は3点ともやや扁平で上面から四隅へ向けて稜を成して下がるが、底面が平らで四隅が反り上がるもの(4,6)と、底面中心から四隅へ向かって反り上がるもの(5)とがある。さらに四隅についてもその反りのきつい(4)、ややきつい(5)、

弥生時代の遺物の出土について

まず今回の調査地の中で標高100m程度の丘陵上から弥生土器が検出されたことに注目したい。調査では明瞭に当該時期と判断される遺構は伴っていないが、調査地内の一角にある程度集中して遺物が出土していることは少なくともそこで何らかの行為が行われたことを示唆するものと思われる。これまで鳥取市内の丘陵上では古墳の調査時に狭い範囲ではあるが弥生時代中期や後期頃の住居跡等がいくつか検出されている。例えば本丘陵の最北東端部に位置する古海古墳群や釣山古墳群、さらに本古墳群の千代川を挟んで対岸の丘陵上に形成されている美和古墳群等がそれぞれにあたる。また、隣接する下味野古墳群からも遺構は検出していないものの丘陵上から弥生土器の出土をみるなど、少ないながら丘陵上から当該期の遺構・遺物の検出がなされている。このことは鳥取市周辺でも丘陵上に弥生時代の遺跡が存在することを示唆している。ただこれまでは古墳の調査の方に主眼がおかれ、その下あるいは周辺から検出される当該期の遺構・遺物への注意が不足していた感がある。今後はこれらの断片的な資料を集め、周辺地域における丘陵上の当該期の遺跡についても問題意識を持って丁寧に検討していかなければならない。

横枕古墳群の形成について

横枕古墳群はまずその立地する地形から東側の独立丘陵上に立地する一群(A群)と西側丘陵上に立地する一群(B群)、さらにその丘陵裾に立地する一群(C群)の3群に大別できる。このうちA群とB群についてはそれぞれの小尾根上で1基から10数基のまとまりをもつと考えられ、暫定的ながらそれぞれ5つずつ程度の支群に分けられる。上述のとおりこれまで横枕古墳群で発掘調査は行われておらず今回の調査が最初のものとなったが、これと相前後して実施され現在整理されつつある別の調査の成果も参考にしながら各支群の時期・墳形・規模・埋葬施設などの特色について予察的概観を行うと、まず本古墳群の中で最大の前方後円墳である13号墳(全長70m)を含むA群の各支群の尾根上に方形墳・円墳を主とした前期後半代の古墳が形成される。そしてそれらの丘陵のやや下がったあたりに中期末から後期の古墳が継続して造営される。次いでB群の支群の中で一部A群と並行するかも知れないが、低位に立地する支群(42、53～55、57、58号墳等)に小型の前方後円墳や円墳で構成される後期の古墳が造営され、さらにその高位側の支群(43、44、52号墳等)にやや遅れて同時期の円墳が造営される。そして最終的にC群(56号墳等)に終末期の古墳が造営されているのではなかろうか。規模的にはA群の前方後円墳(13号墳)以外は現在見る限りいずれも10～20m程度の小型のものであるが、埋葬施設には、現在のところA群の尾根上は主として木棺直葬、その下に木棺直葬・直葬した土壙・箱式石棺があり、B群に直葬した土壙・箱式石棺・横穴式石室が、C群に横穴式石室が認められる。また古墳の築造方法について見ると、A群尾根上の方形墳のように主として地山整形で墳丘を造り出して封土的な盛土を施すものと、地山整形と厚い盛土併用のものがある。ただしこれらの概観はあくまでも現段階での予察的なもので、今後の調査報告で修正、変更、加筆の必要があろう。

埋葬施設について

今回調査した古墳の埋葬施設には木棺直葬、箱式石棺、直葬した土壙、横穴式石室の別がある。このうち53号墳の土壙と44号墳の横穴式石室について若干触れたい。

①53号墳の埋葬施設

53号墳の埋葬施設は墳頂部のほぼ中央部から検出したものである。本文中でも触れたとおり埋土状況を見る限り平面的にも断面的にも木棺等の納められた痕跡は認められず、墓壇床面付近からの遺物の出土もなく、さりとて位置的にも埋葬施設であることの否定もできず直葬した土壙としたものである。ただ一般の土壙墓と異なる点としてその上部に組合せ式の石棺を意識したとも言うべき規則的に並べられた地山石の配置が認められることが挙げられる。本文中では墓壇内に遺体を埋葬した後これらの地山石を配したものとしたが、あるいはこの地山石の上に遺体が安置されたものの可能性も考えられる。ただ

これらの地山石を石棺を意識しているとはいえ墓標的な意味をもつものと解すると、上述のA群で別に調査された26号墳の埋葬施設に類例を見ることが出来る(別報告)。すなわち26号墳のものは墓壇中央部直上に両端に1石を置き、その間にながや膨らみ加減に2列8対の河原石を配している。墓壇内には転用枕とみられる高杯等も見られ、それからしてこれらの河原石はそれ自体が石棺や床面として機能したのではなく、墓標的な意味合いをもつものと解される。とすると時期的には26号墳のものが先行しているが、その埋葬形態がやや変化しながらも上述のB群に受け継がれた可能性も考えられ、今後の周辺地域での類例の増加に期待するとともに、他地域の類例についても資料の検討が必要である。

②44号墳の横穴式石室

44号墳の横穴式石室については、その特徴を改めて考えてみると、片袖式の長方形プランで、玄室の壁体にはそれほど大型の石ではないものの最下部に他に比して大きな石材を使用している。玄門部には立柱石状の割石が立てられるが、それはあくまでも壁体中に組み込まれたもので内側にせり出すものではない。羨道部は3~5個の石を並べて側壁を意識してはいるもの但实际上に壁体を構成する部分は1石分の40~50cm程度に過ぎない。また玄室床面は椀石を挟んで羨道床面より30cm程低くなっている。閉塞は板石を用いずに入頭大の石を積み上げて行っている等の特徴があげられる。これらの特徴の一部は北九州の石室の特徴に類似していると思われるが、別の部分には、畿内の石室の特徴に類似していると思われる点も認められる。

ところで鳥取市内ではその中央部を流れる千代川左岸では横穴式石室の調査事例は少なく、今回の調査は貴重な資料を提供することとなった。しかしながら44号墳のような石室はこれまで因幡地方で普及しているとされる石室のうち、玄室の各壁を一枚石で構成するとともに天井も扁平な石を架構するいわゆる阿古山タイプではない。また、玄室の天井部中央が高くなるいわゆる中高式天井のタイプでもないと思われる。とすると、このような古墳が横枕周辺独自のものか、北九州あるいは畿内のいずれかの地域の系譜をひくものか、もしいずれかの系譜によるものとしてもそれは直接的なものかあるいは二次的なものかなど問題意識をもちながら資料の蓄積を重ね、さらに古墳以外の面からも地域間交流等について慎重に検討していかなければならない。

【参考文献】

近藤時太郎「横枕記」

萩本 勝「大法3号墳(三塚/谷古墳)発掘調査報告書」東伯町教育委員会 1979年

植野浩三「三保遺跡発掘調査報告書」東伯町教育委員会 1981年

【上種西古墳群発掘調査報告】大栄町教育委員会 1984年

小原貴樹・下高瑞哉 他「石州府古墳群発掘調査報告書」米子市教育委員会・石州府古墳群調査団 1989年

柳沢一男「横穴式石室からみた地域間動向-近畿と九州」(『横穴式石室を考える-近畿の横穴式石室とその系譜』

帝塚山考古学研究所) 1990年

山田真宏・平川誠「釣山古墳群発掘調査概報-釣山22・23・24号墳の調査-」鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991年

土生田純之「横穴式の埋葬施設」『古墳時代の研究7古墳Ⅰ墳丘と内部構造』雄山閣 1992年

西浦日出夫・小谷修一「古海古墳群-葛瀬遺跡」(財)鳥取市教育福祉振興会 1993年

柳沢一男「横穴式石室の導入と系譜」『季刊 考古学第45号』雄山閣 1993年

山田真宏「美和古墳群発掘調査報告書-美和31・32・33・34・37・43・44号墳の調査-」(財)鳥取市教育福祉振興会 1994年

下高瑞哉「因幡の横穴式石室」(第24回山陰考古学研究会集「山陰の横穴式石室-地域性と編年の再検討-」)

山陰考古学研究会 1996年

牧本哲雄「伯耆東部の横穴式石室」(第24回山陰考古学研究会集「山陰の横穴式石室-地域性と編年の再検討-」)

山陰考古学研究会 1996年

中浜久喜「播磨における横穴式石室の構造と変遷」(第2回播磨考古学研究会集資料集「横穴式石室からみた播磨」)

播磨考古学研究会実行委員会 2001年

第2表 横枕古墳群調査古墳一覧

名称	墳丘 形状・規模 (m)	主体部・土境(北)名等	埋葬方法	墓 塚 形 状			棺 槨 形 状	遺 物	備 考	
				平面形状	長さ×幅×深さ(m)	主軸				
横枕 41 号墳	円墳 径 14前後 高さ 2.1 (東側墳裾から)	未調査	-	-	-	-	-	-	H13年度一部調査	
横枕 42 号墳	円墳 径 16.75 (北西～南東間) 高さ 2.88 (北側墳裾から)	-	-	-	-	-	-	須:炭 有蓋高杯 器内 弥生土器片 石;磨石	H12年度調査	
横枕 43 号墳	円墳 径 約14.8 (東～西間) 高さ 3.1 (南側墳裾から)	第1主体部	木輪直葬	隅丸長方形	4.50×1.97×0.98	N-8.5°-W	2.95×0.60×-	須:杯蓋 杯身 白玉	須:炭 鉄 鉄 鉄	弥生1器 軽明化 墓塚に上共成跡 H11年度調査
横枕 44 号墳	円墳 径 約14.8 (東～西間) 高さ 3.2 (北東側墳裾から) 2.25 (北西側墳裾から) 1.12 (南西側墳裾から)	第1主体部	横穴式 石室	左片軸式	(支室内法) 3.15×1.9×(0.85)	N-55°-E	-	須:杯蓋 杯身 有蓋高杯 無蓋高杯 器 鏡板, 珠, 鉄; 人刀, 刀子 鉄, 鉄鏡 鉄斧	須:杯蓋 器 土; 鏡	天井石なし 腰石遺存 玄室は羨道より 一段低い H11年度調査
横枕 52 号墳	不明 高さ 1.65 (北東側墳裾から)	-	-	-	-	-	-	-	須:片 石; 砥石	H11年度調査
横枕 53 号墳	円墳 径 約11.49 (北西～南東間) 約10.52 (北東～南西間) 高さ 2.34 (北東側墳裾から)	第1主体部	直葬	隅丸長方形	2.48×0.76×0.39	N-24°-E	-	須:炭	弥生土器片	石付の配量 H12年度調査
横枕 54 号墳	円墳 径 約15.3 (北西～南東間) 高さ 2.52 (北東側墳裾から) 1.2 (北西側墳裾から)	-	-	-	-	-	-	-	須:器部片 杯 弥生土器片	H12年度調査
横枕 55 号墳	前方後円墳 全長 23.2 前方部径 9.9 後円部径 15.2 前方部高さ 1.34 (金剛墳裾から) 後円部高さ 2.8 (南側墳裾から)	-	-	-	-	-	-	-	須:杯身 器 弥生土器片 石鏡	墳丘の主軸は N-12°-W H12年度調査
横枕 56 号墳	円墳 径 約10m強 高さ 1.67 (墳丘基部間から)	第1主体部	横穴式 石室	-	-	N-62°-W もしくは N-28°-E	-	-	須:片	腰石3石遺存 H12年度調査
横枕 57 号墳	円墳 径 約10.93 (北西～南東間) 高さ 1.22 (北東側墳裾から) 0.55 (北西側墳裾から)	-	-	-	-	-	-	-	弥生土器片	ほとんどの器土 喪失 53号墳の周縁を 切る H12年度調査
横枕 58 号墳	不明 径 約10.0 高さ 1.3 (東側墳裾から)	第1主体部	横穴式	隅丸長方形	1.1×0.7×0.28	N-5.5°-W	0.75×(0.3)×(0.22)	-	須:片 弥生土器片	石物炭石, 銅板石 の一部喪失 H12年度調査

第3表 その他の遺構調査一覧

名称	平面形	断面形	規模 長軸×短軸×高さ 長さ×幅×深さ(m)	主 軸	遺 物	備 考
SK-01	不定形		2.65×2.15×0.73	N-69°-E	須;片 石	44号墳北西側部 築石 Ⅱ1年度調査
SK-02	不定形		2.90×1.10×0.53	N-81°-E	-	44号墳北側部 Ⅱ1年度調査
SK-03	不定楕円形		2.60×1.47×0.78	N-53°-W	須;鏡板	44号墳北側部 Ⅱ1年度調査
SK-04	隅丸長方形		2.91×1.50×0.58 (テラス部含むと 4.10×2.57×1.08)	墓 塚 N-36°-W テラス部 N-38° W	須;甕埴(土壇内、テラス部) 有蓋高杯(土壇内)	木棺厚の土塚墓 棺横(長さ×幅×高さ(m)) 2.0×0.4×0.3 Ⅱ1年度調査
SK-05	不定形		1.44×1.10×0.77	N-32°-W	-	43号墳北東側斜面 Ⅱ1年度調査
SK-06	不定長楕円形		2.75×1.53×0.93	N-72°-E	-	43号墳北側部 Ⅱ1年度調査
SK-07	長楕円形		2.06×0.74×0.63	N-50°-W	土;鏡片	56号墳の北縁周溝を切る Ⅱ2年度調査
SK-08	隅丸長方形		1.67×0.77×0.24	N-35°-W	土;鏡片	57号墳遺存墳丘地上 Ⅱ2年度調査
SK-09	隅丸方形	逆台形状	1.36×1.24×0.72	N-79°-W	岩塊、土器細片、炭片	42号墳の北西側 Ⅱ2年度調査
P-01	円		0.71×0.67×0.27	-	-	43号墳北東側斜面 Ⅱ1年度調査
P-02	円		0.36×0.36×0.34	-	-	43号墳北東側斜面 Ⅱ1年度調査
P-03	やや不定円		0.32×0.30×0.36	-	-	43号墳北東側斜面 Ⅱ1年度調査
P-04	やや楕円形		0.36×0.28×0.27	-	-	43号墳北東側斜面 P-05を切る Ⅱ1年度調査
P-05	やや不定円		(0.39)×0.35×0.16	-	-	43号墳北東側斜面 P-04に切られる Ⅱ1年度調査

今回の調査で、これまで明確には知られていなかった横枕古墳群の古墳について多くの成果を得ることができた。しかしながらそれらは本古墳群の一部で、なおかつ大きく流失あるいは削平により全容の解明ができなかった点も多々ある。特に一支群内では盟主的な位置にあるとみられる42号墳や小型ながらも前方後円墳である55号墳の埋葬主体が流失しておりその全容の解明が不可能であったことは大変残念であった。ただ丘陵上の弥生時代の遺跡の問題(A区)、横穴式石室の系譜の問題(44号墳)、群集墳中の小型前方後円墳の問題(55号墳)、墳丘下に埋没した築造時の溝などの問題(54号墳)、群集墳中の古墳等に関する諸問題を再検討する契機となりうる調査であったことも事実である。横枕古墳群の調査はその緒についたばかりであるが、今後の調査に期待するとともに諸問題の解明に向けて一步一步努力していきたい。

なお言葉足らずの報告ではあったが、諸兄の皆様のご指導、ご指摘を頂ければ幸いである。

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号 遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器種 須恵器は形態的特徴から、蓋杯・杯蓋・高杯・壺・甌・提瓶等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は()で表示。鉄製品は形態、使用痕等の観察から、鉄刀・鉈・刀子・鉄鎌・鉄斧の名称を用いた。石製品は形態、使用痕等の観察から、砥石・石錘・磨石等の名称を用いた。

法量 土器……口径：① 底径：② 最大胴径：③ 器高：④をcmで示す。なお、()は復元値。〈 〉は推定値。ただし目安としての径の残存が7分の1以下を推定値とした。
石製品・鉄製品……長さ：L 幅：W 厚さ：Tをcmで示す。()は現存値。

形態・手法の特徴 主要部分について記述した。土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

- ① 胎土 砂粒の大きさとその量を示す。
- ② 焼成 良好(堅緻)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。
- ③ 色調 主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(外)・(内)で表示。

備考 釉、朱付着、土器歪の有無等を記載。鉄・石製品は重量を記載。()は現存値。

遺物登録番号 出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

—遺物実測図中における表示—

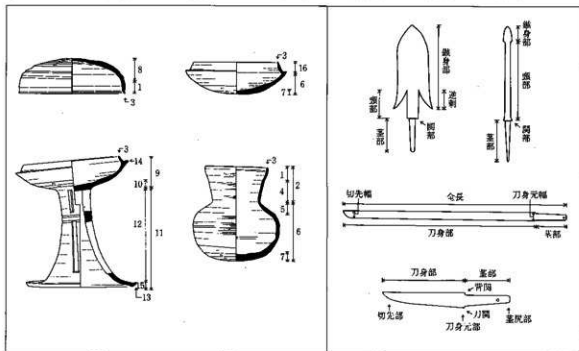
須恵器：黒塗り

土器実測図のヨコナデ調整による稜： 遺物使用痕範囲：

石製品実測図磨滅範囲： 石製品実測図加工痕範囲：

—土器の部分名称について— 部位名称を略す場合は頭文字を()で表示。

- 1：口縁部 2：口頸部 3：口縁部 4：頸部 5：肩部 6：体部 7：底部 8：天井部
- 9：杯部 10：杯底部 11：脚(台)部 12：脚柱部 13：脚端部 14：受部 15：裾部 16：立上り



土器・鉄製品細部名称図

横枕43号墳 (第4図 P L5)

序 号	部 種	寸 法 (mm) ①口 径 ②底 径 ③最大 深 ④部 高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎 土 ②焼 成 ③色 調	発 見 状 況	備 考	遺 物 登 録 号
1	壙	③ 14.1	口縁肩部欠失。 体部は中上位に最大胴径をもつ。	(内)外ヨコナデ。 (外)口縁部丁寧なヨコナデ。体部上半重畳したカキ目後部ヨコナデ。ト平叩き目後一部不定方向のヘウ割り、後部直ナデ。 (内)胴部ナデ。底部ナデ。指ナデ。	①2~3mm前後の砂粒を含む ②5~6mm大の砂礫有 ③良 ④(内)灰色	口縁肩部欠	3
2	蓋杯 杯底	① 14.1 ④ 4.7	天井部は丸い。 天井部から内湾して下り口縁部は肩部でつまみ、内湾する凹面をもつ。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部2/3時計回りのヘウ割り。 (内)天井部凹面工具痕を不定方向のナデ消し。	①2mm以下の砂粒を含む 3~5mm大の砂礫有 ③良 ④(内)灰白色	完存	自然納 7
3	蓋杯 杯身	① 12.4 (変)14.45 ④ 4.95	立上りは内湾し肩部は筒をもつ。 受部は体部から伸びて外上方に壁く納める。	(内)外ヨコナデ。 (外)体部3/4逆時計回りのヘウ割り。 (内)底部不定方向のナデ。後部凹するナデ。	①2mm前後の砂粒を多く含む ②5~6mm大の砂礫有 ③良 ④(内)灰色 (内)淡灰色	完存	自然納 8

横枕44号墳 (第16図 P L12)

1	土師器 埴		口縁肩部欠失。 風化腐蝕不明瞭。 (内)外ヨコナデ。 (外)口縁部同向する工具痕。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②2~3mmの砂粒有 ③やや不真 ④(外)黄褐色 淡黄褐色 (内)黄褐色 濃褐色	(口)1/4 (底)2/3	125	
2	蓋杯 杯底	①(13.05) ④ 4.7	天井部は丸い。 天井部から内湾して下り口縁部で先細る。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部逆時計回りのヘウ割り。中心にヘウ起し痕。	(内)1/5 (天)光帯	103 116	
3	壙	① 10.4 ② 10.1 ③ 15.3 ④ 20.05	外反する上腹部は肩部で僅かに肥厚、丸く納める。 体部1/3上位に最大胴径をもつ。体部中位にヘウ記号?	(内)外ヨコナデ。 (外)体部全口径後下半ナデ。底部ナデ、工具ナデ。 (内)胴部縦横圧痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②3mmの砂粒有 ③良 ④(内)灰色	1/2 暗緑色 自然納	1 2 6 85 104 110 111 114 117 120 121

横枕44号墳 石室内 (第18~21図 P L12~17)

4	蓋杯 杯底	① 14.75 ④ 4.5	丸い天井部から内湾して下り口縁部で内湾する段をもつ。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部逆時計回りのヘウ割り。 (内)天井部凹面工具痕。口縁部1条の沈線、後部内外面ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②2mmの砂粒有 ③良 ④(内)灰色	完存	内面朱 多く付着	28
5	蓋杯 杯底	① 13.6 ④ 3.8	大弁部直。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部ヘウ切り後ナデ、外周をカキ目。後時計回りのヘウ割りを1/2回転。 (内)天井部同転するナデ。口縁部1条の沈線、後部内外面ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②5mm大の砂礫有 ③良好 ④(内)灰色 (外)淡黄褐色	完存	内面朱 朱付着 施塗み	25
6	蓋杯 杯底	① 14.1 ④ 3.0	平坦な天井部から内湾して下り、肩部は丸く納める。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部同転ヘウ切り、後外周逆時計回りのヘウ割りを1回転。 (内)天井部凹面工具痕を同転するナデ消し。	①1mm以下の砂粒を多く含む ③良好 ④(内)暗灰色 (内)淡黄褐色	完存	黒色の苔 解物成出	30
7	蓋杯 杯底	① 14.4 ④ 3.6	平坦な天井部から内湾して下る。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部逆時計回りのヘウ割り。口縁部肩部状上真により調整。 (内)天井部不定方向のナデ。凹面工具痕。	①1~2mmの砂粒を多く含む ③良好 ④(内)灰色	ほぼ完存		37
8	蓋杯 杯底	① 11.6 ④ 3.6	丸い天井部から内湾して口縁部で真下に下り、肩部は丸く納める。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部逆時計回りのヘウ割り。中心にヘウ起し痕。 (内)口縁部1条の沈線後ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②2mmの砂粒有 ③良好 ④(内)灰色	完存	全面に 朱付着	48
9	蓋杯 杯底	① 13.6 ④ 4.6	多弁部形。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部同転ヘウ切り、後外周をヨコナデ。中心にヘウ起し痕。 (内)天井部不定方向のナデ、後同転するナデ。	①1mm以下の砂粒を含む 2mmの砂粒有 ③良好 ④(内)灰色	完存	内面朱 朱付着 施塗み	22
10	蓋杯 杯底	①(14.0) ④ 4.5		(内)外ヨコナデ。 (外)天井部同転ヘウ切り後ナデ。 (内)天井部同転ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ③不良 ④(内)淡灰色	(口)1/3 (天)完存		15
11	蓋杯 杯底	①(14.4) ④ 5.3	天井部から内湾して下り、口縁部で真下に内湾、肩部は丸く納める。	(内)外ヨコナデ。 (外)天井部同転ヘウ切り後下半ナデ。中心にヘウ起し痕。 (内)天井部同転ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ③不良 ④(内)淡灰色	(口)1/5 (天)完存		39
12	蓋杯 杯底		口縁肩部欠失。 風化腐蝕不明瞭。 (内)外ヨコナデ。 (外)風化腐蝕不明瞭。中心にヘウ起し痕。 (内)天井部同転ナデ。工具痕を残す。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②不良 ③(外)淡褐色 (内)褐色	(口)2/3 (天)ほぼ完存			8
13	蓋杯 杯底		天井部から内湾して下り、口縁部で真下に内湾、肩部は丸く納める。 (内)外ヨコナデ。天井部同転ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②不良 ③(外)淡褐色色 淡灰色 (内)淡褐色 淡灰色	(口)1/2 (天)ほぼ完存	内面 朱付着	47	

押印番号	型 種	法量 (cm) ①口 径 ②底 径 ③最大断径 ④断 点	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎 土 ② 漿 成 ③ 色 調	残存状況	備 考	遺物 整理 番号
14	蓋杯 杯蓋	①14.7 ②(×)4.45	口縁部欠失。 (内)外ヨコナデ。 (外)天舟部回転ヘラ切り後ナデ。 (内)大舟部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②不良 ③(内)淡灰色	口縁部欠失 (欠)完存		16
15	蓋杯 杯蓋	① 13.8 ② 3.9	天舟部から内側して下る口 縁部は滑らかに磨ける。 (内)外ヨコナデ。 (外)天舟部ヘラ切り未調整。 (内)天舟部削いたナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②良好 ③(内)灰色	完存	褐色磨削 物残出	42
16	蓋杯 杯蓋	① 12.4 (欠)15.1 ② 5.4	底部は丸い。 立上りは内傾し縁部は丸い。 受部は体部から伸びて外上 方に納める。 (内)外ヨコナデ。 (外)体部1/2を逆時計回りのヘラ削り。中心にヘラ 起し度。 (内)底部中央文工具痕を回転によるナゲ削し。	①1～2mmの砂粒を含む 5mm 大の砂粒有 ②良好 ③(外)受部部～体部上半 灰色 下半 淡灰色 (内)灰色	完存	セツト焼	27 94
17	蓋杯 杯蓋	① 11.4 (欠)14.1 ② 4.4	扁平な器形。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部ナデ。後述時計回りのヘラ削り。中心にヘラ 起し度。 (内)底部中央文工具痕を回転によるナゲ削し。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)暗灰色 (内)灰色	完存		38
18	蓋杯 杯蓋	① 11.6 (欠)14.0 ② 3.8	扁平な器形。 立上りは内傾し縁部は丸い。 受部は体部から伸びて外上 方に鋭く納める。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部ナデ。後述時計回りのヘラ削り。中心にヘラ 起し度。 (内)底部中央文工具痕を回転によるナゲ削し。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③(外)暗灰色 (内)灰色	ほぼ完存	セツト焼 自然焼	32
19	蓋杯 杯蓋	① 12.4 (欠)14.5 ② 4.45	立上りは短く内傾し縁部は 丸い。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部回転ヘラ切り、後傾かなナデ。中心にヘラ起 し度。 (内)底部削いたナデ。成形時の磨削痕。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)灰色	ほぼ完存		31
20	蓋杯 杯蓋	① 11.7 (欠)14.0 ② 4.3	立上りは短く内傾し縁部は 丸い。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部回転ヘラ切り、後傾いたナデ。中心にヘラ起 し度。 (内)底部削いた文工具痕を回転によるナゲ削し。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(内)灰色	ほぼ完存	全体歪	24
21	蓋杯 杯蓋	① 11.3 (欠)13.7 ② 4.1	立上りは短く内傾し縁部は丸い。 底部は平坦。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部ヘラ起し後傾かなナデ。中心にヘラ起し度。 (内)底部削いた文工具痕を削いた回転によるナゲ削し。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(内)灰色	ほぼ完存		29 81
22	蓋杯 杯蓋	①14.6 (欠)17.1	(外)断面不明。 底部回転ヘラ切り後ナデ。中心にヘラ起し度。 (内)底部回転ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③(内)淡灰色	口縁部欠失 (口)1/4 (欠)		13 73
23	蓋杯 杯蓋	(欠)15.7	受部は体部から伸びて水平 に納める。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部回転ヘラ切り後ナデ。 (内)底部回転ナデ。	①1～2mmの砂粒を含む ②やや不良 ③(内)淡灰色	(口)1/3 (欠)		14
24	蓋杯 杯蓋	(欠)15.7	(外)断面不明。ヨコナデ。 (外)底部回転ヘラ切り後ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②不良 ③(内)淡灰色	(内)1/14 (欠)完存		46
25	有蓋高杯	① 14.4 (欠)16.8 ② 14.3 ③ 17.7	立上りは内傾し縁部は丸い。 受部は体部から伸びて、外 上方に鋭く納める。 脚部は前後でラッパ状に開 く。脚柱部に2象の紋線で 上下を導き長方形の通し 窓を2段、3方向に穿孔。 (27)は杯部外面にヘラ先工 具によるヘラ記号を施す。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部ヘラ削り後カキ口。後傾いたヨコナデ。 接合部ヨコナデ。 (内)底部削いた文工具痕。圧痕をナゲ削す。 脚部 (内)外ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③杯部 (外)暗灰色 灰色 (内) 灰色 脚部 (内)暗灰色 灰色	ほぼ完存	杯部欠く	21
26	有蓋高杯	① 13.6 (欠)15.9 ② 14.1 ③ 16.2	杯部 (内)外ヨコナデ。 (外)底部ヘラ削り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部中央文工具痕。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (内)上半部丸い。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(内)灰色	ほぼ完存	杯部欠く	12 92
27	有蓋高杯	① 13.2 (欠)15.3 ② 13.0 ③ 17.8	杯部 (内)外ヨコナデ。 (外)底部ヘラ削り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部中央文工具痕。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (内)上半部丸い。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2～3mmの砂粒有 5mm大の砂 粒有 ②良 ③灰色	ほぼ完存	脚部(内) 帯付磨 底面歪 ヘラ記号	18 19 79 91
28	有蓋高杯	① 12.8 (欠)15.0 ② 13.7 ③ 16.9	杯部 (内)外ヨコナデ。 (外)底部ヘラ削り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部中央文工具痕。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (内)上半部丸い。	①1mm前後の砂粒を多く含む 4～5mm大の砂粒有 ②良 ③(内)灰色	ほぼ完存		18 26 75
29	高杯	① 15.8 ② 12.2 ③ 17.0	杯部は鋭い縁をもつ口縁 部へと外反して立上り、踵 部は丸い。 脚部はラッパ状に開き縁部 で厚い。踵部は外方に僅か に通し窓を2方向に外から穿 つ。上段の穿し切り込み は貫通しない。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部回転ヘラ削り、後傾いたナデ。後接合 部ヨコナデ。 (内)底部回転ナデ。円底文工具痕部に残る 脚部 (内)外ヨコナデ。 (外)脚柱部をナゲ。通し窓部削いたナデ。 (内)上段成形時の擦れ痕。一部工痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2～3mmの砂粒有 9mm大の砂 粒有 ②良 ③(内)淡灰色 青灰色	ほぼ完存	杯中心 ずれる	23 91 79
30	高杯	① 17.3 ② 12.65 ③ 17.0	杯部 (内)外ヨコナデ。 (外)底部ヘラ削り、後傾いたナデ。後接合 部ヨコナデ。 (内)底部中央文工具痕。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (外)脚柱部上半部ナゲ後ヨコナデ。 (内)上半部ナゲ。	①2～3mmの砂粒を多く含む ②良 (外)灰色 暗灰色 (内)灰色	完存	淡灰色 自然焼	26 86

種別 番号	器 種	直径 (mm) ①口 径 ②喉 径 ③最大割 ④部 高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎 土	残存状況	備 考	遺物 登録 番号
				② 焼 成 ③ 色 調			
31	有蓋高杯	① 15.5 (受)15.8 ② 10.5 ③ 8.05	立上りは内傾し、受部は体部から伸びて外上方に短く傾く。 脚部はハの字状に開く。器底部内面は強いヨコナデにより円柱状となる。	杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)底部へう割り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部円弧状工具痕を留軌によるナデ削し。 外周に円弧状工具痕を残す。 脚部 (内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を含む 4mm ②良好 ③杯部(内)セピア色 ④(外)暗灰色 (内)セピア色	(口)1/2 軸実存	セット焼 36 77
		① 13.35 (受)15.4 ② 10.0 ③ 8.45		杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)底部へう割り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部円弧状工具痕を留軌によるナデ削し。 脚部 (内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③杯部(内)セピア色 脚部(外)暗灰色 他灰色	ほぼ実存	セット焼 45
32	有蓋高杯	① 13.45 (受)15.5 ② 10.8 ③ 7.7		杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)底部へう割り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部円弧状工具痕を強い留軌によるナデ削し。 脚部 (内外)ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む 5mm大の砂礫有 ②良好 ③(外)暗灰色 暗灰色 (内)暗灰色	ほぼ実存	セット焼 緑色 自然釉
		① 12.2 (受)14.3 ② 9.9 ③ 8.2		杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)底部へう割り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部円弧状工具痕を留軌によるナデ削し。 脚部 (内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③杯部(内)セピア色 脚部(外)暗灰色 他灰色	ほぼ実存	セット焼 灰褐色
33	有蓋高杯	① 13.45 (受)15.5 ② 10.8 ③ 7.7		杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)底部へう割り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部円弧状工具痕を強い留軌によるナデ削し。 脚部 (内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③杯部(内)セピア色 脚部(外)暗灰色 他灰色 (内)暗灰色	ほぼ実存	セット焼 緑色 自然釉
		① 12.2 (受)15.3 ② 10.0 ③ 7.7		杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)底部へう割り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部円弧状工具痕を強い留軌によるナデ削し。 脚部 (内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③杯部(内)セピア色 脚部(外)暗灰色 他灰色	ほぼ実存	セット焼 灰褐色
34	有蓋高杯	① 12.3 (受)14.3 ② 9.9 ③ 8.2		杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)底部へう割り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部円弧状工具痕を留軌によるナデ削し。 脚部 (内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2-3mmの砂礫有 ②良好 ③(内外)淡青灰色	ほぼ実存	口縁部歪 40 90 105
		① 13.45 (受)15.8 ② 11.2 ③ 8.63		杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)底部へう割り、後ヨコナデ。 (内)底部円弧状工具痕。 脚部 (内外)ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む 1-3mmの砂礫有 ②良好 ③(外)灰色 (内)セピア色	(口)3/4 軸実存	セット焼 緑色 35
35	有蓋高杯	① 14.8 ② 10.1 ③ 12.3	脚部はラッパ状に開き、新羅道で外方につまむ。	杯部 (内外)ヨコナデ。 (外)へう割り、後接合部ヨコナデ。 (内)底部不定方向のナデ。 脚部 (内外)ヨコナデ。 (内)上平らなナデ。	①2mm以下の砂粒を多く含む 4mm大の砂礫有 ②灰色	ほぼ実存	杯部(内) 木付 焼痕み 11
		① 10.0	底部でラッパ状に開き、残存部以外径5mmの円孔を2観察。	杯部 風化剥落不明。 (外)底部へう割り、後接合部ヨコナデ。 脚部 (内外)ヨコナデ。 (内)上平らなナデ。	①0.5mmの砂粒を含む 2mmの 砂礫有 ②不良 ③(内外)淡褐色 淡褐色	杯部ほぼ 一部欠 (脚)6/7	33 88
36	有蓋高杯	① 9.7 (受)13.65 ② 15.25	口縁部は外傾、口縁部で僅かに内傾、脚部は丸い。 外部中央に最大割れをもつ。	(内外)ヨコナデ。 (外)口縁部カキ目後ヨコナデ。最大割れ部に1回転半の割れ。後カキ目後ヨコナデ。外部1/3以下平へう割り。 (内)口縁部1条の沈線。後ヨコナデ。底部不定方向のナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 3-4mm大の砂礫有 ②良好 ③(内外)セピア色 灰色 淡青灰色	ほぼ実存	8 83
		① 9.15 ② 12.1 ③ 10.8	口縁部は外反、脚部で厚薄しをもつ。外部中央に最大割れをもつ。	(内外)ヨコナデ。 (外)口縁部成形時の沈線。脚部カキ目後ヨコナデ。外部1/3以下平へう割り。 (内)底部円弧状工具痕を軽くナデ削す。	①1.5mm以下の砂粒を多く含む 5mm大の砂礫有 ②良好 ③暗灰色 灰色	実存	10
37	高杯	① 16.6 ② 9.5 ③ 19.8	口縁部は外反、口縁部で僅かに内傾し、口縁部で成して外傾する。口縁部は内傾する段をもつ。体部は肩部が傾出し底部は丸い。最大割れを有する部位以外径1.5mmの円孔1を外から穿つ。	(内外)ヨコナデ。 (外)口縁部カキ目後傾いヨコナデ。口縁部、肩部上位部体不明の連続的欠文。後接上ヨコナデ。 中央1条と2条の沈線間にカキ目状工具による斜位方向の連続的欠文。体部沈線間連続的欠文。後ヨコナデ。下平へう割り)事々ナデ。 (内)口縁部下方カキ目後、肩部粗なヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 4mm大の砂礫有 ②良好 ③(外)灰色 黄灰色 暗灰色 (内)灰色	ほぼ実存	41 78
		① 8.05 ② 10.0 ③ 18.5	口縁部は外反、底部は丸い。体部は表面で円形。頸部は楕円状を呈し、脚部の把手貼付。	(内外)ヨコナデ。 (外)体部平頭部をヨコナデ成形。後へう割り。中心にへう割り。凸面円筒光腹後カキ目。後傾いヨコナデ。頸部穿孔後口縁部接合、接合部ヨコナデ。 (内)光腹部指成り後ナデ。	①2-3mmの砂粒を多く含む 4mm大の砂礫有 ②良好 ③(内外)淡灰色	実存	自然釉 34 76
38	(脚部)	① 6.8 ② 14.05 ③ 17.25	口縁部は外反、肩部は面をもつ。体部は表面で円形。頸部は表面凸状、背面扁平を呈し、2方向に把手貼付。脚状の把手部隆起。	(内外)ヨコナデ。 (外)体部平頭部をヨコナデ成形。後へう割り。中央に同心円孔を工具痕。凸面円筒光腹後カキ目。側面穿孔、後口縁部接合、接合部ヨコナデ。 (内)体部凹目裏。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)灰白色 黄灰色	(口)1/2 把手子	40

横枕古墳群 鉄製品 (1) (第22回 P L17、18)

(単位: cm)

神器番号	器種	全長	形 状						形 態 の 特 徴	残存状況	備 考	遺物 登録 番号	
			刀 部		茎 部		新 刃						
			長さ	断面形	長さ	断面形	計測部位	幅					厚さ
44	大刀	(87.2)	(73.8)	二等辺 三角形	(13.4)	長方形	刀身元部 刀身中央部 刀身切先部 茎元部 茎中部	3.25 3.0 2.83 1.9 1.24	0.9 0.82 0.56 0.53	磨化するが、遺存状況は比較的良い。刀身元部は刃をもち、全体に精水質が残る。茎部には目釘孔3を認め、	切先部欠 茎中央部 欠	(870) g 木質炭	53
45	刀	(14.04)	(6.8)	二等辺 三角形	(7.24)	長方形	刀身切先部 茎元部	0.7 0.64	0.11 0.48	使用により刀身欠損をする。刀身をもち、	切先部欠	(19.75) g	68
46	刀子	(10.8)	(6.65)	二等辺 三角形	(3.95)	長方形	刀身元部 刀身中央部 茎中央部	1.15 1.0 0.5	0.4 0.27 0.16	刀身元部で背、刃をもち、切先方向へ幅、厚を減らす。	切先部欠 茎部欠	(11.7) g	65
47	刀子	(11.6)	(8.7)	二等辺 三角形	(2.9)	長方形	刀身元部 刀身切先部 茎中央部	1.38 1.05 0.55	0.45 0.29 0.3	磨化する。 刀身元部で背、刃をもち、切先方向へ幅、厚を減らす。	茎部欠	(18.45) g	56
48	刀子	(10.8)	(6.6)	二等辺 三角形	4.2	長方形	刀身元部 刀身中央部 茎底部	1.08 0.95 0.2	0.3 0.2	刀身元部で背、刃をもち、切先方向へ幅、厚を減らす。	切先部欠	(9.95) g	59 ①
49	刀子	(5.5)	(5.5)	二等辺 三角形		長方形	刀身中央部 刀身切先部	0.95 0.9	0.3 0.25		刀身元部 欠 茎部欠	(4.55) g	64 99
50	刀子	(11.16)	(8.4)	二等辺 三角形	(2.76)	長方形	刀身元部 刀身中央部 刀身切先部 茎元部	1.54 1.4 1.08 0.85	0.4 0.32 0.2 0.38	刀身元部で背、刃をもち、	切先部欠 茎元部欠	(18.0) g	57 107

横枕古墳群 鉄製品 (2) (第22~24回 P L18)

(単位: cm)

神器番号	器種	全 長 ① 鎌身部 ② 茎部 ③ 全長	鎌 身 部		茎 部		新 刃		形 態 の 特 徴	残存状況	備 考	遺物 登録 番号		
			平刃形	断面形	断面形	断面形	断面形	断面形					断面形	断面形
			幅	W 幅 T 厚さ	幅	W 幅 T 厚さ	幅	W 幅 T 厚さ					幅	W 幅 T 厚さ
51	鉄 鎌	(15.1) ① 7.85 ② 4.9 ③ (3.5)	腰刀形 平 直	元部 W2.7 T0.25	直 角 長方形	中央部 W0.78 T0.38	方形状	尖端部 W0.3 T0.25	鎌身は先端部からほぼ一定幅をもち鎌身固にいたる。	先端部欠	(20.77) g 木質炭	61		
52	鉄 鎌	(8.25) ① 4.8 ② 1.6 ③ (1.9)	長三角形 平 直	中央部 W2.55 T0.23	腰 状 長方形	中央部 W0.72 T0.31	方 形	端 部 W0.4 T0.3	鎌身は先端部からほぼ一定幅をもち鎌身固にいたる。	先端部欠	(11.27) g	52		
53	鉄 鎌	15.4 ① 6.55 ② 3.5 ③ 5.7	長三角形 平 直	元部 W3.08 T0.15	直 角 長方形	元 部 W0.94 T0.36	方 形	尖端部 W0.35 T0.35	鎌身先端部から急激的に幅を窄し逆刺にいたる。	欠片	(10.15) g	58 ①		
54	鉄 鎌	(13.9) ① 6.5	長三角形 平 直	中央部 W2.32 T0.2	直 角 長方形	元 部 W0.8 T0.25	方 形	中央部 W0.38 T0.38	鎌身先端部から幅を増しながら逆刺にいたる。断面は亀裂、磨損により断面が不明。	鎌身一部 欠	(17.25) g 木質炭	72		
55	鉄 鎌	14.4 ① 5.95 ② 3.05 ③ 5.1	長三角形 平 直	中央部 W2.3 T0.2	直 角 長方形	元 部 W1.0 T0.3	方 形	中央部 W0.41 T0.36	鎌身先端部から幅を増しながら逆刺にいたる。	完存	15.25 g 木質炭 磨蝕の痕	66		
56	鉄 鎌	13.4 ① 6.15 ② 3.75 ③ 3.75	長三角形 平 直	中央部 W2.24 T0.15	腰 状 長方形	中央部 W0.7 T0.35	方 形	中央部 W0.35 T0.3	鎌身先端部から幅を増しながら逆刺にいたる。	完存	15.67 g 木質炭 磨蝕の痕	63		
57	鉄 鎌	(10.3) ① (5.6) ② 3.4 ③ (1.5)	長三角形 平 直	中央部 W2.05 T0.2	直 角 長方形	元 部 W0.74 T0.25	方形状	中央部 W0.45 T0.35	鎌身先端部から幅を増しながら逆刺にいたる。	鎌身一部 欠 茎先端部 欠	(14.6) g 木質炭	59		
58	鉄 鎌	(12.6) ① 8.2 ② 4.3 ③ (2.4)	腰刀形 平 直	中央部 W2.45 T0.2	直 角 長方形	中央部 W0.78 T0.35	方 形	元 部 W0.45 T0.35	鎌身先端部から僅かにふくらを有して逆下、僅かに幅を減じて逆刺となる。	逆刺一部 欠 茎先端部 欠	(23.15) g 木質炭	67		
59	鉄 鎌	(13.3) ① 7.45 ② 3.8 ③ (4.4)	腰刀形 平 直	中央部 W2.9 T0.25	腰 状 長方形	中央部 W0.4 T0.38	方 形	中央部 W0.4 T0.38	鎌身先端部は丸くふくらを有し逆下、僅かに幅を減じて逆刺となる。	茎先端部 欠	(23.81) g	51		
60	鉄 鎌	(10.3) ① 6.5	腰刀形 平 直	中央部 W2.38 T0.2	直 角 長方形	元部 W0.65 T0.25	方 形	中央部 W0.45 T0.25	鎌身先端部からふくらを有して逆下、僅かに幅を減じて逆刺となる。	茎先端部 欠	(18.07) g	68		
61	鉄 鎌	(10.2) ① 3.1 ② (2.6)	長三角形 平 直	上段 W2.25 T0.2	腰 状 長方形	元部 W0.8 T0.4	方 形	尖端部 W0.4 T0.35	鎌身は鈍、一部欠損により形状は不明確。断面は巻き絞の痕が顕著に残存。	鎌身中心 欠 茎先端部 欠	(11.65) g	95		

神田番号	器種	全長 ①總身部 ②脚部 ③蓋部	脚身部		胴部		米部		形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
			平面形	断面計測部位	通利	断面平面形	断面計測部位	断面計測部位				
62	鉄 瓶	(8.5) ① (8.5)	樽蓋形 平 邊	中央部 W2.67 T0.2	扁球					下下1/2欠	(11.87) g	62
63	鉄 瓶	(4.7) ① (4.7)	長三角形 平 邊	元部 W2.5 T0.24	扁球					先端部欠	(6.57) g	54
64	鉄 瓶	(10.2) ① (5.55) ② 3.3 ③ 2.0	樽蓋形 平 邊	中央部 W2.85 T0.2	扁球	台形	中央部 W0.48 T0.4	中央部 W0.48 T0.4		脚身先端 欠 蓋先端部 欠	(20.4) g 木質炭	50
65	鉄 瓶	(10.0) ① (5.25) ② 3.8 ③ 2.35	樽蓋形 平 邊	中央部 W3.0 T0.2	扁球	台形	中央部 W0.75 T0.28	元 部 W0.5 T0.3		脚身先端 欠	(17.1) g 木質炭	71
66	鉄 瓶	(10.55) ① 3.9 ② 5.4 ③ (1.3)	長三角形 平 邊	中央部 W1.0 T0.15		輪 状 長方形	中央部 W0.36 T0.3	中央部 W0.36 T0.27	長頸部。	蓋先端部 欠	(7.25) g	60
67	鉄 瓶	(10.9) ① 2.55 ② (8.35)	樽蓋形 片先邊	中央部 W0.9 T0.25			長方形	中央部 W0.5 T0.35	長頸部。脚身肩部は二段角筒をもつ。肩部中央に巻き絡め痕? その下蓋木質炭を埋め。	蓋部欠	(8.13) g 木質炭 漆粉め痕	72
68	鉄 瓶	(3.65) ① 2.8 ② (0.85)	樽蓋形 両切方邊	中央部 W1.0 T0.2			元 部 W0.5 T0.35		長頸部の脚身部。	脚身肩部 以下欠	(3.65) g	98
69	鉄 瓶	(7.03) ① (6.7) ② (0.25) ③ (2.45)				台形 方 形	元 部 W0.7 T0.27	元 部 W0.4 T0.22	長頸部加部。	脚身～頸部 欠 胴以下欠	3.5 g	72 101
70	鉄 瓶	(1.12) ① (1.31)				台形	胴上位 W0.6 T0.35	中央部 W0.45 T0.3		頸部部	(1.56) g	98
71	鉄 瓶	(2.56) ① (1.05) ② (1.5)				台形	胴下位 W0.65 T0.4	中央部 W0.45 T0.4		頸部部 木質炭	(3.4) g	98
72	鉄 瓶	(2.1) ① (2.1)					方 形	上 位 W0.39 T0.3		胴一帯	(0.72) g 木質炭	97
73	鉄 瓶	(4.3) ① (1.6) ② 2.7				直 角 長方形	胴上位 W0.75 T0.24			頸部～蓋部	(1.5) g 木質炭	109
74	鉄 瓶	(4.45) ① (4.45)						方 形	上 位 W0.47 T0.37	蓋部	(3.45) g 木質炭	96
75	鉄 瓶	(4.1) ① (4.1)						方 形	上 位 W0.42 T0.32	蓋部	(1.87) g	100

横枕古墳群 鉄製品 (3) (第24図 P L18)

(単位: cm)

神田番号	器種	法量	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
76	鉄 斧	L 9.55 W 3.75 T 2.25	鈍化する。後基部の突合せは密着して完全な袋部となる。基部前面は楕円形を呈する。刃部幅は基部幅より狭かに広い。	完好	110.3 g	70
77	鉄 斧	L 10.1 W 3.6 T 2.5	鈍化する。後基部の突合せは密着して袋部となる。基部前面は楕円形を呈する。基部幅と刃部幅はほぼ同じで、平面形は長方形となる。	ほぼ完好	120.7 g	55

横枕52号墳 (第26図 P L20)

神田番号	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	① 粘土 ② 焼成 ③ 色 調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	磁石	L (13.8) W 8.4 T 5.1	自然石の4角使用。其餘磨使用。端部一帯成形面。使用痕が深く中央部で円弧となる。	③ 淡灰色	一端部欠	(818) g	4

SK-03 (第30図 P L21)

種別 番号	部 名	数量 (cm) ①口 径 ②底 径 ③最大径 ④部 高	形 態・手 法 の 詳 細	① 胎 土 ② 焼 成 ③ 色 調	残存状況 備 考	遺物 番号	
1	股鉄	① 4.2 ② 11.75 ③ 13.2	口縁部は外積して肩部は丸い。底部は表面で円形。側面は表面八角、付置部で環状の肥子を両側に貼付。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部平坦面をヨコナデ成形、後へう削り。中心にへう起し。凸面凹面光順後カキ目、後1~2回する沈積を3段。沈積間にカキ目状工具による連続状突文。側面穿孔のち口縁部を凸、接合部ヨコナデ。肥子は凹成形後貼付。一部工具ナデ。両縁部粗なナデ。 (内)腰部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ② 3mmの砂粒有 ③良砂 ④(外)淡灰色 灰色 (内)淡灰色	(7) 一部欠	自然輪	1

SK-04 (第33図 P L22)

1	蓋杯 杯蓋	① 15.1 ④ 4.8	天井部から内湧して下り口縁部は丸い。 (内)外ヨコナデ。 (外)天井部へう起し。後ナデ。後時計廻りのへう削り。中心にへう起し。底。中心にへう起し。底。 (内)天井部不定方向のナデ。円筒状工具。口縁部1本の沈積後ヨコナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む 3mm の砂粒有 ②良 ③(内)淡灰色	ほぼ完存	12 16 19	
2	蓋杯 杯身	①(13.6) (受)16.1 ④ 5.5	立上りは内積し縁部は丸い。受部は体部から伸びて、外上方に広がる。外上方に広がる。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部へう起し。後不定方向のナデ。後外周時計廻りのへう削り2~3回。 (内)底部不定方向のナデ、圧板。円筒状工具。	① 1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)灰色 褐色色 (内)灰色	(口)1/4 (体)3/5	5 15 17 23	
3	蓋杯 杯身	① 13.2 (受)15.6 ④ 5.15	底部は丸い。 (内)外ヨコナデ。 (外)底部逆時計廻りのへう削り後丁寧なナデ。 (内)底部一方方向のナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を含む 2mm の砂粒有 ②良 ③灰白色	ほぼ完存	13	
4	有蓋高杯	① 12.6 (受)15.1 ② 10.9 ④ 10.5	立上りは内積し縁部は丸い。受部は体部から伸びて、外方に広がる。 脚部はハの字状に開き、中位で内湧気味に下り縁部は先細り丸い。 杯蓋 (内)外ヨコナデ。 (外)底縁へう削り後接合部ヨコナデ。 (内)底部不定方向のナデ。円筒状工具。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (内)上位不定方向のナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 4mm大の砂粒有 ②良 ③(内)灰色	(口)3/4 (脚)完存	自然輪 セット輪	8 21

横杖42号墳 (第38図 P L28)

1	礎石		口縁部横下位に縦状文、浮文を貼付。黄部残存部に透し窓を有する。 (内)外ヨコナデ。 (外)筒状カキ目。	① 0.5~1mmの砂粒を含む 3~4 mm大の砂粒有 ②良 ③(内)乳白色	片	1 21 22
2	(伴部)		残存部に外積約1.5cmの円孔1を有する。 (内)筒状カキ目、後連続状突文。 (内)外ヨコナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む 1mm以上の砂粒有 ②良 ③(内)灰色	(脚)1/11 (体)一部	20
3	礎石	L 11.2 W 7.38 T 2.6	自然孔に1面使用痕。 長柄一方向使用痕。他は縁部丸面。 (内)外ヨコナデ。	③黄褐色	(245)g	57

横杖42号墳 周溝内 (第39図 P L28, 29)

4	蓋	① 12.0 ④ 5.5	天井部は丸い。天井部から内湧して口縁部は裏下り下り。蓋部は内積する凹面をもつ。天井部と口縁部を繋ぐ縁は鋭く鋭い。 (内)外ヨコナデ。 (外)天井部縁へう削り、後6時時計廻りのへう削り。 (内)天井部縁部を繋ぐナデ。後一方方向のナデ。	① 1~2mmの砂粒を多く含む 4mm大の砂粒有 ②良 ③(内)淡灰色	(口)1/2 (内)完存	(内) 乗付巻	24
5	蓋	①(11.9) ④(5.48)	天井部は丸い。 (内)外ヨコナデ。 (外)天井部1/2逆時計廻りのへう削り。 (内)天井部縁部を繋ぐナデ。	① 1~2mmの砂粒を多く含む ②良 ③(内)淡灰色	(口)1/7 縁1/2	32	
6	蓋	① 11.7 ④ 6.0	天井部は丸い。 (内)外ヨコナデ。 (外)天井部逆時計廻りのへう削り。 (内)天井部縁部を繋ぐナデ。	① 1~2mmの砂粒を多く含む 6mm大の砂粒有 ②良 ③(内)淡灰色	ほぼ完存	30	
7	蓋	①(11.7) ④ 5.4	天井部は丸い。 (内)外ヨコナデ。 (外)天井部1/2逆時計廻りのへう削り。 (内)天井部縁部を繋ぐナデ。	① 1~2mmの砂粒を多く含む 4mm大の砂粒有 ②良 ③(内)灰色	1/2	セット履	4
8	有蓋高杯	①(10.45) (受)12.6 ② 8.1 ④ 9.55	立上りは内積。縁部は内積して段をもつ。受部は体部から伸びて、外方に広がる。杯蓋部は丸味をおびる。 杯蓋 (内)外ヨコナデ。 (外)底縁へう削り後接合部粗なヨコナデ。 (内)底部カキ目後ナデ。後縁部を繋ぐナデ。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (外)カキ目。	① 1mm以下の砂粒を含む 2.5mm の砂粒有 ②やや不良 ③(内)乳白色 淡灰色	(口)1/8 (杯)1/3 (脚)5/6	28 29	
9	有蓋高杯	① 10.2 (受)12.3 ② 7.75 ③ 9.2	脚部はハの字状に外反し、縁部は裾前で段を有し周部でカギ形に広がる(8・9)部と、側面をもつ(11)がある。方形の透し窓を3方向にもつ。杯部外面(9・10)、脚部内面(11)にへう起し工具によるへう起しを施す。 杯蓋 (内)外ヨコナデ。 (外)底縁へう削り後接合部粗なヨコナデ。 (内)底部ナデ後縁部を繋ぐナデ。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (外)カキ目後ヨコナデ。	① 1~2mmの砂粒を多く含む 3~6mm大の砂粒有 ②良 ③(内)灰色	ほぼ完存	へう起し	23 34
10	有蓋高杯	① 9.9 (受)12.2 ② 7.45 ④ 9.2	杯蓋 (内)外ヨコナデ。 (外)底縁へう削り後接合部粗なヨコナデ。 (内)底部ナデ後縁部を繋ぐナデ。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (外)カキ目後ヨコナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 4~5mm大の砂粒有 ②良 ③(内)淡灰色	(口)3/4 (脚)3/4	へう起し	31 35

構種番号	種類	法量 (cm) ① 1 倍 ② 2 倍 ③ 最大断面 ④ 高さ	形態・手法の特徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
11	有蓋高杯	① 8.1 (丸)11.9 ② 8.4 ③ 8.0	杯部 (内)外ヨコナデ。 (外)底部回転へう割り後縁台形ヨコナデ。 (内)底部ナデ後回転するナデ。 脚部 (内)外ヨコナデ。 (外)キキ目。	① 1-2mmの砂粒を多く含む 4mm大の砂粒含む ② 良 ③ (内)淡灰色	3/4	へう記号	27 28
12	壺	② 12.35	体部、中位に最大断面をもち、体部上段2条の沈線間にハケ状工具による連続縦文。残存部に遺し意1を確認。	① 1-2mmの砂粒を多く含む 4mm大の砂粒含む ② 良 ③ (内)淡灰色	体部上半 1/5 体部下半 1/2		36

横枕53号墳 (第45図 P L 33)

1	壺	① (10.6) ② (13.4)	口縁部は外反する。 最大断面を1/3上位にもつ。	(内)外ヨコナデ。 (外)体部下半キ目、後縁ナデ。 (内)底部叩き出で工具痕ナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 3mmの砂粒含む ② 良 ③ (内)淡灰色	(口)2/5 (底)2/5	6 7 8
---	---	----------------------	-----------------------------	---	--	------------------	-------------

横枕54号墳 (第48図 P L 35)

1	(口縁部)	① (12.6)	L線部上位に深い段をもつ。	(内)外ヨコナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む ② 良 ③ (外)褐色 (内)淡灰色	(口)1/14	3
2	(底部)			(内)外ヨコナデ。 (外)底部回転へう切り後ナデ。中心にへう起し版。 (内)底部回転するナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ② やや小良 ③ (内)淡灰色	底部完存	8

横枕55号墳 (第54図 P L 39)

1	蓋杯 杯身	① (12.2) ② (4.9)	立上りは内傾し蓋部は外方。受部は杯部から伸びて、外方へ直線に納める。底部は平直。	(内)外ヨコナデ。 (外)底部へう割り後縁台形へう割り。 (内)底部円弧文工具痕。	① 0.5mmの砂粒を多く含む 2.5 mmの砂粒含む ② 良 ③ (内)淡灰色	(口)1/6 (杯)1/6	4 23 56
2	(口縁部)	① (15.4)	高杯。L線部は外傾し、端部は先細る。	(内)外ヨコナデ。 (外)底部へう割り。	① 0.5mmの砂粒を多く含む 2- 3mmの砂粒含む ② 良 ③ (外)淡灰色 (内)灰色	(口)一部 (杯)1/6	自然物 61
3	壺	① (13.8) ② (17.6)	L線部は外反、端部で下下に肥厚する。	(内)外ヨコナデ。 (外)体部叩き出で上半ヨコナデ。 (内)体部叩き出で工具痕。底部不定方向のキ目。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む 1-2mmの砂粒含む ② 良 ③ (内)暗褐色 淡灰色 (外)淡灰色	(口)1/8 (外)1/7	3 13 17 22 34 47
4	(体部)	② (12.9)	1条のへう起し沈線2段間に連続縦文。	(内)外ヨコナデ。 (外)連続縦文後ヨコナデ、又はナデ。	① 0.5mmの砂粒を多く含む 1.5 mmの砂粒含む ② 良 ③ (内)淡灰色	(口)1/7 (外)1/9	6
5	(体部)	② (11.3)	体部最大断面段の沈線間に連続縦文。残存部に遺し意1を確認。	(外)キキ目。 (内)ヨコナデ。胴部ナデ、頸部圧痕。	① 1mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒含む ② 良 ③ (内)淡灰色	(外)1/5 自然物	12

横枕55号墳 周溝内 (第55図 P L 39)

6	蓋杯 杯身	① 11.5 ② (13.5) ③ 4.85	立上りは長く、真上に伸びて端部で折るもつ。 受部は杯部から伸びて横位に傾く。	(内)外ヨコナデ。 (外)底部回転へう割り。中心にへう起し版。 (内)底部回転するナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 5mm大の砂粒含む ② 良 ③ (内)淡灰色	(口)2/3 他完存	10 11
---	----------	------------------------------	---	--	---	---------------	----------

古墳築造以前及び旧地表面・旧地表面除去後出土遺物 (第69、70図 P L 48、49)

1	(口縁部)	① (20.2)	口縁部で大きく肥厚、5条の凹線を描く。	全体に風化剥落不明瞭。 (内)外ヨコナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 2-3mmの砂粒含む ② やや不良 ③ (内)黄褐色	1/10	A55- 13
2	(口縁部)	① (19.0)	無彫文。口縁部は端部で肥厚しL線部平直な面をもつ。	(外)端部上位へう割り下位による独立した5条の沈線後ヨコナデ。口縁部ナデ。 (内)凹線不明瞭。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 3mmの砂粒含む ② 良 ③ (外)暗褐色 (内)淡褐色	1/12	黒塚有 A55- 30
3	(口縁部)	① (27.4)	高杯。内湾する口縁は端部で水平に肥厚、平坦な面をもつ。	風化剥落不明瞭。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ② 不良 ③ (内)淡褐色	1/10	A28- 51
4	(頸部)			風化剥落不明瞭。 (外)下位2条の沈線。 (内)縦位ハケ目線-器ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む 5mm 大の砂粒含む ② 良 ③ (内)暗褐色	1/7	S98- 43
5				(外)縦位不定方向のハケ目。後2条、4条の沈線間にへう工具による連続縦文。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 3mmの砂粒含む ② やや不良 ③ (外)淡褐色 (内)暗褐色	1/5	黒塚有 S54- 27 S54- 32
6	(底部)	② (6.0)	平底。	(外)縦位へう起し、下位横位のナデ。底面ナデ。 (内)下ナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む ② やや不良 ③ (内)乳白色	(厚)1/6 (底)1/9	A24- 12
7	(底部)	② (5.0)	平底。	(外)縦位へう起し後下位。底面ナデ。 (内)丁寧ナデ。	① 0.5mmの砂粒を含む 3mmの 砂粒含む ② 良 ③ (外)乳白色 (内)淡褐色	1/4	黒塚有 S84- 3

押印 番号	器 種	法量 (cm) ①口 径 ②底 径 ③最大周径 ④重 量	形 態・手 法 の 特 徴	① 胎 土 ② 胎 色 ③ 色 調	残存状況	備 考	遺物 登録 番号
8	(底部)	② 5.9	平底。 (内)縦位へうろき後下位、底部ナデ。 (内)ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ①やや不良 ②(内外)淡褐色	1/2	黒焼存	558- 42
9	(底部)	②(5.0)	平底。 (外)ハケ目痕、ナデ。下位縁方向のT具痕。 (内)ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内外)淡褐色	1/5	黒焼有	428- 88
10	(腰部)		(外)縦位直線連続文。 (内)ナデ。	①0.5mmの砂粒を多く含む 1mm の砂粒有 ②やや不良 ③(外)黄褐色 (内)暗灰色	一部		508- 2
11	石鏝	L (1.85) W 1.28 T 0.29	無彫痕。	①暗灰色	尖角部欠	ヤオナイト (0.471)g	526- 48
12	磁石	L (12.15) W (2.17) T 2.5	自然石の2面に使用痕。長 軸両端部、1側面自然瓦。	①肌焼灰色	一側部残	(78)g	534- 9
13	石鏝	L 8.1 W 6.0 T 1.90	扁平な自然石の両端部加工 痕。	①淡褐色	完存	128g	A区- 29
14	磁石	L 13.64 W 5.1 T 3.6	自然石の1面に使用痕。	①淡褐色	完存	398g	424- 91
15	磨石	L 8.9 W 7.55 T 4.37	自然石の1面に使用痕。 両面中央部凹む。	①淡褐色	完存	328g	A区- 34

遺構外 (第73図 P L51)

1	蓋杯 杯蓋	① 13.8 ④ 4.4	口縁部は外側、縁部は丸縮 る。	(内外)ヨコナデ。 (外)天井部時計廻りのへう削り。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②良 ③(内外)灰色	(口)1/5 (天)1/4	448- 112
2	高杯 (口縁部)	①(13.9)	高杯。 後下位ハケ状工具による波 状文。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部逆時計廻りのへう削り。 (内)口縁部了部ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む 4mm 大の砂粒有 ②良 ③(内外)灰色	1/8	536- 2
3	(脚部)	②(21.4)	残存部に三角形の通し筋を 3方向に確認。	(内外)ヨコナデ。 (外)カキ月後カキ目工具による波状文を2段。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(内外)淡灰色	1/12	外-1
4	石皿	L 14.65 W 12.0 T 5.6	自然磨の 面使用。	使用により中央部大きく凹む。	①淡褐色	完存	1100g 外-2

写真図版
(PLATE)





1. 調査地遠景（東南東上空から）



2. 調査地遠景（西北西上空から）



1. 平成11年度調査地全景 (東から)



1. 横枕43号墳 調査前 (西から)



2. 横枕43号墳 調査後 (西から)



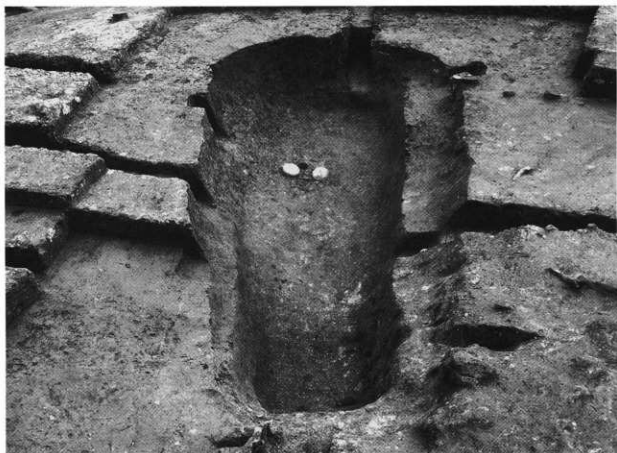
1. 横枕43号墳 増丘断面(1)
(東南東から)



2. 横枕43号墳 増丘断面(2)
(南東から)



3. 横枕43号墳
第1主体部断面
(南南東から)



1. 横枕43号墳 第1主体部 (北北西から)



2. 横枕43号墳 第1主体部内遺物出土状況 (北北西から)

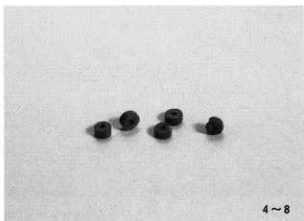


3. 横枕43号墳 第1主体部直上出土遺物



2

3



4~8

4. 横枕43号墳 第1主体部内出土遺物



1. 横枕44号墳 調査前 (南から)

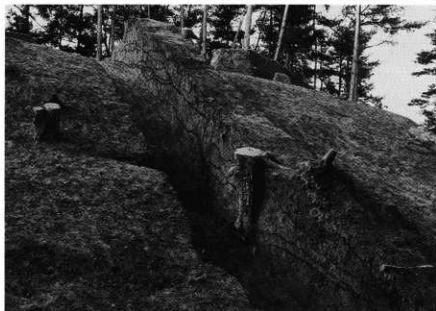


2. 横枕44号墳 石室検出状況 (西南西から)

1. 横枕44号墳 墳丘断面(1)
(西から)



2. 横枕44号墳 墳丘断面(2)
(南南西から)



3. 横枕44号墳
石室内石材転落状況
(南西から)





1. 横杖44号墳 石室内遺物出土状況 (南西から)



1. 横枕44号墳 石室閉塞部 (南西から)



2. 同左 (北東から)



3. 横枕44号墳 石室羨道部 (南西から)



4. 同左 (北東から)



5. 横枕44号墳 石室右側壁(1) (北西から)



6. 横枕44号墳 石室玄門部(1) (北西から)



7. 横枕44号墳 石室奥壁 (南西から)



8. 横枕44号墳 石室右側壁(2) (北西から)



1. 横枕44号墳 石室左側壁(1) (南東から)



2. 同左(2) (南東から)



3. 横枕44号墳 石室玄門部(2) (南東から)

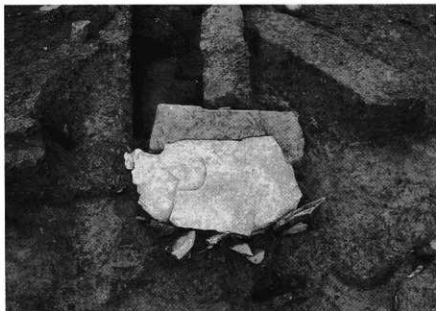


4. 同左(3) (南東から)



5. 横枕44号墳 石室石材除去後 (南西から)

1. 横枕44号墳 石棺検出状況
(南西から)

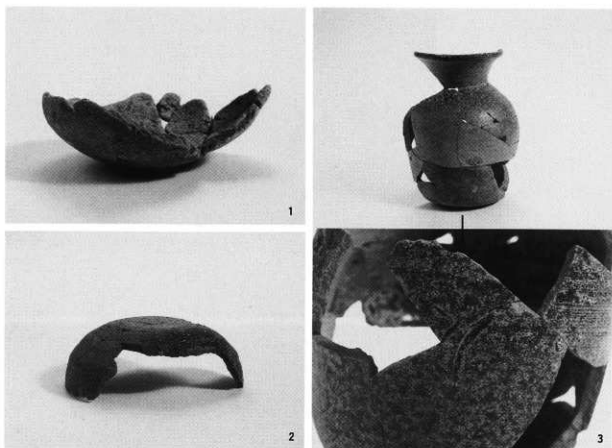


2. 横枕44号墳
石棺蓋石除去状況
(南東から)



3. 横枕44号墳
石棺墓壇完掘状況
(南東から)

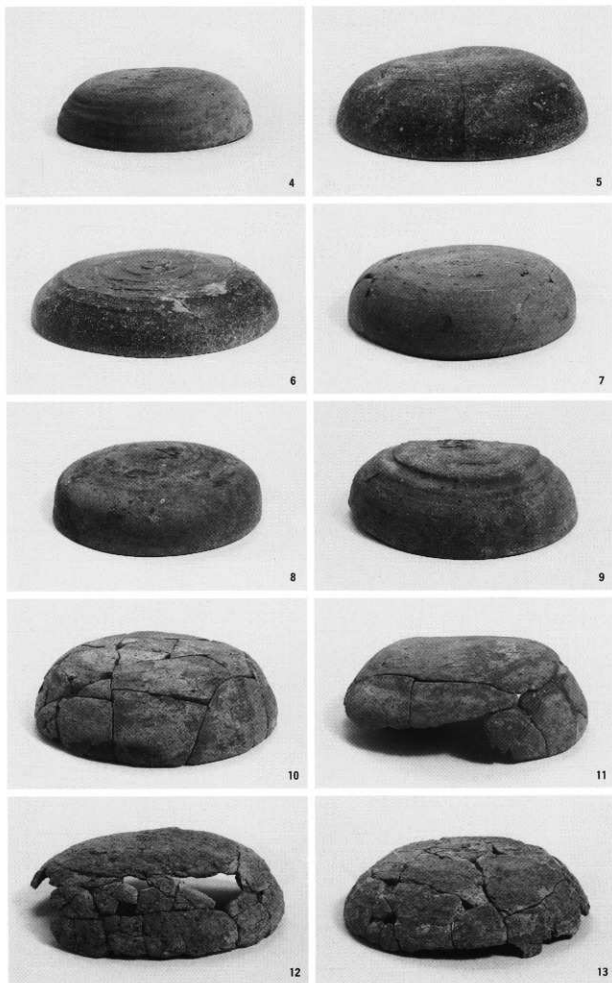




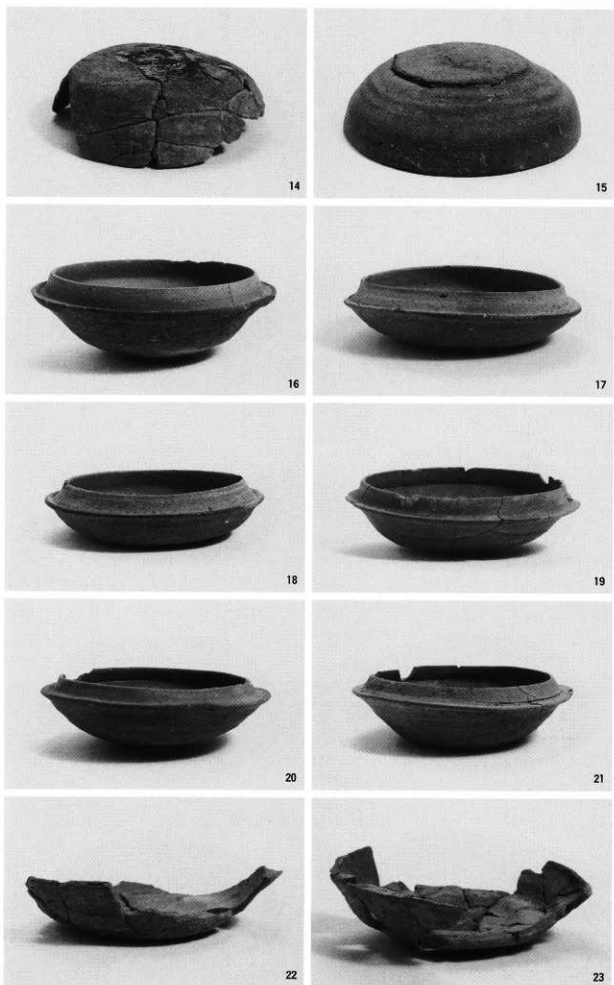
1. 横枕44号墳 出土遺物



2. 横枕44号墳 石室内出土遺物(1)



1. 横枕44号墳 石室内出土遺物(2)



1. 横枕44号墳 石室内出土遺物(3)



1. 横枕44号墳 石室内出土遺物(4)



1. 横枕44号墳 石室内出土遺物(5)



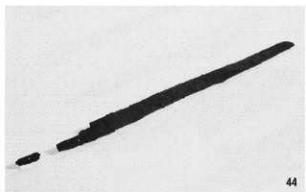
41



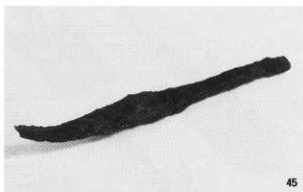
42



43



44



45



46



47

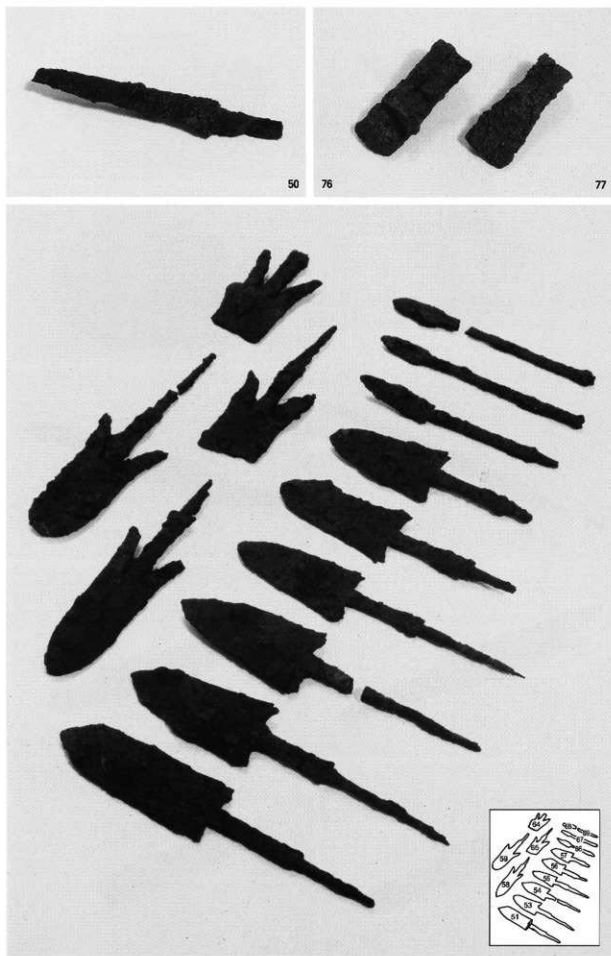


48



49

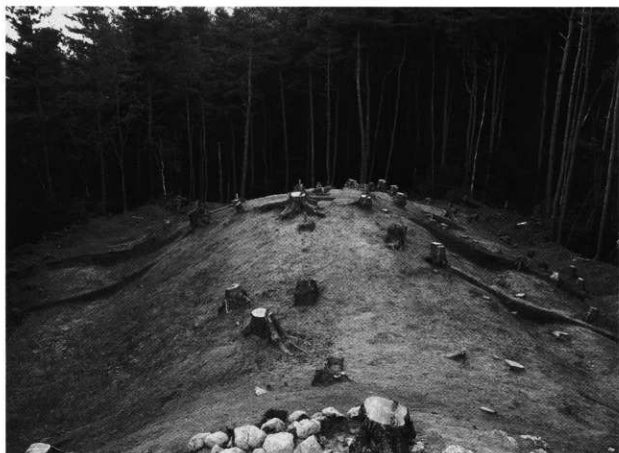
1. 横枕44号墳 石室内出土遺物(6)



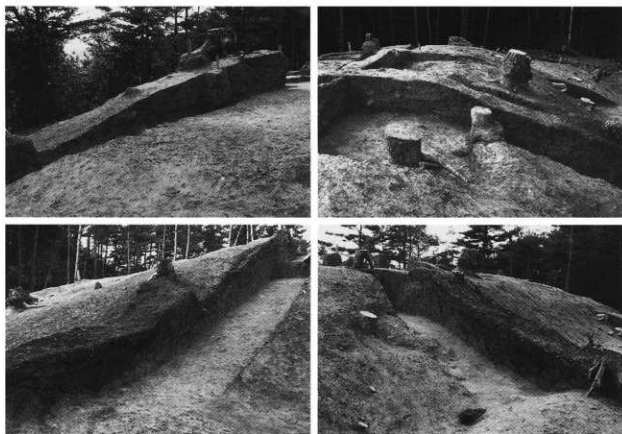
1. 横枕44号墳 石室内出土遺物(7)



1. 横枕52号墳 調査前 (北東から)



2. 横枕52号墳 墳丘検出状況 (北東から)



1. 横枕52号墳 墳丘断面 (北東から；東北東から
南東から；北東から)



2. 横枕52号墳 調査後 (北から)



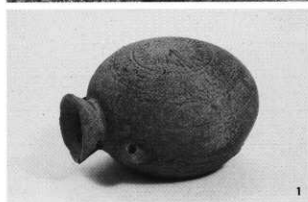
3. 横枕52号墳 出土遺物



4. SK-01 (北西から；南西から)



1. SK-02 (南西から; 南西から)

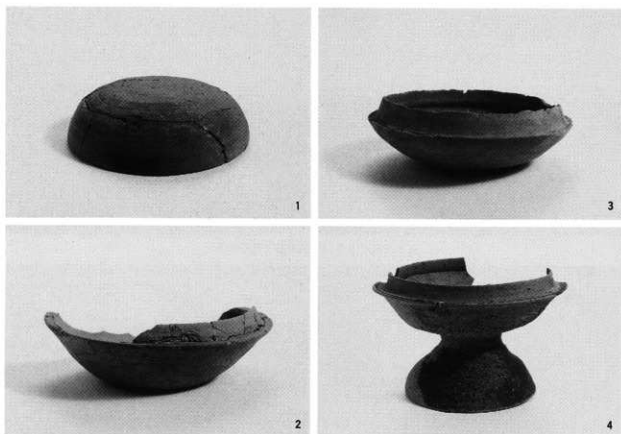


1

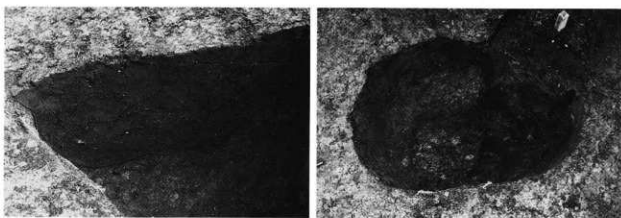
2. SK-03 (南東から; 出土遺物; 北西から)



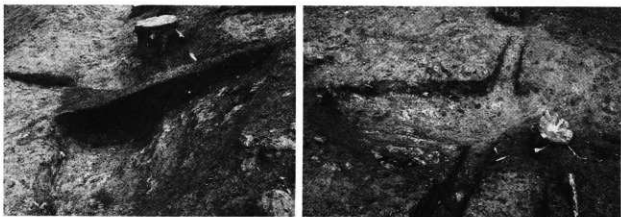
3. SK-04 (西から; 北西から)



1. SK-04 出土遺物



2. SK-05 (北から；北北東から)



3. SK-06 (西南西から；南南東から)



1. P-01断面 (南から)



2. P-02断面 (北から)



3. P-03断面 (北から)



4. P-05・04断面 (北西から)



5. P-01~05完掘状況 (南東から)



1. 平成12,13年度調査地全景 (航空写真)(横杖56号墳を除く)



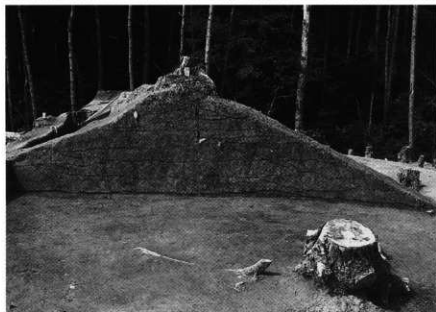
1. 横枕42号墳 調査前 (北西から)



2. 横枕42号墳 墳丘検出状況 (南から)



1. 横枕42号墳 墳丘断面(1)
(南西から)



2. 横枕42号墳 墳丘断面(2)
(南東から)



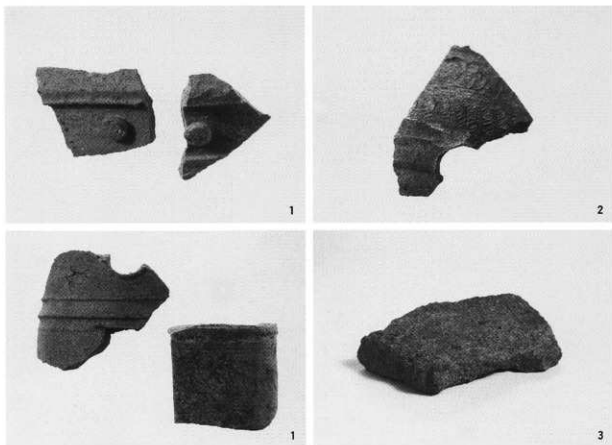
3. 横枕42号墳 周溝断面
(東南東から)



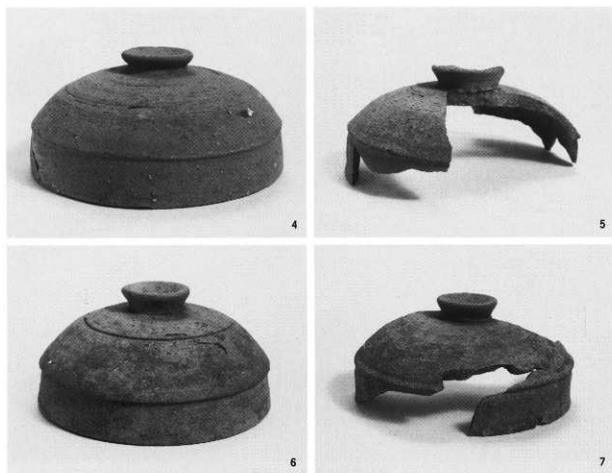
1. 横枕42号墳 遺物出土状況 (南東から)



2. 横枕42号墳 調査後 (北西から)



1. 横枕42号墳 出土遺物



2. 横枕42号墳 周溝内出土遺物(1)



1. 横枕42号墳 周溝内出土遺物(2)



1. 横枕53号墳 調査前 (南東から)



2. 横枕53号墳 墳丘検出状況 (航空写真)

1. 横枕53号墳 墳丘断面(1)
(西から)

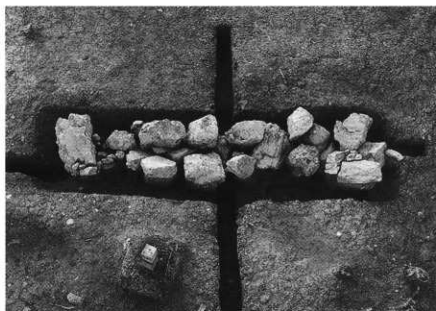


2. 横枕53号墳 墳丘断面(2)
(南西から)



3. 横枕53号墳 周溝断面
(南から)





1. 横枕53号墳 第1主体部
検出状況
(南東から)



2. 横枕53号墳 第1主体部
断面
(南西から)



3. 横枕53号墳 第1主体部
完掘状況
(北西から)



1. 横枕53号墳 第1主体部石組み状況 (北東から；南西から)



2. 横枕53号墳 第1主体部内遺物出土状況 (南東から)



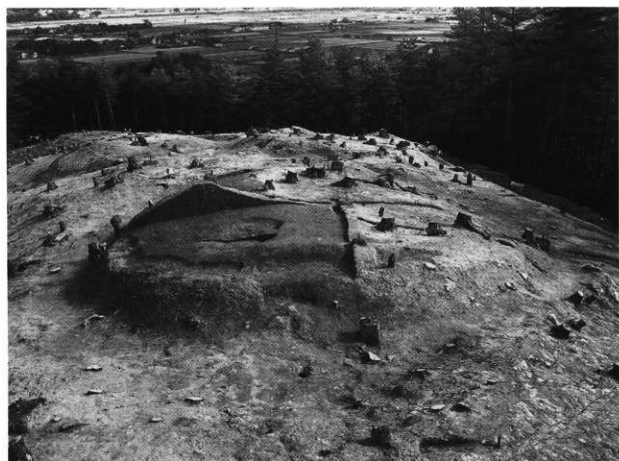
3. 横枕53号墳 第1主体部内出土遺物



4. 横枕54号墳 調査前 (南東から)



1. 横枕54号墳 墳丘検出状況 (北西から)



2. 横枕54号墳 調査後 (北西から)



1. 横枕54号墳 墳丘断面(1) (東南東から；東北東から)



2. 横枕54号墳 墳丘断面(2) (東から；南東から)



3. 横枕54号墳 墳丘盛土下溝状遺構断面 (北東から)



1



2

4. 横枕54号墳 出土遺物



1. 横枕55号墳 調査前 (北から)



2. 横枕55号墳 墳丘検出状況 (航空写真)



1. 横枕55号墳 墳丘断面(1) (北から；北北東から)



2. 横枕55号墳 墳丘断面(2) (南南東から；南南東から)



3. 横枕55号墳 墳丘断面(3) (南南東から；南南東から)



4. 横枕55号墳 墳丘断面(4) (南から；南南東から)



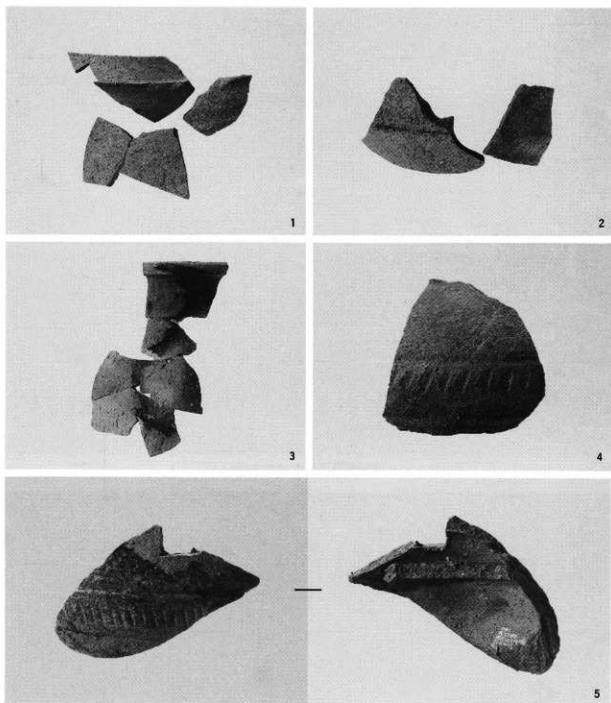
1. 横枕55号墳
墳丘検出状況
(北から)



2. 横枕55号墳 調査後
(北北西から)



3. 横枕55号墳
遺物出土状況
(西南西から)



1. 横枕55号墳 出土遺物



2. 横枕55号墳 周溝内遺物出土状況 (南東から)



3. 横枕55号墳 周溝内出土遺物



1. 横枕56号墳 調査前 (北北東から)



2. 横枕56号墳 調査後 (北東上空から)

1. 横枕56号墳 墳丘断面(1)
(南から)



2. 横枕56号墳 墳丘断面(2)
(南南西から)



3. 横枕56号墳
石室内埋土断面
(北北東から)





1. 横枕56号墳 墳丘検出状況 (南南西から)



2. 横枕56号墳 墳丘盛土・裏込土除去後 (東南東から)



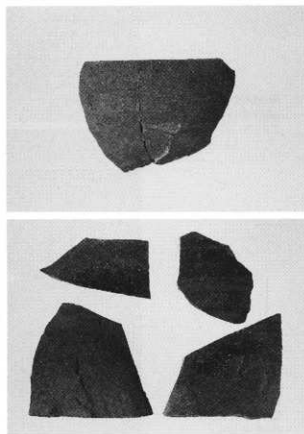
3. 横枕56号墳 石室南西壁 (北北東から)



4. 横枕56号墳 石室北西壁 (東南東から)



5. 横枕56号墳 石室北西壁石材設置状況 (南南西から)



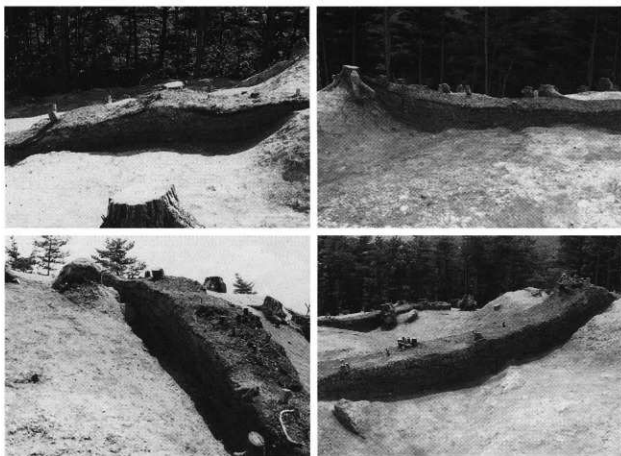
6. 横枕56号墳 出土遺物



1. 横枕57号墳 調査前 (南東から)



2. 横枕57号墳 調査後 (南東から)



1. 横枕57号墳 墳丘断面 (北東から；北から
西から；北北西から)



2. 横枕58号墳 調査前 (南西から)



1. 横枕58号墳 調査後 (南から)



2. 横枕58号墳 墳丘断面 (東南東から)



3. 横枕58号墳 石棺検出状況 (東から)



4. 横枕58号墳 石棺断面(1) (東から)



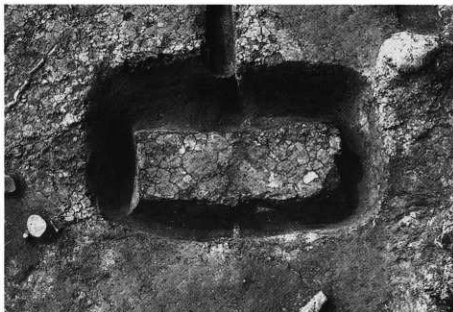
5. 横枕58号墳 石棺断面(2) (北から)



1. 横枕58号墳
石棺掘下状況(1)
(東から)



2. 横枕58号墳
石棺掘下状況(2)
(北から)



3. 横枕58号墳
石棺基壇完掘状況
(東から)



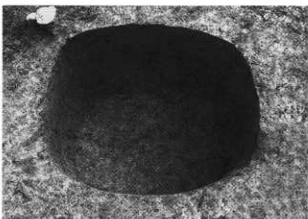
1. SK-07 (北東から；南西から)



2. SK-08 (南西から；南西から)



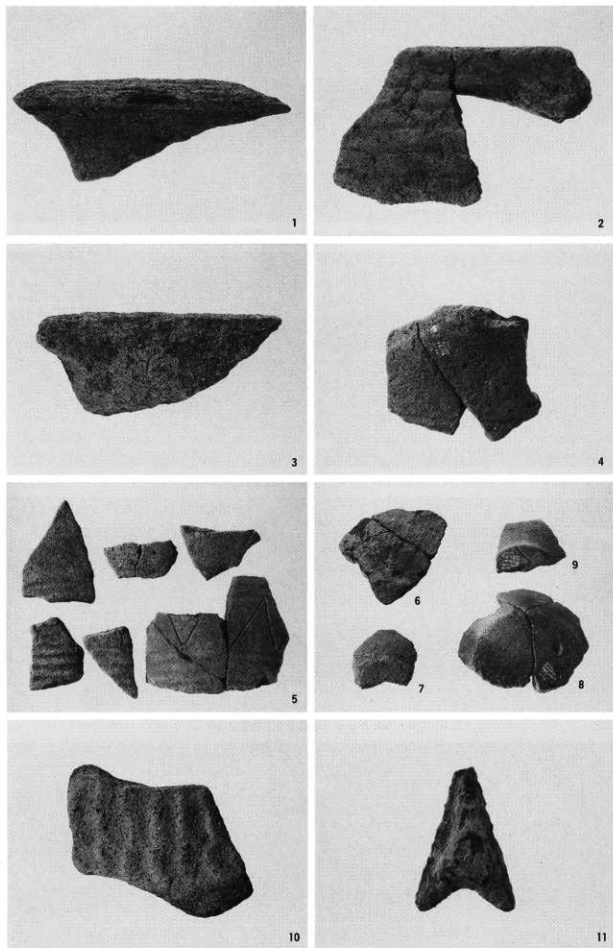
3. SK-09 (南東から；北東から)



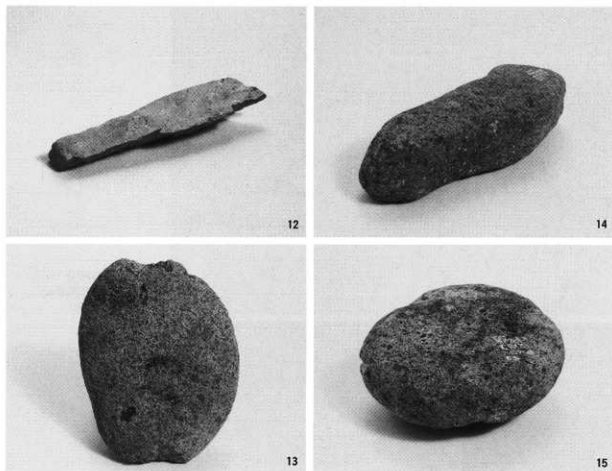
4. A区 調査前 (北西から)



5. A区 遺物出土状況 (東南東から)



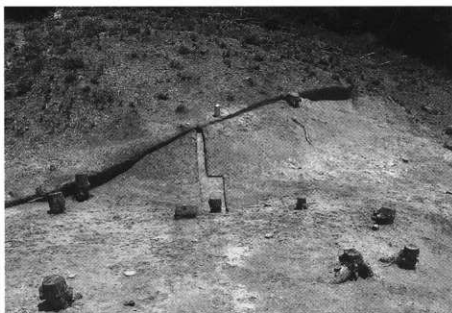
1. 各古墳築造以前 出土遺物(1)



1. 各古墳築造以前 出土遺物(2)



2. 横枕41号墳 調査前 (北西から)



1. 横杖41号墳
調査範囲調査後
(北西から)



2. 横杖41号墳 周溝断面
(南西から)

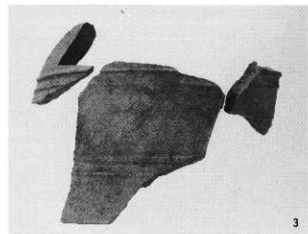


3. B区 調査前
(南東から)

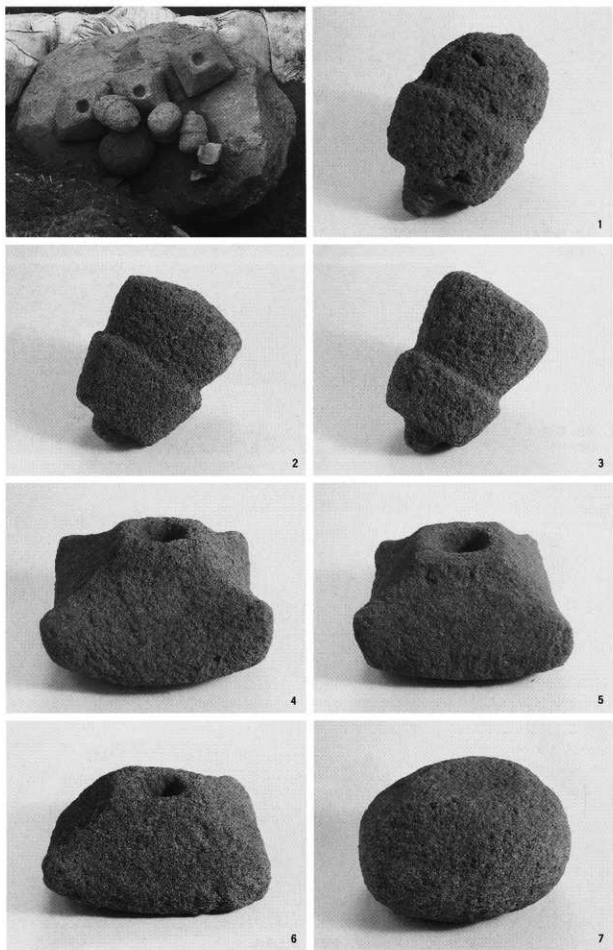
1. B区 調査後
(南東から)



2. B区 断面
(西から)



3. 遺構外 出土遺物



1. 五輪塔出土状況（西から）及び出土五輪塔

報 告 書 抄 録

ふりがな	とっとりし よこま(らこみんぐん)							
書名	鳥取市 横枕古墳群 I							
副書名	浄水施設整備事業に係る横枕41～44、52～58号墳の発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山田真宏 神谷伊鈴							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL (0857) 23-2410							
発行年月日	西暦 2002年 3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
よこま(らこみんぐん) 横枕古墳群	とっとりしよこま(ら) 鳥取市横枕 とっとりしよこま(ら) 鳥取市上味野	31201					合計5,051	浄水施設整備 に伴う調査
43、44、52 号墳				35° 27′ 22″	134° 11′ 34″	19990715 ～ 19991229		
42、55、58、 54、53、57 号墳				35° 27′ 21″	134° 11′ 40″	20000418 ～		
56号墳				35° 27′ 12″	134° 11′ 42″	20001019		
41号墳				35° 27′ 19″	134° 11′ 43″	20010423 ～ 20010530		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
横枕古墳群	古墳	古墳時代後期 弥生時代中期 ～後期	古墳 土坑 ピット	11基 9基 5基	土師器片 須恵器 蓋杯、有蓋高杯 無蓋高杯、壺、埴瓶 甕 鉄製品 大刀、刀子、鉈 鉄鏃、鉄斧 石製品 白玉 砥石 石籬 五輪塔 弥生土器			

鳥取市 横枕古墳群 I

浄水施設整備に係る
横枕41～44、52～58号墳の発掘調査

平成14年3月 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団

印刷所 株式会社 矢谷印刷所
